

茶屋の神さんに、クリーム何とか云ふ化粧を貰ひ、夫れに薄黒を少し交せて頬に塗り、相貌を少し變へ、チャンと戦鬪準備をして敵軍今や來ると待ち掛けて居たらば午前八時頃から遣つて來て九時少し前には十三人ワイワイと下座敷まで攻め寄せて來た、ソコデ直ぐに一同を二階に呼び上げ扱て云ふには、庵主も柄にもなく身分不相應の經濟問題に啄を容れて茲に五年であることは皆お前共の知るところである。夫に付き何の因縁か、お前方に心にも無い借りを拵へ、永い間苦しめたは頗る本懐に背く譯であるが、彼の問題も本年で先づ片付いたから、此冬は不完全ながら、一度拂ひを片付けよう、今日來て貰ふた譯だが是に一昨日から庵主の經世上に容易ならぬ事が發生した、夫は兼て多少の關係を持つて居つた、某々銀行が俄かに困難状態に陥り、此の兩三日は夜の目も寝ずに救済に奔走して居たが大勢の傾く處如何とも仕方なく、トウ、昨日を以て支拂停止をするに至つた、而して遺憾なことには、諸君も知る庵主の商賣の外國輸入品の中で、陸軍の築城本部へ納入した、サーチライトと云ふ探海燈の代金、七萬五千圓餘を彼の銀行

に預け入れて置いたものが俄然として動かされぬことになつて仕舞ふた第一、お前方に仕拂ふことの出來ぬより、外國に對して不拂すれば、庵主の商賣は其日限りに停止されて仕舞ふ次第、故普通尋常の男なら腹でも切りた、い心持がして、昨夜來、千々に心を碎く處である、併し古くより關係のある銀行故、夜を日に紹いで整理をする筈なれば、お前方も一つの災難に遭ふたと、惘め何事も云はずに此の冬を越させて呉れ、庵主は幼氣去りて三十年、手に下げて頼むことは是が始めて、顔色變へて騒いだことも是れが始めて、と頗る嚴然として、其の中に萬斛の憂と煩悶あるが如く、粧ふて雨垂吹さに吹き立てた是で、クリーム化粧の効驗顯著にして一同の者、ジツト庵主の顔を視詰めて一言の挨拶もなく、呼吸を合せた如く、大きな溜め息を吐いて、其内の一人がドウデス皆さんお咄を伺つて私共も屹驚して、マダ胸がドキドキする位、今無理に願つた處で、旦那もドウと云ふお考へも付くまいから、何れとも春の御相談にしては如何でせうと云ふと、讀會省路滿場一致の異議なし、くで此法螺がズドンと當りて、安々と良き春を迎へ、夫から一月の未

に、二度催促した奴はあつたが、好加減に胡魔化して居る内に、二月の中頃金の都合も付いたから、何とか面白くして返して遣らうと思ふて、他の借金を拂ふた跡に彼の十三人に對し左の手紙を書いた、

汝等、高利貸若くは夫同様の奴等にて、三月縛り、二割の高利を三年間食り、已に元金以上の利得をしながら、昨冬は料理屋待合の玄關にて怒鳴り余に面目玉を失はせしこと、夥しく不埒至極に感せし故、種もなき真赤の法螺を吹いて追拂ふたる次第なり、就ては、明後十七日午前十時、元利金を舉げて、犬に與ふる腐飯と思ふて支拂ひ遣す故、時刻分秒、遲滯なく、尾を振りて受取りに来るべし云々。

と認め遣したら、十一人丈だけは、時刻前に詰め掛けたから、手代に云ひ付け古新聞の袋に入れて仕拂ふたが、残り二人はドウしても來ぬから、聞きに遣つたら、旦那様のことを人に聞きまして、誠に濟まぬと思ふて居る處にお手紙でありましたが、ドウシテモ頂きに出られませぬと云ふて居るとの報告を得たから、直ぐに馬車に乗つて自分に其の家に出掛けて行つて、厚く禮

を云ふて返済した上に、反物一反宛を與へて歸つて來た是にて、日本興業銀行の腐始末は立派に片付いたのである、夫から其二人丈だけは、段々世話したこともあつて、今は各々正業に復して今日まで庵主の家に入出入をして居ると云ふ、法螺咄しの一段である

第七 吹

法螺を吹く器械を製造するには、個人主義會社のカタロクによりては、直ぐに破壊れて役に立たぬたやうになる、ドウシテも國家社會主義會社の銘を打つた器械でなければ、其製品たる法螺の賣れが悪く、又役にも立たぬのである、夫れから其器械も親切と云ふ、スチールを何處にも遣つて、嚴格な識見と云ふスチームを動力として吹出さなければ、本當に直打の有る法螺は出來ぬものである、大隈伯や庵主杯の法螺が、何年吹いても何時まで店曝しにして置いても、相當の賣高と直打を保つて居るのは、其の法螺の當不當は別として、其の製造が國家社會主義會社の器械によりて、製出された品物で

あるからである。其他法螺を吹いて世渡りをして居るものは澤山あるが、皆な心身虚榮の海に溺れて煩悶きく、吹く法螺だから圓太郎馬車の喇叭程も人が注意をせぬのである。泥んや自分が乞食相場をする爲めか、襪襪會社を政府へ賣り付る爲めか、一時的に吹く法螺が世道人心に鼻糞程も効果を持つて溜るものでない。今の世に第一流の實業家とか紳士とか云ふて、社會に威張り散らし家主が咳拂ひをするやうな聲で、大きな法螺を吹き、ヤレ國家の經濟がドウダの國家の財政がドウダのと勝手な熱を吹くのは、皆な個人煩悶の呻り聲であつて、何を國家と洒落たい位のものである。此奴を偶買被つて、一會社の社長とか顧問とかに爲たが最後、直ぐに權門に纏綿まつた縁故因資によりて、會社内部を殺ッポウにして、一時株券の配當に充て、直ぐに株で儲けた跡を政府に買上げさせて、二番茶の殻まで煎じて喰はんとする。其の罪惡を教授された一類の奴等は皆な影の薄き動物許りにて、空氣が有るによりて據るなく生きて居る。生きて居るによりて剛慾を働くと云ふ式の代物許り故、此の大先生の教訓に、一も二もなく感化せられて、受賣

の法螺をブー！と夜晝の差別なく吹き散す。何程吹いても、夫れ法螺器械の製造元が個人主義會社だから駄目だ併しコンナ茶のやうな奴共に限られて、器械の劣惡なことには氣が付かず、只だ製品の賣れ行き許りの夢を見て居るもの故、右の顧問も重役も總掛りになつて、惡會社賣り付けの廣告法螺を一齊に吹く。此の廣告法螺に遣はれる者が多く議員杯である。既に廣告料を貰ふた議員ゆる吹く處に事を缺いて、神聖なる議會で此の廣告取次をして品物が賣れたら、又た其の賣高の、コンミッションに唸鳴して夢中無天に赤鉢巻をして、廣目屋式の鐘太鼓で法螺の取次をするのである。ソコ法律と云ふ厄介な鬼が目を光らして、グワンと一と掴みに、ヒツ浚へて行く。臭い飲は食ふ、駄法螺顧問を初め關係人は皆な大損をする。是で法螺見たことかと、又た人に落洒られる。其時暫くは痴客が猫にヒツ搔れたやうに、黙つて鑿面て居るが、痛さが止むと、又た始める。コウ云ふ鹽梅に、菓莖の皮を剝くやうに、幾度でも繰り返して居る。此が品性の低い劣等動物の吹く法螺である。此等の法螺吹が此の如く、長く世に存在すると云ふものは、本を云へば社

會の罪で社會がマダ劣等であるからである。錢を持つて居る奴は持たぬ奴が絶對に尊敬すると云ふ卑劣な根情があるから、コンナ獸のやうな奴が人間並に道路を往來するのである。是になると西洋人の遣り方が甚く氣に入るのである。社會の制裁が強いから、コンナ事を一度仕た奴は決して寄せ付けぬ直ちに俱樂部は除名する關係の會社は止めさせる。現に香港まで行つて見れば直ぐ分る。西洋人は支那人の幾許金持でも汽車汽船の一等に乗せず、西洋組織のホテルに泊めぬものである。此は膚色嫌惡の關係は別として支那人の頭腦には、國家なく親戚朋友なく只だ自分だけ錢さへ儲ければ他に何の異存もない動物であるから、別に政府や法律の命令を待たぬ前に社會が之れと同等することを許さぬのである。即ち社會制裁の前には、金も法螺もないと云ふ有様である。苟も二千五百年以來の文明國に生れて只だ一片君臣の情義と社會の道德許りで、此の億兆民心の一致を實現して來た吾祖先の血統を受けて居ながら、此の如き劣等なる行爲を以て渡世をする動物に加ふる制裁さへ、痲痺した社會に成り下つたと云ふは、吾が五千萬の

國民中、殘念に思ふものは無い。知らんと思ふと頭の中に涙が充ちて、嫌な心持ちに成つて仕舞ふ。今滔々たる天下は、コンナ奴等の競争場裡と化し去つて仕舞ひつゝあるから、面倒臭いと云ふて我慢をして居ると、何時の間にか、ソ一云ふ御自分様も、ソナ奴とストラグルを爲ねばならぬことになる。から、何でも濡れ手拭で顔を拭いて、向ふ鉢巻の尻り端し折りの片膚脱ぎで、コンナ劣等動物は、人間界から敲き出して、尙ほニヨキ／＼頭を出す奴は、端から石油をブツ掛けて焼き殺して仕舞ふことにせねば、片付かぬと思ふ。昔日或る深山に、仙人が一人居つた。自分は學び得た道術を樂み、常に天地の精を吸ふて、嶽窟寂寥の妙趣に耽つて居つた。が其の友とする處のもの、が猪狼狐狸兎鼠見たやうな獸許りであるが、常に彼等獸類が遊びに來て人間様と獸類の區別も分らぬから、愛撫すれば直ぐに馴れて同等の物と思ひ、禮義も尊敬もなく、晝寝を仕様と思へば、ペロ／＼顔を背、背中に上り足を喰へて引張り、股倉に頭を突き込み、丸で彼等獸類のお手遊物になる許りの有様。故に仙人先生非常に五月蠅く思ひ、刎ね飛ばして遣らふかと思へども、

天地間の有情非情悉皆得度せしむる道仙の身にて愼慧の萌す處道術の穢れともなり殺氣已に盡くれば猛虎すら且つ馴染むの正覺を忘るゝにもあらねばジツと我慢をして居たが何分五月蠅くて溜らぬからフト一つの工夫を得て或る日虎の皮一枚見付け出して之れを頭から被ふりて四ツン這いに匍匐してウーンと迂鳴り出して溪谷を一週したら百獸怖き伏して各穴窟に遷逃して仕舞ふたソコデ仙人先生ボンと手を拍つて此れは甘い此れに限ると喜んだ夫れから虎の皮ばかりかぶつて居さへすれば晝寝をしても散歩しても決して百獸の侮りを受けぬことになつたゆゑ常に虎の皮ばかり被りて四ツン這に匍匐して歩いて居たところが或日他山の真道仙が訪ふて来たから虎の皮を脱いで人並に立上らふとしたら虎の皮は肉にコベリ付いて脱けず足も立つことが出来ず本當の虎に成つて仕舞ふて居たと云ふ咄しがある故に社會制裁の發達を希望しても手段を選ばず彼等を勢力許りで壓倒仕ようと思ふても金がなければ勢力は得られず金を得るには尋常一様のことでは得られぬソコデ金を得る手段だけは彼等獸物

仲間の真似をして相場を遣り詐僞會社を拵へて夫れで金を儲け始めて社會を鼓舞すべき新聞なり其の種の機關なりを得た時は最早や御自身様が獸の根性に成つて仕舞ふて居るから出し抜けに他山真道仙の訪問を受けたときに四ツン這いの儘では始末に困まるホイ此れは法螺咄しに枝がさいて飛んでもないお説教是れから性根を入れて段々法螺の咄しを進めや

第八吹

庵主が生涯中に一番愉快に思ふこと所謂嗜好と云ふものは日本の領土の廣くなることと未開の地を開拓することである臺灣が未だ領有にならぬゾット昔時は毎年々々夏は北海道に許り遊びに行つて居たが其頃北海道には日本内地を喰詰めた不成者許り集まつて皆な雲を掴むやうな一攫千金の事許りを夢みて其處此處の宿屋に泊り込んで居たが毎年々々庵主が彼地に往さへすれば土地の相當の人とコンナ野浪人と雑茶にして色々

の法螺を吹き煽立て、計り居た、ソ一すると様々なハネ上りた破天荒の事業が始まる、興廢共に土地は賑ふ、其の中の一割が残りても夫丈けの開拓が出来ると云ふものである、コンナ事を仕て居れば其の殖民地事業家からは色々の事を頼まれ人は集まつて来る、退屈もせず面白くもある、滞在中御馳走には絶えずなれる、一と夏中は誠に心地克く避暑をすると云ふ有様で毎々夫の式を遣つて居たが、サ一餘り圖に乗ると物事は上げ下げの付かぬ困難が起るものである、或る年庵主の至極別懇の友人が北海道長官に成つた處が彼の野犬同様の有象無象の事業家が非常に多人数集つて来て、ヤレ此の願書を取次いで呉れよとか、此の山林を許可させて呉れよとか、此の事業に保護をさせて呉れよとか、實に進退極まる程持ち掛けられた、夫れを庵主がドウ云ふ考へであつたか、盡く安請合に引受けたと思召せ、夫れから御馳走になること夥しく、朝寝て居る中から宿屋には人が詰め掛ける機嫌を取る人あり、お諂媚を云ふ人あり、菓子果物から種々の御馳走等非常に持ち掛け來り、收入山の如く、尙ほ其上に毎晩々々料理屋に案内はさるゝし、實

に庵主の至盛目も開む位にて、世の中に不景氣で小さく燻ぶつて居る身染な奴には庵主の爪の垢を紙に包んで、お守に出す位のものであつた、マダ其の中に今に忘れられぬのは、毎晩庵主を料理屋に呼んで總上げの多人數藝者を呼び、庵主の下手義太夫を所望し、客藝者連合一致して、天地も裂けん許りに賞讃の聲と共に、拍手喝采するの一事である、庵主生れ出で、眞に愉快と思ふたことは、露清の戦争に勝つた時と高利貸の借金を皆な拂つた時の二つであるが、此の北海道で義太夫を譽められた時は、今ま考へても寧ろ夫れ以上の愉快であつた、何とか云ふ片目の三味線弾を小樽より呼び寄せ、宴會毎に迂鳴ねば客も藝者も怒り出して、總に脅迫的に責め付けると云ふ始末にて、斯く人氣満潮の時に至りて、今頃は半七さんなど、迂鳴り出した時の意氣の旺盛なる庵主が、氣宇の漲逸なる、今ま如何なる靈妙の筆を以てするも、其の現状を寫し出すことは出来ぬのである、處で此等宴會が段々度び重なつた末は、彼の依頼者より、其の依頼事件の催促となる考へて見れば、未だ年は若し、經驗はなし、深い考慮もなく、出鱈目の法螺を吹いて人を煽立て

て居た時故只だ頼まれるれば悉く引受けたと云ふ丈けで、一つも其の世話を
 實行しては居らぬ折柄或る日其新任長官より晩餐の案内が来た幸はひだ
 から今夜は右の依頼事件を夫れ親しく頼み込んで遣らふと思ふて其
 の書類を一通と纏めてして風呂敷に包んだら可也一杯あつたには驚いたマ
 ア仕方が無いと持つて往つたら列席の客は毎晩庵主を御馳走する人々許
 りにて其間を周旋する藝者は毎日出會ふ顔許りである少し酒が廻つたか
 と思ふと満堂の誰れ彼れ一齊射撃に庵主に義太夫を語れと云ふ随分押強
 く防禦の術を盡したが瞬間に陥落した其中に師匠はデンと次の間に
 て調子を合せる如何なる金龜鐵腸の豪傑でもフワツと浮れ出さざるを得
 ない破滅である實は其時にも能く前後思慮はして居つた積りであつたがッ
 イ、ポイと又た今頃は半七さんと遣つた、ナ、是だ人間護まねばならぬは下
 手義太夫である釋迦は五慾を戒め孔子は三情を制して居るが其中に義太
 夫が抜けて居るのは先哲の下落であると思ふ此の長官先生好い年をしな
 がら生れ付いて鹽辛に義太夫に葱の味噌汁は命掛けでも拒ぐ程の嫌ひで

ある庵主が伸んだり縮んだりして怒鳴り興味充溢して居る中に長官が妙天
 華蓮なベストが石炭酸に出喰はしたような顔をして、グイと坐を立つて仕
 舞ふた、變とは思ふて居たが何にソナナ事は氣にも留めずトウ、一段丸
 ゴカしに燃り付けて仕舞ふた夫から歸り掛けに一寸長官先生に遣ふて彼
 の風呂敷包みを渡して何れ其の中委敷咄すから能く此を見て置いて呉れ
 玉へと云ふたら、と云ふたつきり返事も何もせず石地藏の顔の前を燕
 が飛んだ程も感じない風をして居た何か心持でも悪いのであらうと思つて
 歸りて来たが翌朝一封の手紙が来て居る其意味は
 貴殿とは多年交際して居つたが今日遺憾ながら絶交をする其の理由は

- 一 不良の輩と交り結び衷心恥づるの色なき事
- 二 虚業浮浪の族と共に流連の行ある事
- 三 官吏の職務を汚職することを願みす多數の寄托を甘受して書類を交
 付したる事
- 四 當道政治の威嚴を保つべき長官官邸に於て蠻聲を發し多數來賓の席

上にて自分を侮辱したる事
右に付今日限り文書の往復と交通とを杜絶し秋毫も舊交の因縁を残さざる事

云々の趣意なり此絶交状を幾度讀んで見ても庵主が悪いのだから段々工夫をして見ても謝罪より外仕方がないから直ぐに出掛けて行ても却々顔として面會しない昔堅氣の人だから尤なとも思ひ更に手紙を遣つても封の儘突き返すと云ふ始末にてスツカリ怒つて仕舞ふたのだヨシ／＼仕方がない此れも乗せられてウカツリ義太夫を語つたからで其他の行動は何と云ふても衷心疚しきとはないのだからと自から慰めても色々の事を頼まれた人々に對しては物を貰ひ御馳走を喰ひ倒し義太夫を賞めさせ多額の散財をさせた揚句に絶交されたと云ふては何程酒蛙突でも頗る面目玉の無い譯ながら直ぐに其の日に一同を宿に呼んで右長官の手紙を示しコンナ次第故諸君折角のお頼は悉皆駄目なりと云ふと一同の者は鳩が豆鐵砲を喰つた上に安價煙草で煙れたやうな顔をして狐鼠／＼歸つ

たから庵主も同じく狐鼠／＼荷物片付けて其の晩停車場に往つて歸京の途に着いた其頃は汽車で室蘭に往て彼處から蒸汽で函館に出るのだから室蘭から船に乗つた扱て間の悪い時は飛んでもない事許り起るもので船中で東京生れで小樽出稼藝者の二十四五位の人が虎列刺で夜中に死んだと云ふので函館の辨天崎とか云ふ所で乗客の儘一週間停船を喰つたサ一大乗客一同の苦情湧くが如く騒いだが仕方がなく衣服身體とも散々の消毒に逢ふて毎日／＼プラ／＼／＼遣つて居る晝の中から喰ふては寐寢ては喰ふから夜の寝られぬこと夥しくソコデ午前の二時三時頃からプラ／＼と甲板の上を散歩して歌などを誦ふものがある庵主は義太夫に中毒して虎列刺以上の驅除に逢ふた譯故今度は徒然の餘り聞囁りの小謠を小聲で誦ふた處が暗い處の長椅子に寝て居た人がムク／＼と起き上つて来て貴君は謠をお遣りになり升かと云ふサ一玆で氣を付けねばならぬ處だがハイ謠は飯より好きで少々遣り升と遣つて除けた此の一と法螺が致命傷の身の詰りで彼の先生直ぐに下に行つてカバンを開きて嚙子本

一冊を以つて來て段々謠の咄しを仕掛ける庵主も退屈で面白から咄す
 其中種々の事を質問する庵主の父は幼少より斯道の熱心で庵主が七ツ八
 ツの頃から一番の若者が大勢弟子に來て指南を受けて居た位で、多少東京
 にも名の知れたる亂舞家であるからヤレ装束の事とか四樂の事とかチヨ
 イ／＼聞囀つて居るから段々好い加減に法螺を吹いて居たら彼の先生頻
 りに圖に乗りて庵主の圖を聞くから福岡と答へると名前はと云ふから杉
 山だと云ふと福岡で杉山さんなら私と同流である此間福岡に往たからお
 宅をお尋ね申たら東京にお出のお留守であつたが始めての御面會に不
 思議な處でお目に掛つて、コンナ嬉しいことはないと言ふから愈々面白く先
 方で終に庵主を父と極めて仕舞ふたから庵主もトウ／＼父に成て仕舞ふ
 た、其翌日船が解停されて、青森に着いたが常と違ひ汽車の連絡を外れた、ソ
 コデ船客一同は今夜青森一泊だから、一同無事の祝意を表して懇親會を遣
 らうと云ふから、素より退屈であるから一人の異議者もない夫から何とか
 云ふ大きな料理屋の二階を借り込んで大宴會を開く事になつた庵主は少

し遅く往つたら、サー大變だ、同乗客の外に十人許り知らぬ人が居る、各袴羽
 織で一々彼の先生が庵主に紹介する、此方は觀世流の某殿である、此方は福
 岡の杉山先生であると、其外手前は寶生流の某自分は金春流の某でござる
 とニヨキ／＼／＼頭を出して挨拶する、其中彼の先生が云ふには、此文け諸
 流の先生方が集まることは東京でも滅多に出來ないから、今夜は夜明まで
 囃子を催ふして楽しむことになり升た、貴下は御迷惑でもドウカ後學お引立
 の思召でアシラツテ下さいと云ふて、囃子燈と張り扇子二本を庵主の前に
 突き着けられた時は平生古今無雙の豪傑を以て自任する庵主も、ゾートと
 全身電氣に打たれたような心持がして脊中に汗がタラ／＼と流れた併し
 ソコは戰場々數の剛の者だから、愈落付拂つて手前もお蔭で旅の憂を霽し
 升未熟ながらお相手を致しませうと云ふて小便に行くふりをして裏階子
 から下りて直に宿に歸り、急に用が出來たと云ふて、其夜淺蟲とか云ふ温泉
 場に行く汽車があつたから、此れに飛び乗りて逃亡して仕舞ふた跡では諸
 先生嚙ぞ驚いたことであらうと、今思ひ出してもお可笑な心持がする、此の

文を見てヲヤ彼の時の奴はアレかと思ひ當る人が出て來たら一層面白いことである夫から東京に歸つて後彼の長官先生中央政府に手強くイメられて居たことがあるから庵主は蔭から非常に盡力をして美事成功した曉ニユトと長官先生の處に出て往つて君今度の事で絶交だけは止めて呉れ玉へ義太夫は十年間止めたから君が注文によりては新聞に

有所感禁十年間義太夫

と廣告をしても好いからと云ふたら果ては大笑ひとなりて爾後絶交解除となつたのである此れは只だ一場の笑ひ咄しなれども今の世にも庵主昔日の失策の如く己れの知己信友が一時官邊の勢力を得たるに乗じて色々山事を受込み賄賂を着服し酒を喰ひ多大の散財をさせて渡世して居る奴が澤山ある必ず天罰觀面後ち全きを得るものでない庵主の如く絶交して呉れる良き友のなき人は疑ひもなく今日の庵主たるとの出来ぬ人である若年の人の戒めにもと茲に一場の四九尻咄しを記述することとせり

第九吹

庵主は法螺の説と云ふ題目を機として尤も出鱈目の法螺を吹き立てたこと茲に九回説賤しく文拙なくして已に讀者の嫌厭を招きしこと當然と思惟するがゆゑに今第十吹を以て一と先づ吹止めとなし了らんとす而して此の稿に説かんとする法螺は庵主が吹きたる法螺中の尤も奇抜なるものに屬するを信ず丁度庵主が二十六七歳のころ思ふ法螺吹仲間の武者修行連とも云ふべき者三人が京橋五郎兵衛町の或る逆旅に止宿し居たるが其の中の一人は海岸吹きに數年間支那帝國を吹き廻はり一人は竹貝吹きに政黨間を五六年も吹き廻り各々吹き盡し吹き飛ばし吹き草臥れて横倒情眼を事とし只だ毎日々々宿錢の言ひ譯のみを仕事として其の宿屋の手代などを相手に吹く位にてありしが此の二人は實に法螺界の驍將法螺學百年の龜鑑とも云ふべき吹人である龍蛇も時を得ざれば蟻蟻と伍す眞に雞を割くに牛刀を用ゆるの概とも云ふべきか此の豪傑が宿錢の言

譯けに法螺を吹きつゝあるを見ては、心中甚はだ愴然たらざるを得ない次第である。此の中に伍したる庵主は、未だ法螺吹き一人前の給金を取れざる黄口の小僧であつたが、梅檀は嫩より芳しく、尻は音無しと雖ども臭く法螺幼稚なりと雖も佳なりの評ありしが、或る朝三人同室に枕を擡げ、一人が云ふには、斯く三人寝食を共にすると雖も、三月未だ一日の快なし、余夜來風歌み雨靜なるの時、借らつら當世を思ふに、時勢に投じて威名を掲揚し、以て天下を横行するには、政黨の右に出づるものなし、而して今ま天下大名雄飛の士にして、政黨を組織するもの三五にして足らずと雖も、中に於て最も有望なるものは、某將軍の外なし、某將軍は身閑閑の班に列し、學識高邁才幹銳利、智は張陳を凌ぎ、辯は蘇張を壓す、矧んや其の蘊蓄の禪機に深源するは、運籌の妙味決して他俗流政黨輩の覬覦を許さざるの資格がある、ドウダ、一番三人袖を列ねて、某將軍に謁し、鮮明なる大旗幟の下に彼の政黨を助けて、威風を八紘に飄へすは、又た面白いではないかと云ふと、今ま一人が鼻鬚を刮り刮り云ふには、夫れは良いかも知れぬが、彼の將軍は、貪婪坊で、猜疑心の深い

男だ、又た我々は芝山の仁王様の如く、恐怖待て、お参りがあるのに、今は粉粧剝落して、御利益もなく、宿錢を辨ずるお賽錢さへ取れぬ境遇にありながら、頭を下げて、貪婪坊のお手傳ひを申込み、何か心底でも疑はれて、體よく刎ね付けられたら、夫れこそ敲き割りで、薪にもならぬ、仁王様が出来上るぞと云ふと、前の一人がソナナことは無い、某將軍が人を覓むることは、濁する魚の水を慕ふが如し、我々三人の技量は、天下稍々定論あり、何の疑ふ處ありて拒絶するものか、ライ其日庵汝は如何だと云ふから、庵主は夜着の袖から、頭を出して、安煙草を煙べながら、予は御免だ、政黨は嫌だと答へた所が、彼の一人は、ムツとして、仕方のない奴等だ、夫れチャ、僕一人將軍の處に行くが、好いかと云ふから、二人口を揃へて、夫れは勝手だ、我等二人は宿屋から追ひ出されるまで、寢て食ふて居るのだと云ふたら、彼の一人は、ボンと刎ね起きて、身仕度をして出て行つて、仕舞ふた處が、午後の二時頃、ボンヤリ歸へつて来たから、ドウダあつたと聞くと、彼れ曰く、君等が先見恐れ入つた、今日彼時から行つて面會したら、管に僕を迎へざるのみならず、坊主、神主、見たやうな者

大勢列席の前で、日本の神代、桓原の朝の昔しから、終に達磨の難行苦行の講釋まで散々聞かされた上、殻法螺の吹つ放して挨拶もせず出て行つて仕舞ふた實に恥の掻き上げで歸つて來たが君等に對して面目次第もない仕合せだ併し何とかして此の復仇はする積りだと云ふと、今一人の男が顔色稍紅を漲らし、好し能く云つた君が今日の有様を包まず報告したのには友人として甚だ満足する君が有する遺憾の復仇は我等がする安心せよ明日の朝僕が行つて足腰立たぬ目に遣はして來て遣ると力身出した夫から其の男が翌朝早くから出掛けて行たが却々歸つて來ぬ庵主はお可笑さを耐らへ、用足しに出で歸つて來て見ると又ボンヤリ歸つて來て居る、ドウデであつたかと云ふと彼れ曰く、今日は孫策と大史慈の格闘のふく辰より晡に至るまで政黨の大議論を遣つたが勝敗終に決せず物別れとなつて歸つて來たと云ふから庵主は笑つて、夫では復仇は出來なかつたでないか、一體君方の議論は河童が水を掛け合ふ如く敵と五分になつて戦ふから駄目だ議論だなど、大きなこと許り云つて溜るものか、君先方の面を見て、此奴

無論勝てさうだと思ふたら敵一倍の法螺を吹いて力押しに押し付ける此奴強さうと思ふたら、此方が小手先きの争ひで、二割方負けて遣るのだ、ソ一すると先方が掛つて來る、其時に足を拂ふか、罌丸を捻るか、頸を掻きノメラすかして、敵き伏せ、夫から謙遜して眞面目な議論見たやうな法螺を吹のだ、ソ一すれば、どんな奴でも辟易するものと先哲の法螺の秘訣に書いてあると云ふと、彼の二人は人を馬鹿にするな、ソなら君行て遣つて來いと云ふから庵主は嫌だ、政黨と納豆は虫が好かぬから、政黨見たやうな馬鹿事を止めさせるなら他日行くかも知れねども、説き伏せて政黨の中で登用して貰ひになど行く程零落はせぬと云ふと、彼の二人は、ソイ友達にまで法螺を吹くことは止せ、其の政黨止めさせても好いから、行つて見よと云ふから、庵主は夫が嫌やだ、我等は法螺が商賣だから、欠伸をしても五錢位にでも成らぬことはせぬと云ふと、彼二人は好し、何でも奢るから望めと云ふ、ソコデ庵主は、ヂヤ一仕方がない、此節貧乏で脂肪分のあるものを食はぬから、君等二人で鰻井を三人前奢るなら行て來よう、と云ふと、二人口を揃へて、好し、奢

るから、行て来い、併し相手が敵で尋常の者でないから、君が本當に勝つたか負けたかを検分する者と同道せぬでは胡魔化されて鰻を食はれては大變だから僕共二人は敗軍の將で行けぬから、僕共が信用する人と一緒に行けよと云ふから友達を詐偽して鰻を食ふ様な不信用な者では、敵の首は取れぬが幸ひ僕は某將軍に面識がないから將軍に面識ある人を選定して僕を紹介させて呉れと云ふと、其翌日我々も知る人である某と云ふ人が来たから、其人に意を含ませて將軍の許に出掛けて行つた處が紹介者の某は暫く僕を應接の間に待たせて將軍に面會し夫からコチラへと云ふので將軍の部屋に通ると、一寸小綺麗な西洋室に疊が敷いてあつて、瘦軀長顔炯眼珠鬚の將軍は、暖爐の前に坐を占めて頻りに短かい薪を爐中に投じて居る處に、某が庵主の姓名を紹介する庵主も初対面の挨拶を叮嚀にする、將軍は「ヤアお出なさい」と挨拶をしたが決して庵主の顔を見ぬのである、庵主も面白から前にある火鉢に字を書いて決して物を云はぬこととした處が困つたのは紹介者で、色々氣を揉んで咄の水を向けるけれど庵主も將軍も受

け返答せぬのである、ソコで紹介者も沈黙する、此處芝居で遣れば意中の暗闘である暫く三スクミの姿で居た折からドアを開いて、ニユーと這入り来た者がある、之は明治の大法螺吹の元祖とも云ふべき某と云ふ大馬鹿者で、一時岩倉さんや伊藤さんなどに政治學を講義したなど、田舎を吹き廻つて、天下を横行した奴で、小學問がある文けで極根性の卑劣な奴である、此が案内もなく、居間に這入つて来るやうでは、此將軍の心事も思ひ遣られてム、好し、此將軍奴山の見えたものだ、腹がドカンと据つた、而して此法螺吹男は庵主が嘗て彼れの卑劣を答める爲めに、味噌汁を面にブツ掛けたことのある男で、面識がある處から彼も如才なく挨拶をするから、庵主も叮嚀に又た挨拶をした處が、彼法螺吹は將軍に向つて、此間御約束をした鴛鴦鳥が田舎から届きましたから、今日持參致し升た直にお池に放し升ては、マダ好く馴れて居り升せぬから暫く籠に入れて、御飼養になるがよいと思ひ升と云ふて、風呂敷から頭文け出した鴛鴦鳥を差し出すと、將軍は満面に喜びを湛へて受取ると、ドウした機みか、鴛鴦鳥が二羽共飛び出して、座敷中を飛

び廻る、ソコデ將軍が非常に狼狽して隅に追ひ詰めて之れを捕へようとする。此の隙きを見た庵主は直ぐに其の法螺吹殿に向つて、ドウです君禪衣狐心の賊僧が口に六根の過慾を戒しめ乍ら佛を欺き己れを欺き濁世の汚流に狼狽して名利を追ふの姿は随分見苦しき様では有ませぬか彼の名利五彩の鴛鴦鳥を凡眼無智の前に飛ばせた君は陽山石上の鐵鉢に潜めた龍にも勝つた戯れであると云ふたら將軍俄かに座して庵主をハツタと睨み此の青小僧何を云ふか汝は政黨の事を構へて手に贊を執らんことを申込みたる者になりながら予が前に座して無禮を放言す許さぬぞと云ふから庵主は徐ろにお氣に障らば御免を蒙り升が私は政黨の事にて閣下に贊を執る者ではムリ升せぬ閣下が政黨と云ふ無耻の汚流に溺れてお命も危しと承はりお救ひに罷り出たものであり升と云ふたら何を政黨がドウダと予は已に維新の鴻業を翼賛して今日陛下の殊遇を蒙り憲法の大典を奉じて政治の機要に參與することを過らしめざるが爲め政黨の師表たるべき組織を完成せんとす汝ち少年如何なる意見を擁いて予が前に來れる道か

に述べよと云ふから庵主は占めたと思ひ直ぐに袴の襷を諸手に引き上げ前なる火鉢を手荒く一間許りも刎ね飛ばし膝をズル／＼と三尺許り摺り寄せ雷霆の如き大聲を以て賊れ賊僧舌長なり汝ち此の様に墮落しても尙ほ維新の鴻業を説き憲法の大典を論じ予に向つて政黨の寢言を語るか言語道斷の醜態なり夫れ維新の鴻業は三百年の幕政弊忽民に普ねく情氣山川に充滿し僅かに井伊安藤の支柱を以て一時を支へしも櫻田の變を初として此の支柱を除きたるより只さへ傾倒に垂ん／＼とする破産落櫓の幕府は敢て一の人力を用ひざるも微風一到軒を廻るを待たずして見す／＼轉倒するは識者を俟つて知ることでない然るに藩閥薩長の青書生共が老婆を下り阪に突き飛ばすが如く傾ける方向に押し倒したる者なり皇上の御威稜は日月の天に懸るが如く國民の腦裏一日の尊崇を缺かず一時幕府專横の爵雲に遮られ玉ひしも天罰時正に來り正理一朝の嵐に消散せんとするの時なり然るを此の風にも消ゆる幕府の衰運を押し倒したる汝等表に朝恩を費るも心中何爲れぞ恥づる者なきや而して憲法の大典は陛下

下が時勢の推移に、大御心を傾けさせ玉ひ君民の分義を定め玉ふと雖も人間精神上の分義に於て無量法界の憲法は萬世不磨である豈幾多の衆愚に示し玉ふの時に於て初めて遵守すべき事ならんや又た政黨なるものは人民衆愚の私團體にして敢て憲法に何等の關係を有せず國家の禍根此より甚大なるはなし彼の弱の肉強の食と云ふは唐の韓愈が東洋千古の箴言なるも豈力のみを云ふの言ならんや愚者は智者に制せられ智者は愚者を制すべき天則なり萬千の愚者は決して一人の智者を凌駕すること能はざるなり然るを天下の頑蒙度す可からざる愚民を集めて政治の根本を左右せんとする僭踰之れより甚しき者なし至仁至聖の陛下の垂れ玉ふの憲法は其國民中に於て至善至賢の良士が率先して奉遵して聖意に答へ奉りてこそ衆愚を率ゐて道に據らしむることを得べし然るを汝等賊僧微功を街ふて殊恩を恥ぢず尙ほ自から其の蒙を曉らす衆愚を誘拐して勢力と稱し此宇内無比の聖天子の面前に横はりて權利呼はりを爲さんとす虚榮名利の横張は國を亡ぼし身を滅す天祥の壯烈鬼神を泣かしむるも宋朝忽

諸として亡び大石良雄の義心百世に遍ねけれども淺野家靡然として迹なし皆な此れ人は一代名は未代死しての後の名こそ惜しけれとの虚榮的俚諺に魅せられたるの弊なり古人の歌に

身の爲めに君を思ふは不忠なり
君の爲めにと身をば忘れて

と云ふを一想せば汝等の既往思ひ半に過ぐるものあらん皆な身の爲めに勤王を説き愛國を街ふて過分の代價として殊恩を享受したるの族なり若し予の説を無禮なりとして心中微塵にても遺憾あらば直ちに位階勳爵を抛ち此の家を售り妻妾を放ち今日より予と共に捨身道途に護國の法を説いて樹下石上の業を與にせよ予や青弱未だ國家に奉公すること薄しと雖も歴祖の素封數萬を抛ち普ねく天下不遇の徒を助けて君國に奉ずるの道を教へ尙ほ餘す處の殘軀を捧げて陰恩を報せんとす若し汝が答へ瞬息を遲滞せば直ちに汝ちを提げ去りて市井の街路に抛ち泥濘の汁を食はしめて禪家の喝聲に換へんと腕をマクリブルくと膝を突き付け息を

詰てハツタと睨め付けた處が將軍非常に閉口し君亂暴をしては困るぞ君が云ふことも一理はあるから、マア落付いて緩つくり咄し玉へと云ふから庵主はブウーと噴き出し其紹介者の某を顧みて君ドウダ鰻井の權利確かに認められたかと云ふたら其男、夫までは青くなつて居つたが吃驚した面をして、大丈夫くくと云ふた處が將軍が何の事だと云ふから實は此間から友人の某々度々閣下に伺候して、一々議論に負けて歸つて來升たから、今日は私が鰻井を儲けて閣下と闘に伺つた譯で、初め閣下が沈黙つて居らした時は實に困り升て、兎ても鰻井は食へぬと心中實に困つて居り升たら、鰻井のことでお怒りになつたから、占めた鰻井と思ふて、ヤットの思ひで、鰻井に有付升たと云ふたら、何んだ人を馬鹿にと大笑となつて、夫から鰻井以上の御馳走になつて、永年御交際を願ふて御教示も蒙つたと云ふ鰻井法螺咄の一節、庵主は茲に長々諸君の視聽を汚したことを感謝するのである

義太夫論

一 淨瑠璃及義太夫節の始元

昨今九十度以上の炎熱に天狗の鼻を怒かして近所近邊の味噌を腐らし、て有ゆる知人朋友より出入の職人下女下男迄に迷惑苦痛を掛ける慘澹の所行を働くものは凡そ下手義太夫の外決してあらざる可きを知る而して近來此の恐るべき遊藝の都鄙上下の間に猛烈なる勢を以て流行し其の餘波澎湃として他の優尙なる藝界を蕩破し、尙ほ餘燼無らしめんとするの傾向あるは時勢の推移に伴ふ一現象とは云ひながら其因りて來る所の遠由を考究するも亦た一の興味ある事たるを信するなり抑も此義太夫節なる者は遠く源を元暦の昔に發し彼の後鳥羽帝の時信濃の前司行長入道源平盛衰記を撰び、拔て此の物語りを作り盲人性佛に教へて琵琶に合せて唄はしめければ性佛山王權現に祈り神勅によりて長短高下遲速緩急の譜節を

なして之を唄ひけるより世に行はれしが夫より遙かの後永祿年間琉球より蛇皮を以て作りたる二絃の樂器を得來りて時の樂人石村近江之れを改作して三絃となし十二律四十八譜の定を設け自在に音節に合して情樂を奏し人をして感動せしめたり而して其頃織田信長の侍女小野通女なるもの詞藻の道に通じ命を受けて三州矢矧の長者の娘淨瑠璃姫が東下りの義經に情逢したる事を作述したるより之れを淨瑠璃物語りと名付けたり此の文章古今の優美を蒐め婉麗を極めたるを彼澤住灌野の兩檢校之れに譜節して語り出でしより始めて淨瑠璃の名あり夫より段々名人輩出し杉山丹後の掾は彼の江戸半太夫双笠意效の祖にして山本土佐の掾は彼の都一中の祖により常盤津文字太夫に傳り又富本豊前太夫に傳り清元延壽太夫に傳る而して義太夫なるものは即ち杉山丹後山本土佐井上播磨より直統して竹本筑後掾に至る之れ中興の祖たる竹本義太夫となす此人大聲嬌喉一世を風動したる名人にして主に人情の微を語り出すに悲痛を以てし之れに加ふるに巢林子近松の名文一世に涌溢して藝界俄かに旺盛を加へ貞

享寛保の間は世人此の長藝の妙魔に魅せられて神心醉へるが如し終に此事時の天子の教聞に達し召されて天聽を辱し奉侍の百官悉く感動して袖を絞らざるもの無きに至る主上深く其妙技を敬感あらせられ賜ふに御簾の垂錦を以てせられ之を以て衣冠とするを許させられ直に竹本筑後掾と任官せらる義太夫一派の肩衣に純子繻珍等を用ゆるの始まりにして他藝人の同じ肩衣を着くるは之を借偷せるものなり義太夫面目身に餘れり終に之れを農工商の民間教育の技藝たるべきの允許を蒙り大阪道頓堀の西に矢櫓を立て先に賜ふ所の錦布を以て装束を拵へ竹本筑後の掾の高札を揚げ西の宮の傀儡師百太夫の線り人形を以て芝居を興行するに至れり夫より元祿三年庚午正月彼の長州萩の産たる近松門左衛門が蓋世の博識を以て京都に遊べるを聘して數百番の著述を乞ひ益々錦上花を散す的の繁榮を極めたり而して享保九年の頃此の筑後掾の門人たる豊竹越前少掾又た技群の妙音と優技とを以て矢櫓を道頓堀の東に構へ驟風砂を捲くの勢を以て衝を竹本座と争ふに至りしは實に斯界の兩雄として末

世の今日迄狂言外題に東物西物の別ある始元たるを知るべし之れより名人四方に湧出し随つて譜節にも雄大の進歩と改竄を加へたるは今日に現存するの音節に照して最も明瞭なる事實にして恰も一譜節の改良に一人を費して一段の外題を完成したりと云ふも敢て誣言に非ざるべし即ち一段の中に文彌と云ふ節あるは岡本文彌の節付けにして表具と云ふは表具又四郎の節付なり又た説經と云ふは説經與八郎の節付けにして道具屋と云ふは道具屋吉右衛門の節付なり彼の林清と云ふは日暮林清の節付けにして播磨と云ふは井上播磨の節付たるを知るべし此の如く其一世に巨技長藝の名人が數百年間數代に互りて丹精と練磨とを重ねて其深奥を極めたる妙技を無學文盲なる藝人或は我儘放埒なる素人が所謂テレホーンの口移しに僅かに小閑一二ヶ月の間に習得して直に渡し守りを呼ぶ如きガミ聲を上げて怒鳴り散す故其前後左右にある者犬猫にあらざる限り苟も人間の形を備へたる者は忽ちに惱苦の深淵に陥り遂に眩暈卒倒の重患に罹りて天壽を縮むるに至る又た實に當然の事に屬す然りと雖も物皆一利一

害あり此の如く精神上不衛生なる遊藝にも其名人が古來より人心に與へたる感化の強大なる實に驚くに耐へたるものあるを見る余は之れより稿を追ひ義太夫節が社會上に現映したる事實を論じ進んで古今斯道藝人の鍛鍊優劣如何を批評するの興味を擲まゝにせんと欲するなり

二 芝居の始元

以上の如き系統と歴史とを以て前代未聞の繁盛を極めたる義太夫節は當時殆んど人心の全部を支配せんとする勢となれり而して中古の頃此義太夫節の興隆に對し沛雨に雷霆を副るが如き撥勢を爲たる者は歌舞伎芝居の發生なり京都祇園町の興行師仁幸なる者此義太夫節の旺盛を見て新機軸を案出し今若し彼義太夫節の人形芝居を改新して代るに人を扮粧して彼の詞を曰しめ太夫をして地合のみを語らしめなば働作彌々眞に迫りて人心の好嗜に適すると更に疑ひある可らずと頻に工夫を凝らせども當時斯様の馬鹿氣たる人形の代用をなす愚人なきより風斗四條河原の辻藝

人を收儲し當時小説の挿繪師滑川國丸の畫を基として鬘及顔の色彩より
 装束の配合に至る迄を案配し始めて祇園坂下廣小路に於て豊竹花太夫小
 嵐龍紋の看板を掲げて歌舞伎芝居を興行したるに其繁榮殊に甚しく一の
 外題を三月より六月迄も興行したることありしと云ふ此故に今尚ほ俳優
 の姓氏に京丹波の村名を存するは即ち其因證なり市川中村嵐片岡尾上等
 皆な大道若くは河原藝人の出所たりし村名なり此の芝居の興行一たび世
 に行はるゝや靡然として天下の藝界を席捲し官民上下智愚賢凡の別なく
 之れを見物するに晨に出で夜に歸り實に寢食を忘れて此の流行の技藝を
 追隨するの有様なり此に於て一時旺盛を極めたる義太夫節人形芝居は漸
 次其の勢力を失墜するの止むを得ざるに陥りしが此に不可思議なる印象
 の社會道德の上に現出するに至れり乃ち君臣父子夫婦兄弟及び男女の交
 情朋友の友誼等に對する情愛の發達此れなり其結果あらゆる勞苦貧難死
 殺等の人生極端の慘事を擧げて悉く其情愛遂行の上の犠牲に供して更に
 遺憾なきの傾あり常に遺憾なきのみならず之れを極端なる方法を以て遂

行したる者に對して却て偉大の同情と賞賛とを以て歡迎して怪まざるに
 至れり此れ吾國獨特の名産たる大和魂發達の隆盛時期にして我國開闢以
 來如何なる學者教育家を喚起し來るも此の如き盛大なる感化を全社會の
 精神に印象することは爲し能はざるべし吾國素より文字なく典籍なく人
 心教育の材料としては寥々一の尊崇を標章すべきものなく億兆の民心長
 く教義に渴して其の精神の發動を抑壓する茲に二千有餘年偶々謀反あり
 戰爭あり篡奪あり復讐あり其の觸るゝ處の境遇によりて一部の發動は歴
 史の繼續と共に試演し來りたれども此の如く社會全般の隱微にまで浸染
 して一齊の發動を現出せしことはあらざるべし佛教の渡來は其の教化著
 大なりと雖も權化垂跡の方便によりて徒らに現當二世安樂を説き儒教の
 普及充滿せりと雖も徒らに内綱常の義に困循して外活潑の發揚に資せず
 基督の教義東西に馳突すれども一神空漠の存否すら多數に信念せしむる
 能はず彼れと云ひ之れと云ふも皆な悉く一部の偏隅に踰限する議論にし
 て未だ人生慘極の死を顧みずして遂行せんとする強大無比の感化を與ふ

るの勢力あるものに非らざるなり獨り此の義太夫節に伴ふ人形俳優の芝居の如きは其の感化力の猛烈なる吾國に於て前古無比なりと斷言して憚らざるを信するなり此れ蓋し其の太夫俳優等の妙技素より其の感化に助けあるべきは論を待たずと雖も其の狂言作者の筆力亦た之れが主因たるは疑ひを容れざるなり當時義太夫節に伴ふ狂言作者は多くは吾國に於ける有数の學者にして深く和漢古今の書を涉獵し東洋的教義の如何を鑒別し随つて其社會上政治上に發現する事柄の是非をも論議するの資格を有する者なるが時恰も封建武門の專横に制せられ其の口を箝せられ其の筆を縛せられて不平鬱勃の間空しく糊塗に噉嚼して彷徨するの砌り一たび義太夫節の世に發現するや呼聲騰來各々競ふて著作場裏に奮闘するに至れり而して其の競技の決勝點とする處は少しにても著大の感化を世人に與ふるを以て主眼とする譯故其の綴る所其の慮る處相競ふて極端より極端に馳するは勢の止むを得ざる所たり而して其結局は人生の慘極たる死を以て争はざるを得ざるに至れり此の死なるものを最終の判決としてあ

らゆる趣向を練磨し各々其死方殺し方死ならざるを得ざるに至る順序殺さざるを得ざる經歷に對して種々紛糾したる手段を弄ぶも終に其の主眼たる目的は死と云ふことに歸着せしは争ふ可からざるの事實なり扱て此の死に導き來るの順序として總ての階級の君臣父子夫婦兄弟朋友或は男女相愛の状態を捕へ來りて布演輯述する筆力文技の非凡なるに一篇の義太夫を治亂數百年の間に演藝して飽かず巧拙數千人の藝人が演譯して倦まざるを見ても知るべし余は此狂言の社會に及ぼしたる感化の關係を論ずるの序を以て當時の狂言作者なるものを紹介するの必要を見るなり

三 竹本座及豊竹座狂言作者

竹本座の作者として井原西鶴(此は元俳諧師にして)層と題するもの又凱陣八島と云ふ淨瑠璃を作りたる人なり近松は狂言作者として此人の門人なり近松門左衛門竹田出雲長谷川千四三好松洛錦文流文耕堂松田和吉吉田冠子近松半二並木千柳二歩堂淺田可啓中村潤助八民平七榮善平北窓

後一竹田因幡竹田平七竹本三郎兵衛竹田外記竹田和泉竹田瀧彦竹田正藏
 小川半七近松景鯉竹田伊豆並木永輔竹土丸福松藤介竹田文吉北脇素文一
 成堂寺田兵藏近松東南松田才二竹田新四郎昔源七春江堂原爲裳近松能輔
 松田は守川文藏中井条次春木元輔等は最も著名の人々にして竹本座の
 繁榮實に推知するに足るべし面して豊竹座の狂言作者は紀の海音西澤一
 鳳田中千柳爲若太郎兵衛安田蛙文安田蛙桂並木宗輔並木丈助同良介同
 素柳並木五瓶村上嘉助豊竹應律豊岡珍平淺田一鳥浪岡橋平同鯨兒同
 蟹藏中村阿契中村阿笑豊田正藏梁塵軒豊正助難波三藏黒藏主七才子三津
 飲子竹本三郎兵衛竹本座と兩方あり清水三郎兵衛若竹笛躬近松東南竹本
 坐と兩方皆專助豊竹勘六但見彌四郎豊竹上野並木齋治福松藤助等が著名
 なる人々なり而して當時竹本座の隆盛に對衝して彼の巨名の義太夫の筑
 後掾が前を遮りて其門人たる豊竹越前の少掾を擁立し同じ大阪の道頓
 堀に於て堂々旗幟を翻へしたるは全く是に列記する是等作者の手腕にし
 て如何に其出でたちの勇健なりしやを想望せずんばあらざるなり

余は之れより進んで以上作者等の筆に成る著作の梗概を論じ併せて其
 狂言の如何に世人に感化を與へたるやを研究せんと欲するものなり

四 大和魂の興隆

斯の如き多數の作者は各々其特殊の手腕を提げて東西兩座の芝居に割
 據し多年練磨の筆鋒を奮うて其技倆を競ひしは今日其著作の跡に付て見
 るも甚だ瞭然たるものあるなり而して其脚色の骨子とするものは即ち死
 の一事を以て人情に迫り總ての波瀾起伏は之れより發生することとせり
 之れは彼の佛教が生老病死の悲哀的を根據として百萬の經典を縱横し以
 て人情迷悟の妙機を制したるに倣ふものにして即ち人類最感の死を以
 て基礎としたるを知るべし其君臣の義は之を以て貫き父子の親も之を以
 て遂げ夫婦の和又之を以て唱ふ是に於てか社會百般の出來事は悉く死に
 纏綿したる情實にして之を解決する死の研究をなす事は此等作者により
 て愈々進歩したりと云ふべし此故に己れの尊信する道義の爲め若くは恥

辱の爲めには容易く死と云ふことを以て決するは全く此の狂言作者の圓滑なる態度に出で之れを受けて譜節演布したる巧妙なる藝人によりて全腦を感化せられたる者と云はざる可からず要するに此の義太夫節の感化に魅せられたる吾國民は能く死と云ふことに極端の興味を翫味し盡すに至れり彼の近松門左衛門は元祿十六年未五月所謂世話浄瑠璃の始元たるお初徳兵衛會根崎心中を書下してより天下青若の男女は競ふて心中の興味に酔ひ死は戀の實なるかの疑ひを起さしめ盛に心中の試行實現を見るより終に時の政府をして會根崎心中の興行を禁斷せしむるに至れり作者の筆力茲に至りて極まれりと云ふべし此の如く作者は何れも死を以て基礎として巧妙の筆を舞し藝人は死の情を布演するに満腔の精を傾けたり此に於て天下は死の競争場裡と成たりと云ふも敢て過言に非るなり果して然らば余が前言したる大和魂なるものは己れの信念及び恥辱の爲めに遺憾なく死を實行するものにして之れを薰陶成育したるものは義太夫節と云ふ音曲の力最も其の多きに居るを斷言し得べし如何となれば吾國

故と文字なく典籍なく人心を教育するの材料に乏しく今日に於てさへ尙ほ外國の文字即ち半ば漢字を借り半ば吾國中古の僧空海の拵へたるいはを以て填補せざれば文章を成す能はざる程の教育的低度の國たり彼の神代記古事記日本書紀等の書は一も國民をして決死の猛勇を養成すべき感化を與ふるの書に非らざるなり其他宗教的の教育は却て死を恐るゝか死を敢てせざるかの本旨に外ならざるもの許りにて此の如く容易く死するの教育即ち大和魂的の教育は此の義太夫節の外吾國に古來より其材料なきなり而して此等狂言作者の趣向は終に其の死にかた殺しかたの競争となり少しにても悲壯慘烈の死にかたを爲す程一般の欽崇を引く事に誘ひ來れり寛保元年五月彼の文耕堂松洛小出雲等が新薄雪物語を書下して播磨掾内匠太夫等が之れを演じて當時の藝界を驚倒したり此の狂言には三人笑ひと云ひて或る事情の爲め三人同時に腹を切りて痛くないと云ひて笑ひ死する事あり又寛延元年辰八月松洛出雲千柳等が假名手本忠臣蔵を書下し大隅掾内匠太夫政太夫錦太夫等の之を演ずるや吾國君臣の大義

を全國民の腦髓に刻銘したり而して其の勘平切腹の段に於て原郷右衛門が氣息奄々の勘平に向つて勘平血判と云ふや其聲に應じて心得たりと絶叫し腹十文字に掻切りて臍を掴んでシツカと捺すと云ふ元來指の頭に附着する血汐にて十分なる血判に臍を掴んでとは誇大の虚言も亦た甚しけれども名人の演藝眞に迫り人をして實に勘平が死かたの慘烈に同情を極めしむ其他阪田の藏人は腹を切りて其妻の髪を掴んで引寄せ其腹の切口に口を當てさせ我が精神を受繼げよと云ひて臍を食はしむ其妻忽ちに妊娠して産み落したるが阪田の金時なり又大功記驚の森の鈴木孫一は或る事情の爲め幼弱の實子二人に刀を與へ少しづ己れの首を斬り落させて本懐と云ふ等漸次極端より極端に至る死にかたの競争は一番は一番より凄壯を極めたり世は泰平なれども音曲は修羅場なり人心は平穩なれども芝居は鮮血淋漓たり此の如き薰陶を受けて數百年間一日も間斷なく感化せられたる吾國民は其衷心より言語動作に至るまで悉く芝居的俳優的に變化し去りたるは殆んど事實的に現映し來れり日清日露兩度の戦

争に矮軀小弱の國民が其の慘烈の死様を競争して或は軍人の模範と云ひ或は軍神と云ふもの亦た争ふ可からざる因由の存するなくんば非ざるなり而して其名譽なるもの、俳優的なる彼の出征將帥の凱旋するや萬歳聲裡に擧手脱帽する時成田屋——と大呼せば如何に満足するならんを想見し或は議會壇上に立つて應答四邊を睥睨するの時音羽屋——と高唱せば如何に得意なるべきを付知せずんばあらざるなり其他婦女の男子に戀想する恰も八重垣姫の勝頼に於けるが如く妻の夫に貞操なる又正にお三の治兵衛に對するが如し伎客は幡隨院を氣取り義勇は荒木又右衛門を擬す蓋し之れ音曲隆盛の一現現象なり而して義太夫節の流行も其風俗に對するの傷害敢て少なきに非らざるべきも一方吾大和國魂の興隆に資するもの尤も著大なるべきを信じて止まざるなり余は茲に至りて益々本論を進むるの機會あることを喜ぶなり

五 作者の苦心

義太夫節の起因及び其歴史又此音曲の社會人心に及ぼしたる反應等は已に其概略を論了したるを覺ゆ故に余は更に當時の狂言作者が如何に苦心したるかを探究せんとす

抑々昔時の著述家即ち作者が其一篇の趣向と文章に苦心したるの狀態は實に筆紙の能く盡す處にあらざる慘澹と云はんより寧ろ決死の覺悟を以て從事したるの形跡瞭々たるを見るなり蓋し現代の小説家若くは著作家が惰慢終に湯薪の資に窮し下宿屋の二階に午睡纔醒の餘暇を以て淺薄の思想に筆を驅り原稿一頁の價を争ふか又は過譽虛名の學者が賣文一時の榮華を乘じて夏は暑を涼風冷泉の地に避け冬は寒を硝窓煖爐の間に逃れ放辟酒婦に戯るゝの傍ら一氣徒らに筆馬に鞭つて成る處の文章と日と同うして論すべきものに非らざるなり古の作者は勞を忘れ苦を忘れ貧を忘れ病を忘れ終に死生の境界を忘失して精神を其の著作に傾注し一に其の成就する處の作篇を以て生命として塞々倦まざるを見るなり余曾て巢林子近松の桃山祠畔著作堂の圖を見るに方二間許りの草廬にして四方壁を

塗り其の一方に三尺許りの入口あり他の一方に三尺角許りの窓あり此の前に机を置き傍らに火鉢及び手燭附け木等を置き他の四壁は悉く書棚にして和漢の參考書を堆積し殆んど暗室同様の裡に棲坐し一たび此中に入る時は直ちに虚淡の境界に入り心中一の衛生なく生死なく只だ人情纏綿の空想に耽りて心思微動の煩念なし門人の食を撤するや窓かに入口に挿入して屢々其食了したるや否やを窺ふのみなりと此の如くして趣向を練り句調を敲いて勞苦と老來とを知らず一身の全部頓に著述娛樂の花園に徜徉して心念又た古今に來往し事蹟作例に窮すれば燭を點じて四壁の參考書を獵り妙趣堂に充ち奇興心身を襲ふに至りて一篇の文章を成すと嗚呼宜なる哉其の著述の後世に互りて至大至強の感化を人心に致し其同文同篇は喻へ千百回之を反讀するも尙ほ厭く事なきの狀を見るや而して彼れ巢林子は其の門生に箴して曰く主旨は卑近を貴び趣向は紛纏を貴び句調は平易を貴ぶと此の三ツのものは彼れが百世の人心を驚倒して高歌低唱今尙ほ措く能はず終に風俗を搖撼するに至るの秘奧たるや更に疑を

容れざるなり又た彼の簗笠漁翁馬琴の如き一代の著作多くは唐誕に因る其の博識廣聞は彼れが天資の強記と剛根によりて描出したる戯作なりと雖も其の苦心慘澹より産出したるの興味は忽焉として紙表に湧躍するあり所謂人心を搖撼し風俗を變易するもの此に於て存するを知る而して彼れが著作中の一大篇たる南總里見八犬傳は殆んど絶筆にして其の自白する處實に慘澹にして又た快なるを覺ゆ彼れは天保四年癸巳の初秋輕微なる眼底炎に罹れり爾後天保十年己亥まで七年間醫を求め療を加ふるの暇まなく不撓不屈此の稿を滿尾せしむるに於て死尙ほ辭せざるの決意あり其の十二野の稿本を八野となし五野となし終に四野となし三野となし恰も兒童の清書大になすも尙ほ其の稿を止めず終に翌十六年庚子の春に至りて失明暗黒の界に沈淪せり彼れ若し普通常科の人たらば茲に至りて筆を投じて止むべきに由來東洋不世出の文豪奚爲れぞ箇般の災禍を以て其の精神を搖かすべき益々胸臆の興趣を奮ふて終に其の可憐の孫娘を捕へ來り一字一句若くは一事一例をも尙もせず古籍舊典を代讀せしめ隨

つて代寫せしめ筆々焉として倦まず終に其起稿より二十八年目萬延元年庚辰の年を以て滿尾脱稿するに至れり其勁勇巨膽復た何を以てか之れに比せんや即ち此れ等著述家の眼中には素より寒暑なく飢渴なく疾病なく衛生なく死生なきや論を俟たざるなり彼の並木宗輔が嫩軍記を著はすに須磨の苦屋に寝ねて漁夫に撻たれ三好松洛が檻樓錦を著すに辻堂に起臥して乞食と誤られたるも亦た其一例たるを知るべし果して然らば余が現代の著述家に向て竊かに淺薄と云ひ情慢と叫ぶも敢て無禮の罵言に非ざるを信するなり若し其著書にして坐ろに再讀に値し誠實なる感化を社會に與ふるに足るものあらば余は直に甲を其門下に脱し謝して九禮を捧ぐることを辭せざるべし

六 著名の外題

余は此の好機に乗じて以下當時の狂言作者が著述したる義太夫節の中に於て世間に聞馴れたる外題丈けを掲出するの快を食らんと欲するなり

○おさん茂兵衛大經師昔曆寶永三年丙戌九月近松門左衛門作
○小はる治兵衛心中天網島享保五年庚子十二月近松門左衛門作竹本文
太夫出座

○心中宵庚申同七年寅四月近松門左衛門作

○壇浦兜軍記同十七年子九月長谷川千四作

○蘆屋道満大内鑑同十九年壬寅十月竹田出雲作三輪太夫改め内匠太夫
出座此芝居には義太夫式太夫和泉太夫喜太夫七太夫常太夫等出席して與
勘平の人形を腹のふくるゝ様に作り始む是より操人形は三人掛りとなる
夫までは一人遣ひなりし

○敵討樓鑑錦同二十一年丙辰五月文耕堂三好松洛作

○御所櫻堀川夜討元文二年丁巳正月文耕堂三好松洛作此外題にて上總
掾播磨掾と改む

○平假名盛衰記同四年己未四月文耕堂三好松洛作田可啓竹田小出雲
千前軒作竹本島太夫初めて出席す此人は芋屋平左衛門と云ふ素人なり(吉

田文三郎梅ヶ枝の人形に長さし金と云ふ事を始む後ち菅原傳授の千代な
どにも遣ふなり

○新薄雪物語寛保元年辛酉五月文耕堂三好松洛小川半平竹田小出雲作
此芝居は此太夫島太夫百合太夫等にて演じたり此冬七太夫が江戸へ行く
に付き播磨掾内匠太夫紋太夫三絃友二郎等同行して之を演ず

○夏祭浪花鑑延享二年乙丑七月並木千柳竹田小出雲三好松洛作此太夫
百合太夫袖太夫其太夫政太夫錦太夫島太夫紋太夫等出席世話物九段續は
是より始り又三代目吉田文三郎工夫して長町の段にて人形に水を掛ける
事を思ひ付たり

○楠昔噺同三年丙寅正月竹田小出雲並木千柳三好松洛作同年五月播
磨掾三回忌筑後掾廿三年忌追善にて此太夫政太夫三絃友二郎人形吉田文
三郎山本伊平次出遣ひ

○菅原傳授手習鑑同三年丙寅八月竹田出雲並木千柳三好松洛作此太夫
島太夫政太夫出席

○義經千本櫻同四年丁卯十一月竹田出雲並木千柳三好松洛作吉田文三郎の工夫にて忠信に源氏車の廣袖を着せる事を初む

○假名手本忠臣藏寛延元年 戊辰八月竹田出雲三好松洛並木千柳作大隅掾千賀太夫内匠太夫専長門太夫土佐太夫政太夫錦太夫佐野太夫上總太夫出席實に古今の大入りなり

○双蝶々廓輪日記同二年巳巳七月竹田出雲三好松洛並木千柳作此芝居にて鶴澤友二郎死す

○源平布引瀧同二年巳巳十一月並木千柳三好松洛作此芝居にて上總太夫死す

○戀女房染分手綱同四年 辛未四月三好松洛吉田冠子作

○奥州安達原寶曆十二年壬午九月竹田和泉近松半二北窓後一竹本三郎兵衛作翌癸未正月竹田座類焼に付竹本座へ加る

○本朝二十四孝明和三丙戌正月竹田出雲竹本三郎兵衛作島太夫鐘太夫住太夫組太夫出席

○太平記忠臣講釋同年十月近松半二三好松洛竹田小出雲筑田平七竹本三郎兵衛作竹田文吉座にて大入をなせり

○傾城阿波鳴戸同五年戊子六月近松半二作島太夫鐘太夫染太夫君太夫網太夫出席

○お染久松新板歌祭文安永九年庚子九月半二作以上竹本座外題中の抜書なり

○鎌倉三代記享保三年戊戌正月紀海音作

○苜萱桑門筑紫標同廿年乙卯八月並木宗輔同丈助作駒太夫始めて出座(播磨屋彌三郎事)

○玉藻前職 袂寛延四年辛未 正月橘平一鳥蛙桂作

○祇園祭禮信仰記寶曆七年丁丑十二月中村阿契應律黒藏主二津飲子一鳥作

○岸姫松濤鑑同十二年壬午四月應律笛躬藤介黒藏主永介作八重太夫出席(泉屋平兵衛事)

○茜屋半七三濃屋三勝艶容女舞衣明和九年壬辰十二月豊竹定吉座三郎
兵衛應律平七作岡太夫出席
右豊竹座外題中より拔書なり

以上列記の外題の外敷座に互り百五十六年間數百の書下し外題あり此
等は皆な國家の治亂興廢に關せず幾百年間日夜の間に演唱せられ又幾千
百人の藝人に幾千萬回演奏せられたるやは殆んど想計する能はざるなり
然らば則ち厭かれざるは興味あるが爲めなり興味あるは感化せらるゝの
本たり感化せられて初めて風俗に變易を生ず又た以て止むを得ざるの順
序に屬するを知るべし

七 藝人の苦心

義太夫節は幸運によりて名人と學者との好遇を得たるがため世人に絶
大の歡迎を受けて偉大なる功力を百世の後に遺したるは他の藝術の永く
欽羨に耐へざるところたり而して往昔此の音曲を演ずる名人は雲の如く

起り潮の如く湧き各々其の技藝を練磨せしが其の苦心の梗概は彼の淨瑠
璃古咄集によるも瞭々たるものあるなり寶曆七年丑十二月中村阿契等數
人が勵精の力を奮ふて書下したる祇園祭禮信仰記は尤も當時の藝界を驚
倒したるが此の時元と大阪船場の商人義太夫節にて素人の所謂旦那衆た
りし鍋屋宗兵衛と云ふ人多年此の音曲の妙味深奥を研鑽し斯道藝人の段
段俗調に流るゝを歎き又た豊竹座の衰微廢滅に歸せんとするを慷慨し終
に豊竹麓太夫と名乗りて打つて出で此の外題の爪先鼠と云ふ場を語りし
より滿天下の藝界を振蕩し其の藝人と素人の別なく老幼婦女より出家侍
町人百姓に至るまで此の麓太夫の語り場を聞かんと四方より堵の如く豊
竹座に群集し終に翌寶曆八年戊寅三月まで四ヶ月間此外題を打通し大入
をなしたり爾後麓太夫が語りたる外題多く彼の繪本太功記尼ヶ崎の段日
吉丸稚櫻三段目小牧山城中の段の如き皆麓太夫の語りたる場なりし彼の
義經千本櫻すし屋の段も麓太夫にて書下したるやう云ふ者あれども此の
千本櫻は延享四年丁卯十一月竹本座にて出雲等の數人が(前稿に委し)書下

して芝居を開業して大當りをなし、文字太夫、信濃太夫が之を演せしを始めとする故延享の書下しを凡そ十一年後の寶曆七年に始めて藝界に入りたる麓太夫の爲めに書下す筈なく、此れは寶曆十一年辛巳十二月笛舩阿契の書下したる祇園女御九重錦と云ふ外題を加賀太夫喜太夫鶴太夫にて勤めたるとき麓太夫が此すし屋の段を中入場に語りて大入りをなしたることあり、此時の語り風を取りて節付けを改訂したるより斯くは云ふなるべし、此れ中狂言或は付けのもの始元にして其後永年の間通し外題の中に別狂言を一段語るは此麓太夫の特有權の如く成り行き當時如何なる藝人も此特權を覬覦する者はなかりしとなり、事の次でに斯くは記し置ものなり

八 詞 と 色

此故に此の太夫の語りたる場を麓場と稱へて藝界一種の風格を殘し百年の後此の藝風を追ふて修業研鑽を加ふるもの其幾千萬なるを知らざれども一人も其堂奥を伺ひ得る者なく比々頻々として團子を杓子で掻き廻

す如き鈍き調節にて嗚り散すことになり居れり而して此の麓太夫が研鑽の狀態は如何抑々義大夫節の世に歡迎せられたるは他の藝風と違ひ大聲強喉、調節整然之れに加ふるに詞と云ふものありて各種人情の變化狀態を語り出す故如何なる無智文盲の人にも其語味と情愛とを會得せしめ得るが特徴にて他の音節諸藝は所謂座敷藝にて數百人若くは數千萬人群集の大芝居にて其語味と情愛とを明瞭に聞取ること能はざるの時に當り元祖義太夫が天性の大聲美音なるを資として之れを芝居に掛けて興行し以て己れが藝風を社會に徹底せしめたるより麓太夫は深く此の本義を尊崇し第一詞に於ける人情の變化を考へ随つて詞を云はんとする前にある色と云ふ音節の語り方を研究し而して初めて地合と云ふ總ての諸節を明白に優美に上品に高尚に攻修し翕々然として急舒ある語り振りを旨としたるより巍然として一藝の風儀を一變したるなり夫れ茲に至る迄の麓太夫の苦心は敢て尋常藝人の窺ひ知り得べき處に非らざるなり彼の社土藝遊記に曰く寛延二年二月(麓太夫が豊竹座に入る九年前なり)根岸伏戸町都一

賀師匠は浪華の鍋屋大人に招かれて京都の藤村檢校と共に深草の節付けを調べて翌年正月に荏土に歸り夫より此節廻し一入流行せり云々とあるにても如何に麓太夫が壯年より音節の譜調に討究苦心せしかを知るべし、時恰も大平の世にして貴人富客の遊藝に心を傾くる者多しと雖も此悲風悽慘を基礎として著述したる義太夫節の改良に此の如き精苦を盡したるは敢て常人の企て及ぶべき處に非らざるなり宜べなる哉其藝の百世の後尙ほ上下の人心に偉大の感化を與へて止まざるとや而して麓太夫が此仰鑽を盡して藝風の腐敗を防止したるは一は藝祖の高風を懷ひ一は當時藝人の頹勢を悲み其阿世迎合操行日に下落して昔時の遺風だもなきを慨嘆したるより出たるは其藝風の遺傳に見るも明かなる事實たるを知るなり彼の所謂麓場なるものゝ音遣ひは頗る高尚優美にして殊にギンの譜に對する音遣ひは妙味津々として盡くるとなく其絃師がギンのツポをニジリたる處より音を發して何處までも下劣なる音調に落ちざるは恰も丹頂の鶴九霄に舞ふて下界の塵に交はらざると一般如何なる田夫野人も覺え

す襟を正して其調節を玩味するに至る今や明治の昭代長へに風清く山靜かにして萬樹枝を鳴さず太平の餘慶巷衢に満ちて民間の諸藝實に非常の進歩をなすの時に當り此義大夫節のみ存りに其品位を失墜し此等麓場等の音調を真正に玩味して演奏する者將さに絶滅せんとするは藝界の爲め實に惆悵の念に耐へざるなり唯だ今日僅かに雲間の一星とも云ふべき竹本攝津大掾の老將のみ毅然として斯道の明暗を司どりて炯々たるあるのみ余はいよゝ本論を進めて斯藝將來の消長を卜定せんと欲するなり

九 豊竹座の再興并に麓太夫の藝風

蒸暑の盛んなる三句ならずして涼味忽ち秋郊に生じ黄丹坐るに樹杪を染めて落葉觀すゝ地上に委す騷人一朝の霜に驚駭して詩思未だ熱せざるに氷雪遮然として軒に迫る此れ一年無常盛衰の狀態にして古今實に其の機を一にす人間界裡百般の榮枯も復た正さに之れに齊しきものあるを知るなり元祿寶永の間一時絶代の旺盛を極めたる義太夫節も藝界進歩の

華たる俳優演劇の爲めに其光彩を奪はれ終に寛保延享の頃より其技藝の精神に惰慢の脈を通じ次第に藝科の妙趣に離れて修養甚だ正しからず情緜れ氣殘ねて卑譜藝界に普ねく俗調巷衛に遊し此の時に當りて偶々藝雄麓太夫あり慨然として斯道の頹敗を嘆き彼の尙綱を拂ふて錦衣を顯はすが如く其の研鑽の妙技を提げて藝界の腐敗を防止し爾後八重太夫泉州堺の商人泉屋平兵衛事始て岸姫松轡鑑を語る是れ寶曆十二年四月にして麓太夫に次ぐの名人なり儀太夫島太夫或は豊竹筑前少掾明和元年甲申十一月姫景清八島日記を語りたる人なり駒太夫等の名人輩出し終に明和四年丁亥正月三日最上吉日を卜して一時廢滅に歸せんとしたる豊竹座を再興し星兜弓勢鑑を演じ此芝居に麓大夫十七太夫恆太夫組太夫喜太夫等の勇將一齊に出座して技藝の精妙を盡し恰も疾風の砂を捲くが如く懸崖に石を轉するが如く積日の衰運を一時に挽回して没日を中天に回すの概ありしめたり此に於て明和七年庚寅九月十九日に作者界の驍將萬三專介阿契平七應律の五士は協合結托其精銳を竭して壽永楓元曆梅源氏鵜鳥越を書

下し豊竹此吉太夫を座元として盛んなる開場をなし當時の名人島太夫駒太夫此太夫時太夫生駒太夫入太夫杣太夫房太夫等を網羅して一世を風靡したるが爲め豊竹座の羽翼稍々備はるに至れり而して麓太夫は此の好機を逸せず同年十一月に於て竹本座作者中の張子房とも云ふ可き竹本三郎兵衛を聘致して「北條時頼記」を書下さしめ座祖豊竹越前少掾の七回忌と云ふを期として遺子豊竹和歌三を座元となし麓太夫自ら佐野源左衛門常世鉢木の場を出語りにて勤めたるが爲め此れまでは簾中許りにて出語りと云ふとをせざりし茲に愈々豊竹座藝風の礎石を勁硬ならしむるを得たり而して此一段に於ける麓太夫の苦膽焦慮は後風下流の藝人等が敢て其一端をも窺ふ能はざるものにして時恰も徳川泰平の餘澤に狂れ政綱弛緩士氣腐爛士人の華奢婉麗は忘國亡身の讖をなし民衆の鼓腹擊壤は廢倫乖義の聲に均し彼れ麓太夫が怒氣虹の如く常に慷慨の著作を以て名ある竹本三郎兵衛をして佐野常世が曠世の士風を叙し五百年前の古武士を捕へ來りて末世墮落の淵に沈淪せんとする士心を警醒せんとする其企圖の

雄健なる豈に一の豊竹座再興の籌計として見る可けんや所謂治に居て亂を忘れざる日本固有の元氣を其汚濁に救はんとするや更に疑を容れざるなり之れに加ふるに其技藝の鍛錬に費す處の苦困果して如何ぞや古咄集に曰く「麓太夫殿の鉢木の段は高尚にして優美に氣健やかにして情深し此は京都の能太夫金剛伊織殿を招いて日夜稽古を勵み又三味線の野澤喜三太殿は藤村檢校殿に就て七日七夜の斷食稽古を爲し興行三日目舞臺にて血を吐かれたり」と云ふを以て見るも其決心の如何に勇壯なりしかを見るを得べし余が會て一藝の奥を極めて世に感化を與へんとする者は敢て死を顧みずと云ふの正に過言に非ざるを知るべし而して此興行の當時社會に及ぼしたるの効果は實に尠少にあらざるなり古咄集に曰く「麓太夫殿の時頼記の開場せらるゝや京大阪詰合ひの諸藩侍衆は多くは二度三度も聞きて皆々感心の涙を流し何れも其重役の許しを受けて態々京都邊より宿屋付にて聞きにわせられたり此興行大入の爲め明和七年庚寅十一月三日より翌年三月十五日まで打續けたり時の御奉行伯耆守様より麓太夫殿に

任官の事を勧めらるゝも只管に御断り申上げられたり云々」にても其麓太夫が精神の如何に功名に淡く濟世に急なりしかを窺ふを得べし嗚呼世遠く人亡び教へ弛まり修養正しからざるの時に當り身を封建の制下に委し素餐干城の職にあり乍ら治者は士心の搖亂を恐れて節度を忘れ士風日に月に懦弱にして痴道に陥るを救はず苟且偷安一日を姑息するを以て偉功勳績となし被治者は人慾の縱放に耽溺して君國の大事を忘れ偶々間巷一藝兒の演技に警醒せられて青天の霹靂かと疑ひ農工の愚民と感を同うして獻款泣涕の醜をなす宜なる哉徳川封建の瓦崩するに當りて士氣の却て士民に劣れるものあるや而して其義太夫節の教義は深く下民の腦官に浸潤して萬世不滅の大和國魂を凝成し國難に擧るゝ毎に鏘々金石の聲を發するを見る爾後豊竹座の勢運日に月に隆盛に赴き麓太夫の名聲天下に磅礪するに至りて彼の竹本座にて其礎石とも云ふべき老功無比の一員たる竹本政太夫は深く麓太夫の高風を慕ひ己れが舊技の卑調に陥りしを悔ゆるの餘り其位列藝格は遙かに己れが下にある麓太夫の門下に贊を執らん

事を覚るに至れり麓太夫堅く之れを辭するも聞かず終に之れを諾するに至りて彼の竹本座に同様の舊誼ある竹本三郎兵衛は此の政太夫の爲めに「お梅桑之助角額嫉妬柳」を書下し豊竹和歌三を座元として之を演せしめたり實に明和八年辛卯五月なりとす此時に於ける政太夫の藝風は更らに一改進を加へ人氣満都に横溢して恰も錦上花を散らすの概あり此より三郎兵衛は引續き梅の由兵衛迎駕籠を同年八月に書下し「嗚呼忠臣楠氏」を同年十二月に書下し同九年壬辰十二月岡太夫の爲めに「三勝半七艶容女舞衣」を書下し豊竹定吉座に於て演せしめ安永二年癸巳十二月岡太夫の爲めに「櫻鑄恨絞鞘」を書下して豊竹座の興隆旭日の東天に昇るが如し此に於て當時竹本座の軍師たりし三郎兵衛は今日豊竹座の張子房となりて藝界の布衣より起りたる沛公に齊しき麓太夫を輔翼して終に韓淮陰隲九江たる政太夫岡太夫綱太夫の如き英豪を指呼するに至れり知らず三郎兵衛が爾後高蹈石松子と共に遊ぶの跡を躡せずと雖も藝界炬火翁の偉蹟照々として萬世に滅せざるを識るなり是に於て余は尙ほ本論を進めて孤舟藝海の

波浪に漂滌し其奇勝妙寶を探りて獨り逸興を縦まゝにせんと欲するなり

十 現下義太夫の墮落(結論)

余は淨瑠璃節の始元より義太夫節の事歴に對し遠く元暦の昔より近く寶永明和の時代に至る凡五百數十年間の起伏状態を略述し之れに加ふるに菲薄なる余の査察と私見とを附加して茲に第十回を以て其の論稿を終らんと欲するなり夫れ明和以後安永天明寛政享和文化文政天保より明治の今日に至るの間決して斯道の名人無きに非らざるも其の存する處の語り本或は諸書によりて要闕を試みるに盡く古人の書下し古人の語り方を電話的に復習するのみにして未だ人情の變化語氣の動靜人格の品位等を腹中に構へて音聲の舒破急を練磨するものなく甲は詞を巧みに語れども地合に生氣なく乙は地合を優美に語れども詞に氣合なく丙は詞地合とも音遣ひ流暢なれども間抜け息悪く情合切實ならざるが如き輩簇出して聊か以て斯道の全豹を盡して藝命を生動せしむるに足るの藝人なきは寔に

慨嘆に耐へざるのことに屬す蓋し天下百般の音曲中にて天資の惡聲を以て日本一の名人たるの藝妙を究め得らるゝものは義太夫節と謡曲の外決して非ざるを知る彼の江戸の立て藝とも云ふべき富本常磐津清元の如き音曲は若し美音ならずして惡聲なりせば始めより其門に臨む能はざるのみならず其の闕だも越ゆる能はざるの藝術なり又何人も之れに造詣するの意を起さざるなり義太夫節は其筋簡易にして常に此の濫輿に入るの路を闡いて後世の藝學を迎ふると雖も輒く其の妙處に到る能はざるは蓋し其の修行の疎漫と柔弱とに胚胎せずんばあらず即ち他藝に比して其の修行の困難なる實に顯著なるものありて存するなり今余の識見を以て修業の困難なるの實例を検舉せんと欲せば敢て一片論文の能く盡す處にあらず故に試に一例を以てせんに總て藝道に下手の多きは其修業の困難を代表するものたらざるはなし彼の謡曲圍碁一中節義太夫節の如き其下手の多き實に此れが計數の道なきに苦まんとす而して此の各藝大下手連の大群は彼の蚊蠅の夫れの如く世人が少しの油斷あるに乗じて吶喊邁往天狗

の鼻を振り蠢めかして強制の喝采を迫らんとす危険何ぞ是れより太だしきものあらんや夫れ道は入り易うして行く事難し彼の禪家の所謂雲去りて青山近く道易うして且つ行く難しと一般此の下手は入り易きに發起して行いて迷悟の界に彷徨し一悟三迷終に修業の道塗を紛亂し一念不覺の界に墮落して荐りに不可思議の狂音を亂發し不衛生なる氣を醸成して遂に社會を暗黒の界と成し去らざれば止まざらんと欲するに似たり此時に當りて彼の老雄竹本攝津大掾の如き巍々焉として斯道の大綱に踞し我れ生存中は決して斯道の範疇に瑕疵を留むるを許さずと云ふの概を以て琢磨討究を怠らざるの結果今日僅に斯道の壘砦を失はざるを得たり攝津大掾年齒七十四歳之れに加ふるに雙鼻喘胃の諸患疾を有しながら老いて益々變遷而して尙ほ研鑽修行の酷苦を繼續するに至りては其の藝術の深奥なる唯だ驚嘆の他なきを知るなり余弱冠より諸藝の科學的研究を好み彼の攝津大掾が越路太夫頃よりの演藝を聴くこゝに殆んど二十有餘年情情彼れが研鑽の跡を回顧すれば航程渺茫として煙の如きも宛として波瀾

澎湃の間明媚の風光を來往したるの跡あるを見るなり余は明治の昭代に於いて危く義太夫節の綱紀を把持したるの勳績は故人豊澤團平(此の絃師團平と攝津大掾との論評は他日更らに發稿する處あらんとす)と今の攝津大掾とのみに歸せずんばあらざるなり嗚呼義太夫節の盛衰も亦晩秋の天の如く晴曇常なく風雨時によらず過去の旺盛は一時の夢にして今日僅かに攝津大掾一人にして此の頽勢を支ふるに至る彼の所謂管仲微りせば髪を被ふり衽を左にせんと云ふの責めは一に攝津大掾の雙肩に懸在するを見るなり大掾たるものゝ任豈に輕からずと云ふ可けん乎夫然り而して義太夫節の策源地たる大阪にして唯だ一の攝津大掾有るのみなるが東京現在の斯界は實に滿野草茫として狐兔走るの有様にして彼の女義太夫なるもの擅まゝに陸梁跋扈して斯界を魅し去らんとするの傾向を見るなり且つ夫れ斯界に於て女義太夫を蔑如することの絶甚なる所以は要するに修業の如何より打算することにして其修業未熟なるが爲め阿諛迎合只だ聽客に媚びるを以て本旨とするに原因せずんばあらず更らに余を以て之れ

を觀れば女義太夫に對して是非の批評を下すは未だ義太夫節の何物たるを知らざる者のもとに屬するなり如何となれば義太夫節の修業は恰も武士の武術を修業するに酷似せり其滿身力の應用其氣合の鍛鍊其息間等の研究實に寸毫の間隙油斷を許さざるの藝術たり故に此修業は彼の嬌容纖弱なる婦女子の敢て一音節だも伺ひ知り得べきの事にあらざるなり即ち彼等女義太夫は古作の名文に節を附けて讀むと一般なり語を換へて之を云へば此名文を浪花節に讀むも人は感すべく又祭文節にするも聞くを得べし不幸にして義太夫節にして之を讀むが故に人は之を義太夫節として聞くなり夫れ武道に均しき修業をなして爲す處の演藝は即ち人を斬るの演藝なり所謂絃師と眞劍の勝負を爲すなり此故に互に一丈三尺の腹帯を締めて無我の觀念を定めて演臺に上り始より雙方の息と隙とを相窺ひ競技上に於て死生を決せんとす故に其一方に於て秋毫の隙あるも直ちに流血淋漓に均しき大怪我を爲すなり女義太夫は之に反し彼の俳優の弄ぶ刀の如く竹箆に銀箔を塗り呼吸を捨て其手續を演じ斯く打たば斯く受けよ

斯く突かば斯く外せよと恰も兒戲童踊に齊しきとを連続する内に一種の
息呼吸の物真似をなす矧んや彼の弾き語りの女義大夫に至りては其息
吸の醜陋なる尙ほ大道の乞食藝に均しきを見る如何となれば元來二人し
て爲すべき事を一人にて爲す大夫と絃師と二人なればこそ幼少より息間
の修業を要するなり其の呼吸の合ふと合はざるは此の修業の大問題なり
然るに弾き語りにては如何なる場合にも息と間の合はざる愛なし恰も
角力を一人にて取り撃剣を一人にて遣ふと一般なり何ぞ其の巧拙を論ず
るの價値あらんや嗚呼悲しい哉昔時藝祖の此道を振むるや畏れ多くも之
れを宮中に演奏し延いて人心の教養に資し以て世道に偉大の裨益を遺し
たるの藝格を情漫放恣の修業に委して終に泥土の中に滅盡せしめんとす
彼の能樂の旺盛なるや政府之れを武家式樂の班に加へて修養せしめしに
後世に至りて墮落武士が破笠裂扇を敲いて市井に食を乞ふの資となす後
大夫節の末路正に之れに施如たるものあるを見るなり古語に曰く禮樂興
らずんば道蒼生に至らずと古の樂は高尚悠遠なり今の樂は近易切實なり

吾國は此の近易切實の音樂によりて蒼生の感化を支配せり今や此の樂の
滅盡正さに目眩に追らんとす夫れ何物の樂か將來の感化を司令せんとす
るや落日悠々として秋復た老い遠天際り無うして鳥空しく飛ぶ聊か義太
夫論を草して所思を述ぶると云爾

刀劍譚

庵主が刀劍を好むは決して道樂にあらずして全く天性の癖なりと信するなり其故は庵主が九歳の時即ち明治五六年の頃父母は庵主が餘りに亂暴にして放膽なりしが爲め萬一の怪我を慮り長さ一尺二三寸位の木刀を帶させて決して眞劍を帯びる事を許さざりし或時聊かの事より十四歳の兒童と喧嘩をなし鎮守の社内にて盛んなる鬪争を初めたりしに先方は年長の上り力量勝れ殊に眞劍を帶し居たるがため忽ちにして庵主の木刀を叩き落し之れを拜殿の敷居の上りに持ち行きて彼れが自分の刀にて余の木刀をゴチ／＼切りてトウ／＼切り折つて捨て庵主を罵りて摺子木を腰に差す摺子木坊主と云へり庵主は左の足に少しの創傷を受けて丸腰にて晩景に家に歸りコン／＼自分の部屋に入りしが夫まで一滴の涙をもこぼ

さりし庵主がサア残念で悲しくなり何とか復讐の工夫はなきやと苦心し其夜は碌に眠りにも就かず翌朝早く起き出て道路にある馬の糞を兩方の袂一杯拾ひ込み彼の敵の兒童が其父母と共に朝飯の食卓にある處に飛び込み彼の馬の糞を攫んで振り上げ謝罪せねば卓上に打ち付けるぞと迫りたり彼の父母は事の意外なるに驚き坊ツチャン御免なさいを連發して謝りたる故昨日の事の大略を泣ながら陳述したりしに彼の父母は非常に驚き其の自分の子をしたゝか叱りて謝りし故少しは心を安んじて馬糞を打ち付ける事を止めて歸り來り父母には木刀を水泳に行きて流失したりと許り更らに新しき木刀を買ひ貰ひたり然るに先きの兒童は昨日の事を遺恨に思ひ庵主が他の友と野外に遊び或る肥壺に小便をなし居りしを見て出し抜けに庵主を後ろより肥壺の中に突き落とし逃げ去りたり庵主は實に其不意に驚き憤恨一時に湧發し稚な心に決心し全身糞汁に塗れたる儘家に駆け込み若黨の宗吉と云ふ者の脇差のありしを取るより早く駆け出し彼の兒童の家に走り行き彼れが門内の蜜柑樹の下に遊びをりしを斬り

付け其肩を少し許りと其腕を少し許り斬りたり彼れは其出血を見ると共
 に大聲を揚げて號泣し庵主は忽ち其家僕及其の父母の爲めに捕り押へら
 れ間もなく庵主の兩親も驅せ來り何か事長き相談ありし末庵主は家に連
 れ歸られ手強き折檻の上漬物小屋に入牢の身とはなりたり然れども庵主
 は何だか非常に愉快なる感がして少しも泣きも何もせざりし其時に庵主
 は何か全身に染み入りたるが如き感じを爲したり其は刀は實に愉快なる
 物にて庵主を侮辱する事の執拗にして且つ猛悍なりし彼の兒童が庵主が
 斬り付けると同時に大聲を揚げて泣き出したる有様は其憤懣の心を散じ
 其上又た復仇の目的をも併せて達したるが爲め兩者相待つて庵主を慰む
 るが如き思ひありて少しも怖ろしき感じを起さざりし庵主は當時の驕ろ
 げなる記憶を繰返し探り見るに此後又再び庵主を辱かしむる者あらば必
 ず斬らん事を樂み居たるを覺ゆ夫より此騒動は無事に片付きたる後庵
 主は愈々澤山の亂暴と不始末とを働きて三日に上げず父母を困らせ他人
 に迷惑を掛けたる末終に十五歳の春となり父が強烈なる疫病に罹りて一

時精神昏忘したる爲め庵主が家督相續をする事となりたり是に於て親戚
 立合の上先祖傳來の家寶なる磨上げ無銘肥後延壽國資の折紙付刀と在銘
 金剛兵衛盛高の脇差とを引渡さるゝ事となれり此刀は古來より研ぐこと
 ならずと申傳へたる物にて吾家の家運を屢々恢興したる歴史を有し及毀
 れ血付の儘拭ひ付けくして代々保存し來りたる故恰も漆塗りの如く黒
 光りになり居れり第一此刀は慶長五年庵主が祖先關ヶ原の戦に西軍に從
 うて拔群の功を立て第二は寛永五年島原陣に於て黒田忠之に隨ひ大功を
 建て第三は承應二年の長崎目付として耶蘇教徒の隠密數人を斬り第四は
 最後にして天明七丁未の年庵主が家に容易ならざる變事こそ出來せり夫
 れは庵主より六代前の杉山清左衛門と云ふ人の時なり當時世は實に太平
 の穩波に漂ひ流れ久しき徳川の末の濁りも不知火の磯馴れ松の幾千代を
 謳ふ縁の民草も亂れぞ初むる五月雨の夏の始めの頃なる由同藩の家老職
 食祿八千石を領する鎌田八太夫の長男清左衛門は馬廻り格を以て家門を
 建つるわが家の養嗣子とはなりたりける其故如何にと云ふに此清左衛門

の養父なる杉山三左衛門は家名を相續すべき嗣子なく唯だ春重女と云ふ一人の娘あるのみなりければ慈父の萬念一に此春重女の身の上に鍾り月圓かなるの夜は琴箏の樂に耽り雨靜かなるの時は香茶の幽を弄び雪花風月の朗詠は一藩の兒女に秀出して殊に絶世の美貌は城下の青鞵を殺掃せんとする有様にて今尙ほ藩中の耆老に柳原小町の評を傳ふるものあり(吾家元柳原にあり)此事忽ち藩公の聽に達し彼の春重女を君側に召されんとするの風聞ありければ三左衛門の驚き一方ならず如何にもして此愛女を家に止めて良縁の養子をなし家名を相續せしめんものと苦慮せしが此れより先き彼の春重女の美貌を慕ひ或は之れを娶らんと云ひ或は養子となりて入婿せんと云ひ傳手を求め入魂を結んで申入るゝ者引きも切らず中にも彼の鎌田八太夫の嫡男こそ其中の尤切なる者にて屢々三左衛門に其娶嫁を断絶せられたるにも拘はらず此殿中與勤めの風説を聞くや懊惱煩悶遣る方なく終に八千石と家職とを抛ちて養子入婿を申込むに至れり三左衛門も其婿の格式違ひなるに留意せざるには非ざれども吾家血統の阻

絶と君命の降下せんとするの急は何物も之れを猶豫するの餘地を與へず終に此鎌田の要請を容るゝ事になりたり此れより杉山家の繁榮一藩を雄蓋し名にしおふ家老上席の鎌田家を親戚としたること故其の富と名望は何人も其の右に出づるものなきに至りしが浮雲は克く月を蔽ひ痴風は克く花を散すの喻への如く一時の榮華は轉瞬の夢にして彼の春重女は翌天明八年戊申の十二月一男を分娩すると共に窓漏る風の凄しく孤燈一搖の暇もなく滅盡し去りて一莖の白蓮忽ちに碎け昨日の花顔笑容嬌姿妖態は終に曉間の一縷香煙屏裡の人と化し了んぬ父三左衛門の悲嘆は申すに及ばず清左衛門の哀傷譬ふるに物なく一藩の人心又た此の訃報に驚悲して同情の涙を溢さざる者なかりきと云ふ而して吾家が此の悲變の中に其の幾分を慰め得べきものは春重女が産み落したる一嬰兒にして此れを後年杉山平四郎昌誠と名乗りて一藩俊秀の随一とせられ享和三年癸亥八月其の十八歳の時に於て彼の傳家の寶劍延壽國寶の一刀を以て一時断絶崩盡したる家名を振興し泰平懦弱の風を極めたる一藩の士風を震蕩し身文

武兩道の秘奥を究めて年僅かに十九馬廻席にして大目付格を命せられ弊
風革新の大功を奏したるの偉人なりとす庵主は此れより進んで徐ろにこ
の稿を續け更に刀劍の趣味を叙述せんと欲するなり

二

斯て杉山清左衛門は最愛の妻に死別れ深山の奥の小杜鹿が狩夫の征箭
に射捕られし牝鹿の巢の寒床に躑躅りて片割れの月に泣なる思ひして哀
傷の涙乾くときなく佛事供養も懇ろに營み居りしが雪も消え花の苔も春
風に笑ひ綻び何時しかに時雨の窓に橋の花の香籠る頃となり去年の冬よ
り只一人立籠りてのみ居たりたる憂きに塞る扉を開き偶々清き五月晴雨
の今日の日和を因縁にや漫歩の心して飄然として吾家を立出で程遠から
ぬ城下外れの出口と云ふ處の郊外に出で半日許りも遊び暮し其歸りに春
の町と云ふ處の裏手の路を蹴り來しに小笹牆の其中の紫陽花繁る草の屋
に年の頃三十路許りの女ありて誰が爲め洗ふ小夜衣か今日の日の目に乾



さなんと、餘念もなく張物して居たりしを、心ともなく清左衛門風斗垣間見
 しに今日と行き、昨日と暮れて詫び渡る、今は世になき春重女に似たとは思
 か若し夫れかと思ふ、許りに打驚き、行きも得やらず眺めしが、思はず見交
 す顔ばせに、散るや楓の立田川、紅ならぬ胸の浪押鎮めつゝ立別れ、家路に歸
 り夫よりは爲すことゝても手に着かず、亂れそめにき煩惱の胸の紛れの解
 く由なく、獨り思ひを焦しけり夫れ太平の世大祿の家に育ちし若者は武門
 ほど尙ほ意地弱く、路の葉草に置く露にも情をかけて無意く落なば受けん
 様ぞある清左衛門も今は早や其の魔神に橋はれて、迷ひの道の人はなり
 ぬ是れ全く清左衛門一人の科にはあらず、榮花の庭に馴れ育つ時世の罪も
 あるぞかし、斯くて其年も暮れ、明る卯月の初めつかた、或る執り持ちの人あ
 りて彼の女を側妾となし、積る思ひの鬱さ散りて、最と睦しく暮せしが、此女
 を勝枝女と云ひて元は肥前諫早の士に三木原藤馬の妻にして、故ありて浪
 人し今は夫に死に別れ一人の男子五歳なる藤次と云ふを養育し、僅かの知
 邊を便りにて彼の春の町に住居なし、細き烟に暮せしが、思はず此度清左衛

門の屋敷に勤むることとなり、何呉れとなく細心に働きければ清左衛門も、二なき者とぞ思ひけり、此ぞ杉山家の家庭に、大紛亂を醸したる因原にして、終に家名斷絶とまで成りたるなり、月日に關守なく彼の藤次が二十四歳の頃なりけん、幼なきより人手に養育せらるゝ内、日夜武藝學問を勵み終には、一藩免許の誰れ彼れも其技を譲るの腕前となりければ、清左衛門の後援によりて町道場を開き、城下の若者を蒸陶せしが、何時の頃よりか慢心しけん、人を人とも思はずに、亂酒放蕩に身を持ち崩し、常に其の實母たる勝枝女の處に來りて、飲酒亂行の上、無心の數々を云ひ盡して歸るを例となし居たり、是れより先き勝枝女も清左衛門の好人物なるを幸として、獨り一家の權力を握り、終には正妻となりて、清左衛門は有るか無きかに舉動けるが、茲に最と哀れなるは、一子平四郎にして、三歳の時より勝枝女の手にかゝり初めの中は細心だちて、時の中の郭公子ならぬ難を愛しみ、左も隔てなく育てしが、實子藤次も長となり、老い先思ふ親心ツイ何時しかに悪心生じ、殊に清左衛門の家事に疎きを幸ひとして、終には人知れず平四郎を憎み、懲しめ、丁度

平四郎十一歳の時、痘疫天下に流行し、平四郎は之れに罹り、顔面鱗の如く全身、身筵の如き皮膚となり、命旦夕に迫りけれども、勝枝女は甘く清左衛門を云ひ、黒め疫神愛兒の身に宿り、女ならでは看護とせず、男を見れば、猛り狂ふ病餘の弱體、只だ安靜をこそ好ましけれと、醫師の嚴敷云ひ付なれば、唯だ何事も妾が身に換へて、必ず全快致さすべければ、君は必ず彼の部屋へ立寄り給ふこと勿れと、堅く押し止め、平四郎へは、己れの侍女久米なる者を附け置きて、醫師の薬も儘には與へず、只だ死ねがしの舉動ひに、萬に一つも平四郎は助かるべくも見えざりしが、天の冥助や強かりけん、日立ちて顔の瘡甲は彼の鬼面の如くなりて、落ち全身又松樹の皮の如く剥げ、幾日の後、全く平愈したりとなん、而して此の平四郎の至孝なりしは、今尙一藩の口碑に残り、繼母勝枝を馴れ慕ひ、成長するに隨ひて、愈々孝心なりければ、後には繼母も一向に憎む便路もなかりける、斯て平四郎が十八歳の時、勝枝母子の横行役筋の耳に入り、年の二月十四日、藩公の命として、清左衛門儀、家政向不取締にして、不埒の所行、少なからず、以ての外、事に思召され、押し、閉居仰せ付られ、親

族故舊たりとも門内に立入ることを差止めらる老職立花外記承る云々と申渡され一家の驚愕一方ならず殊に平四郎は幼少より家庭の紛亂に拘はらず天性の俊才にて武藝學問とも皆一流の免許を取り別けて劍術は大塚二天流の皆傳を十七歳の冬に譲られ一藩の斯道鍛錬の人々も皆舌を捲いて稱讚しけりケ程利發の平四郎も此の君命を聞くと齊しく悲嘆の涙に極き暮れて慰むよすがも無かりしが萬に一つも藩公の御心和ぎ家父のお咎め許りることもやと待つ甲斐更らに嵐吹く假の枕に夢さへも結ばで明す憂思ひ斯くて春過ぎ夏も行き木枯寒く思ひつゝ霰降る間にその年も暮れて迎ふる新玉の春とし謂へど物思ふ如月十二日の事なりける彼の藤次は饗應酒の歸さに泥酔の儘入り來り常時の如き亂行の果は何やら言ひ罵り側なる徳利を振り上げて汝が顔の憎さよとて平四郎の面部をばしたゝかに打据ゑて笑ひさいめき出行きけり平四郎は餘りの事に耐へ兼て打捨て難く思へども日頃至孝の性なれば得知れぬことを仕出して母に思ひを増させなば憂き事滋き吾家に悲しさをさる事なりと湛へる胸の怒りを押へ

笑ひに紛らし居たりける明ければ二月十五日夕暮頃に大目付小川伊織殿より君命とありて左の上意を達せらる杉山清左衛門儀塾居の身分をも辨へず浮浪の者を引入れ剩さへ素性不相知者に伴平四郎の面部を打たれ武士に有間敷臆病の舉舞御聽に達し以ての外不届の儀に思召され明十四日四ツ半時切腹の上家屋敷を没收し家族召使に至るまで追放仰付らるゝ者也老職大音頼母承る云々平四郎は謹んで君命を受け更らに驚く色もなく己れが部屋に退ぞきて何時の如く食事して直様臥床に就きけるが眠ると其儘高聲き鳥が音告ぐる曉に我破と跳起塵手水食事を済ませ窈やかに取り出したる一刀は傳家の寶刀延壽國資脇に手挟み立ち出でしを下女のお久米の其の外は知る者更らに無りけり斯くて平四郎は人出稀れる武者小路を真一文字に馳せ抜けて彼の三木原藤次の道場へ乗り込み門の扉を打敲き出來る下郎に目も遣れず直に藤次の寢所に至り大喝一聲起きよと叫べば心掛け有る三木原は枕邊に有る一刀を取るより早く身構へたり其時平四郎少しも騒がず最と静やかに是迄の遺恨の次第を申し聞け尋常の勝

負をこそと迫まりけり三木原異議なく了諾し直ぐに隣れる道場にて帯引しめて立向ふ平四郎は日頃の手練只だ一と煽りに三木原が持ちたる太刀を打落せば三木原直ぐに傍へなる稽古に用ゆる檜棒を取るより早く平四郎の諸匠薙がんと打拂ふ平四郎は身を更はし同じ呼吸に三木原が腰の合番を切り離せば二ツに成りて死してけり此の物音に宿番の門弟三人馳せ來り皆抜連れて斬掛る平四郎は事ともせず瞬く内に三人を皆な大袈裟に斬り放つ夫より平四郎は血刀の儘引提げて月番大岡寛太夫殿の役宅へ馳せ行き事の次第を訴へて上の御沙汰を相待ては當番櫛橋主膳直ぐに登城お召を願ひ事の顛末を言上ある藩公之れを聞き召され平四郎の舉動殊勝なりと御賞美ありて即日平四郎を舊知に召出され父の切腹御免の上直ぐに登城を仰せ付けられ御手づから金剛兵衛盛高の御脇差を下し賜り尙も武道を勵むべしとの仰を蒙り兩人は只だ面目の身に餘り暫し涙に掻き喜れ居たり此れぞ即ち吾家の延壽國資來歴の第四番目の長物語り後の餘談は省き置き此れより綴る物語り如何なる事や有りぬらん

三

差裏細元より六分許りの處に小蟻大の埋金あり昔時より申傳の目印裏に黒田惣右衛門尉正直と所持銘あり

拵へ附 緑頭 置金色繪松に鷹の圖 石黒寛齋是美作 鐔 鐵象

眞作

刀劍

此刀は元應の志津三郎兼氏九代の孫天文弘治美濃國兼道が三男にして、永祿年間上京し文祿の頃丹波守と任官せり地鐵細かにして一面の小鉞句ひ深く籠れなく大直又足入り亂氣味あり此刀匠の時代は群雄四方に崛起して天下麻の如くに亂れ彼の木下秀吉は永祿元年三月尾州の邊陲より起りて織田信長に仕へ同三年五月には秀吉織田の孤兵を提げて駿遠三の大兵今川義元を桶狭間に破り同四年八月には上杉謙信武田信玄の兩雄鎬を川中島に削り同十年二月には三好松永の鬪争あり元龜元年には姉川の戦

あり天正元年七月には信長將軍義昭を幽して足利十三代の遺業是に滅絶し同六年十月九州には大友島津の戦あり同十一年正月には賤ヶ岳の戦あり同十二年三月には小牧山の戦あり同十五年三月には秀吉九州の島津を攻め文祿元年四月には秀吉征韓の兵を起して名護屋に出張する等東西兵馬の倥偬更らに寧日を視ず此故に當時天下の刀匠は各々技を鍊り術を磨いて相競ふ即此の丹波守吉道の如きは京都五鍛冶の一人として芳名宇内に優逸たるの人なり

扱て庵主が刀劍に熱心なるが爲め少しは鑑定之眼識もあるやに傳へらるる事あれども其は大なる間違にて今日まで一度も満足に在銘物杯を當てたる事なし然らば左様の未熟にて何故に刀劍を愛するかと云ふに前に陳べたるが如く刀劍は己れの名節を維持するに於て及ぶべき丈け防禦の術を盡し萬止むを得ざる時は敵手を斬り捨てるものに付き自分に持つ人もに與ふるも其の劍の銳利と堅固とを肝要とする譯故第一に其の刀の性分を吟味すること猶ほ庵主が他の人に對して其の人の性質技量等を鑑測し

て其の風體の善惡や容貌の醜美には更らに心付かざるが如く一向に刀劍鑑定の方を學ばざりし爲め今日まで一度も刀劍會などにも行かず又た人に視せるが如き名品をも所藏せざるは甚だ後悔に耐へざるの所なり而して此丹波守吉道の刀は正保四年九州の諸藩長崎に戌衛し居たりし時蘭人の船に切入たる際船中にて劇圓し切れ味妙絶なりとて之れを藩公に獻じたりしを後年御褒美の事ありて黒田惣右衛門に下し賜りたる品なり今ま夫れが余の手に入りたる因縁に付最と面白き物語あり是より徐ろに記述する所あらんとす

秋老いて大空清き月影も時にはかゝる村雲の散るかと思れば又風の荒みて戦ぐ萩の葉に落ちる様こそ淋しけれ維新の鴻業已に成りて世は十回の手支を經れども筑紫縣の巽には一塵の雲の湧き出で、野山の草樹騒がしく日ならずして薩南の健兒蓬頭巨眼劍を提げて四方に咆哮せんす有様に九州各處の邊僻に呻吟せる悲歌慷慨の士は窃かに耕牛を售りて劍を買はんとする頃にてありにき一夜雨止み風靜かなるの時余は悪しき夢にて

も見たりけん起き出で、剛に行きたりしが、風斗父の部屋に物音するを感じ、何心なく往き見たるに父は寢間着の儘、孤燈の前に有りて一振の長剣を抜き持ち、燈に照して詠め居たり。余の來りたしを見て、何に仕に來りつるか、と云ふ故、寢られませぬから來ましたと云ふと、左様か夫なら話し聞かすことありとて語り出す物語りは、已に前稿に著はしぬる傳家の一刀延壽國資の事歴と、今手に持つ所の一刀は、丹波守吉道と云ひて、位は新古の界にあれども、稀代の業物にして、此れは吾友黒田某家の重寶なりしが、家破れ産傾きて、今は寢覺めも足曳の何れ如何なる山が根に佗しく暮し居るならんと、風に連れ雨に連れ思ひ出せば、中々に經りにし昔の忍ばれて世の盛衰に憂き事も伴ふものと慨きしが、昨日圖らず久留米の町人此の一刀を持ち來りて、値ひ五十金にて售る由語り引き抜き見れば、覺えある馴にぞ馴れし友垣の朝な夕なに身に副へて、同じ御殿の詰め所にも、此の刀丈けは家柄と拜領と云ふ由緒にて刀掛けの上段に位を占むる習はしなりき、斯る品をば手離して市人の手に渡せしは心の迷ひか、但し又外に仔細の有ることか、何は兎

も有れ此品を買ひ取るべうは思へども、家の餘財は先祖より傳はる家運の盛衰を補ふ爲めの本なれば、五十金の價こそ田地二反を買ひ得べし、藩治破れて其後は祖先の遺訓最と重かり背かば己が友どちの捨てたる刀の一振りに私するに左も似たり、兎やせん角やと思ひ詫び、端なく詠め居たるぞかし、今や 皇上の大御世は治る様に似たれども、都の空は薩長の私黨の争ひ止む時なく、終に言葉を征韓の事に構へて、此れまでも大度と思ひし西郷が今にも心機を誤らば、虎暴つ人に誘はれて、水増す河を馮わたり、終には名を缺き身を亡ぼし、志士の憐れを後の世に留めつべうぞ思ふなり、夫れ世は澆季に流るれども、綿蠻たる彼の黃鳥は猶ほ丘隅にあるぞかし、先づ君臣の大義を辨へ、軍事に朝野の別を知り、能く世運の妙機を察して事を謀るに非ざれば、思慮ある人と言ふ可からず、汝已に十三歳身材徒らに長大なれども、總て常知に乏しくて、文事を修めず、喧嘩を好み、武道を學ばず、臂力に誇り、汝が母も已に死し、早五年を經りぬるが、其の幼少よりの亂行は長く、亡母の愛ひを牽けり、や、ヨ忘れても片乳守る父が、今宵の教訓に背きて、家名を汚がす

なと詞の綾は悠くしむ親の心の一筋に繰り返したる情けなり余は今當時の事共を思ひ出せば中々に昔時に通ふ夢路にも尙ほ身を責むる心地せり、扱て余が天性の頑冥は尙ほ霧やらのぬ時にして父が鬨させる一刀を瞬もせず凝視めしが其の凄しさ鋭さに震髪立つほど欲しくなり是非も道理も有ばこそ卒然として父に向ひ此刀是非とも買ふてたび給へ子孫の爲めに二段の田地は要あるやうにも思へど其の收穫は一年に一人の衣食に足らざるべし生きて益なき馬鹿者を養ふ便宜を計らんより此の名刀の刃先に掛り世に妨げなす曲漢或は無用の癡漢を片つ端より斬り捨て一人を養ふ資本にて百千人の穀潰しを除き去るこそ宜しからめと臆する色なく饒舌しが其言未だ了らざるに父が江戸より土産にと持歸りたる黄銅の牡丹に獅子の彫したる延の煙草は忽ち余が頭上にと飛び來りて實に美事なる大瘤を二ツ并びに据え付けたり其憤慨ふるに物なく豆粒の如き涙を呑んで引下りしが其跡にて情々思ふに余は父に決して不道理を云はざるに父は理不盡に余が頭を確乎と二ツ撃ちたり故に余も亦た理不盡に手頃の頭

を見付け出し撃たすんばあるべからずと強く決心の臍を堅めしが夜はほのくくと明け亘り鶏が音噪ぐ頃となれば朝飯も忘れて起き出で、彼地此地と唯だ一人漫歩をなしたれども扱て格好の頭も見出さず頗る不快に過せしが其晝過ぎになれる頃好き頭をこそ見出したれ夫は二三日以前より此の近邊に角力の興行ありけるが儘か縁川とか云へる力士なりけり泥酔の上余が家の舊家來筋なりし次助と云ふを父が世話して小賣酒屋をさせ居たるに彼の力士は此家に來り何の間違なりけるが俄かに亂暴を働き出し皿鉢を投げ散して暴れ廻り跳ね廻り人山築きて噪げども一人として此の力士を取り押へる者なきを余は見ると其儘に直ちに家に馳せ歸り我が部家に有り合はす赤枇杷磨きの木劍を提げて次助の家に至り群がる人を押し分けて縁臺の上に直立ちて待つとも知らず彼の力士は再び何か猛り出し其の投打ちたる古下駄の何處やらより飛び來り余が腹の邊りに當りたるかと思ふ僅かの一刹那彼れが天頭の前額を目掛け諸手を掛けて打下せば何かは以て耐るべき鮮血サツと迷りウンと許りに昏倒し人事不省と

なりたる由余は直ぐ其場を飛び出し二里許りある乳母が家に不知顔にて泊り居たり其後父は角力共に押掛けられ若子の金を取らせて事済みたる由即ち此の刀が去三十八年日露戦争の央頃余が郷里に歸りし時古き出入の道具屋が賣物なりと持ち來しを見れば何處やら覚えある中心を抜けば銘振りと裏の所持銘明明と三十年目に古る事を思ふ由因の種となり價も間はで買ひ入れしが今又秋の夜もすがら窓の時雨を朋として過ぎにし幼時の僻がごとを霧中を辿る心地して思ひ出る儘記すになん此れ余が刀劍と云ふものに心を止めし第一なり

四

守家 長さ二尺四寸六分

大樋カキ通し應永頃の大磨り上穴一の中心先き太刀銘(守)の字残り金象眼(高麗鶴)とあり刀幅廣く丁字大亂れにて銚子に亂れ込む地鐵細かにして匂ひ探り研ぎ減りなく無創にしてソリ高き大劍なり拵へ付

太刀拵鑲り帶取付 烏銅地腐れ金素赤紋散し金小縁り總金物 御用志摩保誠作 鑄 烏銅に金据え物肉彫り雲中金麒麟安川乾清作此刀匠は後鳥羽帝の御宇元暦文治の頃備前國畠田流の祖守近の子にして天福建長の間即ち四條天皇の御宇にして初め三郎兵衛の尉と云ひ後權守太夫と云ひ老後中務入道と云ふ此刀は長州三田尻在の豪家より出でしと云ふ元筑前國名島の城主小早川隆景公朝鮮文祿の役に佩用せられたる遺書申傳ありて即ち高麗鶴の金象眼あり此の刀匠生存の頃は鎌倉右府の遺業漸くに衰へて北條氏の權勢旭日昇天の如く貞永元年壬辰北條泰時貞永の式目を定めて永く武家を節制するの法律となし又京極中納言定家卿は勅を奉じて歌集を選び翌天福元年癸巳には京都興福寺の僧徒と延曆寺の僧徒は私に輦轂の下に戰闘し延應元年己亥には畏れ多くも後鳥羽帝六十路の寶壽を限りとして怒濤明滅の隱岐の島ヶ根に崩御ましまし仁治三年壬寅には北條氏の柱礎たる泰時俄然として卒去し寛元々年癸卯頼經の子頼嗣將

軍となり同四年北條時政復た執權の職を握り翌寶治元年丁未には北條時頼終に三浦の族を亡滅せしむるに至る等實に歴史上の粉彩年一年と其の濃淡の妙を發揮するの時なりとす

余が此の刀を初めて見しは明治二十四年頃の事にてありりき當時余等一類が志業の大蹉跌より其生活の難儀なりしは如何なる靈妙の筆を以てするも其眞狀を書き現はす事能はざる事なんめり深雪降る夜半にぞ焚きし鉢木は物の數かは草の家の檐端の椽疎にて月影漏るゝ憐れさは人並み並みと朝夕に擧げし煙の筐にて軒端の茅妹が樵る薪の山と假見へて笑へば憂きも諸共に現つゝと消えて暮せしが或る時最と入魂なる長州下の關の道具屋某余が家を音ないて何ぞ良き拂ひ物はおはさすやと云ふ故余は好き慰みものこそ御參なれと忽ちに微笑して拂物は當分中止にして此れよりは少し買物をなさんと思ふ何ぞ面白き物あらば見せ呉れよと云ふ彼れは不審き顔持にて旦那様何ぞ良きお金儲けにてもおはしけるかと云ふ故余は愈面白くイヤナニ左程大業の事にもあらず兼て持ち耐へ居たる炭

山が一つ賣れたりしまでにて舊借を仕舞ふて漸々四五萬圓の殘金を止むるのみ家族共の住宅及質物等を始末せば幾程も殘らぬ目腐れ金只だ一息き繼ぎたると云ふ迄に過ぎずと云ふと道具屋は目色を變へて喜びヤレヤレ夫れはお目出度い事にて左すれば何乎とお道具類も御入用にてあらせられつらん此上とも幾久しく御最良を願ひ奉るになんと云ふ故余は頗る大風にイヤ夫は此方より申すことなり物好きの道業者は却て道具屋の方が旦那様にて第一品物を見せて呉れねば兵糧責めに遭ふが如く第二始終代金を借りて居る時の方が多く偶々拂ふ勘定は利息位の物なんめりマヽ長き交際の中には又た良き事もありつらめと云へば道具屋は座を退り兎が搗きし杵お辭儀ビョコヽと頭を下げコハ旦那様の仰こそ勿戴なけれ先づ何はしかれ今日は目鈍き物にて候へども二三點御覽に入れ申べしと携へ來りし茶器漆器跡にて出す一刀は是れぞ名におふ高麗鶴の名劍引拔き見れば鳥羽玉の關なす錆に地肌を讀し鈍も勾ひも見え分かねど姿容の貴くて自然と備はる古代の劍相胸轟かす嬉しさを色にも見せず徐ろに値

段を聞けば五圓と云ふ、マア何は然かれ鎗身の事故調らべて置かなん置いで行きねと云へば頻りに唯々と答へソコ〜にこそ歸りける
 跡にて孟光は余に向ひ、良人は其の太刀買まく思ほすや、見ぬ外國に市人の勝を屈ぐりし雄夫は、莫邪とやらの劍を買ひ終には、破楚の大功を建にきことは古史に聞つることも侍べれども積る雪夜の寒むしるに、軒の茅も焚き果て、明日の煙のよすがさへ絶なん今日、の悲しさを語らふ人もなかなかに泣くより外に爲んすべも無からん時に一振の霜か氷か白翰の刃を買はせ玉ふこと最と愚かしき女氣に其の理りのしかくを辨へつべうは候はねど、今の御身に面あたり要なき物に侍べりなば思ひ止まらせ玉へかしと願ふが如き諫め言實に尤には思へども思ひ立ちては中々に梓の弓の太と弦が切れなんまでも今は早や引き返すべき心なく、汝の詞理なきにあらねど、夫れ武夫の世に處して思ひ立ぬる志業も遂げて幸なく餉の代にも盡きて果なんは野原に瘦て餓死る犬にも劣るものぞかし、兎ても叶はぬ世なりせば此の名刀にて汝等を刺し殺して後我も亦腹を屠りて死ぬこそ好け

れ買ふも買ぬも世の中に只だ五枚の金の幸ち有るか無きかい勝負なりと言ひ放ちて後ち臥戸に入り更け行く鐘と夜嵐に眠むりも遣らで才覺の工夫をすれど荒磯に海士の小舟の網絶えて漂ふのみに夜は更けて明くれば師走十九日朝まだきより起き出で、彼方此方と驅け歩けど五圓はおろか一圓の工面も付かぬ子の刻過ぎ行くともなしに檀那寺の祖先の墓に詣來しが我家に昔時より厄介佛と云ふもの有りて、先祖以來の石碑の數は靈所の位牌と符合して、基數も丁度二十八、此以外に何れの誰れとも分らずして無縁の石碑と云傳へ、事の次手に香花を手向けし墓の六つ有るを思ひ付き、此の墓にても賣り飛ばし、五圓の金を得るならば刀を買うて其後に余が武士道を建て得なば、永き年月手向けたる香花に勝りて無縁なる佛も定めて成佛すべしと理窟を付けて其儘に出入の石屋に馳せ行きて、東に旅立費に困ると餘儀なく話して漸うに一つ六十錢宛都合參圓六十錢に賣り付けた
 り
 先づ此丈けの金あれば、残りは何とか才覺の又た爲ん術べもありぬべし

と家路に歸る途中にて我が格別の親友たる結城虎五郎吉田三七郎と云へる兩人に出會けるが彼等は口を揃へて云へらく君を訪はまく思ひし處に途にて會しは不思の幸ひ其處なる牛屋に伴ひて晝飯を爲しつゝ要事を語らん誘とて二人は先きに立つ余も腹は減る連れは善し牛四五斤飯八杯イデ食ひ倒して呉れんすと忽ち其處に押上り食ふとは愚か大海に藻芥を流す如くにて總て二時間程は箸をも離さず食ふては談じ談じては相互に東洋の議論鍋と共に湧き大策腹と共に満ち忽ちにして亞細亞半面は吾が掌中に握らんとする時イザ勘定となりけるに彼等二人の囊中は空しきよりも財囊さへ持たぬ始末と聞さへに膽消え心もその儘に絶えなん許りに驚きしが扱て爲ん術へも非らざれば昨日以來夜も寝ねで墓まで賣りて拵へし古今稀なる金を以て只だ一場の飯代に抛つことの恨めしく幼氣抜けて二十年涙を知らぬ雄夫が腸絞る心地して殘しも遣らで其儘に牛肉代に捕られけり夫より力も抜け果てゝ屠處の羊の夫ならで家路に歸れば脊戸傍の晚れ行く空に行める荆妻は迎へて扱て云ふ様今朝しも出行き玉ひし後

彼の道具屋の來にけるが彼の刀こそ昨日しも或る客人に見せ參らせしが高き價ひに召さるべく態々使の來りし故最と心苦しく候へども此度の御用は思召止り玉ひねと云つる故に幾度か斯許り思ひ詫び玉ふ良夫の御心思ひ遣り曲げて明朝まで此儘に待ちねと頼めど聞入れず終に持ち行き侍べりにき嗚呼斯く許り云ふ妻さへ今日は一入夫よりして物悲しうこそ候ひぬと語るを聞いて歎息の思ひを笑ひに紛らして扱て左様にて有つるか夫は詮術もなきことなり豫て教ふる古文にも世に道を説く孟軻さへ吾が魯公に遭はざるは天なりと諦め玉ふことさへあるに刀の買へぬは天なり命なり汝が歎くことかはと慰めつゝも家に入り扱て四方山の物語りに思はず夜をぞ更しける是より後此の刀の終に余が手に入るまでには又一場の物語りありそは稿を紹いで説き出なん

五

不然だに世は憂きことのあるものを貧しかる身に願事の鵲の嘴とくひ

遠ふ其のたび毎に憐れ増す人の心は賢きも愚も同じものぞかし去れば余が満心の念を傾け購ひなんと企てし彼の高麗鶴の名刀も物の見事に買ひ外し梢の鳥に狙らひ寄り、箭頭にて逃げて獵人の行方眺むる思ひして惘然として暮らせしが、斯くて二三日過ぎし朝彼の檀那寺の老僧が早車にて駆け来り、玄關先きより大聲上げ、主人は内に居まするや世に亂暴者も多かれど墓賣る人は古今稀れなり、まだ其上に宮崎氏の先祖の石碑を賣り玉ひ今朝しも同氏の家族の人墓詣でして石碑なきより寺を預かる愚僧に對し、八萬奈落の足鞍責め阿鼻叫喚の剛は手詰、石塔よりも太とやかな尻をドツサリ持ち込まれ、事の意外に驚きて直ぐに墓所に駆け行きて見れば不思議やは如何に、何時の間にかは幾世ふる寺の古券と諸共に青苔蒸せる大塔の六基までも消失せしは、化物の祟りか盗人か宮崎氏の腹立ちを詫ぶる緣由も嵐吹く、師走の空に石塔の行衛や何處なるらんと惘れ佇すむ折柄に出入の石屋が持ち行きしと聞くより段々様子を探れば有るべき事かそもやそも、主人の君が直前に嚴敷く賣付け玉ひぬと、事の脊腹の分るにつけ、只だ悲し

きは御當家も、數代續きし名家にて、吾寺開祖の時よりして、並々ならぬ因縁あり、其の御子孫に斯く許り、非道の人の出で玉ふは物の報ひか左も無くば心狂はせ給ふかや何は兎も有れ角もあれ、宮崎氏へ詫言の筋こそ教へ玉ひねと水漬交りに舌饒り立て、余の面目なき限りなく、一應詫びんと思ひしがイヤ待て暫し今となり、心弱くは此上に愚痴の曼陀羅聞かねばならぬと忽ち眼を瞑らして、黙れ俗僧舌長なり夫れ武夫の零落は時代に連る、掟てぞかし、余が家祖先が富み榮え世の盛衰をも打忘れ、佛敵きをせし時は、汝等常に媚び諛らひ、國の土を頭に付け、辭儀を其身の生業に寄附や寄進と財を貪り、寺領の田畑、殿宇まで人の迷ひを誘ひて、掻き集めたる芥ぞかし、今余が一期の零落を弔ふことを打忘れ、阿彌陀の頬の金箔や、家屋の瓦を引き剥り、賣られざるをば仕合と思はぬのみか、余が家に不用の石碑を賣りたるを、盗人にてもなしたる如く喚き廻るぞ奇怪なれ好し又吾れも武士の意地、耻辱に換ふる魂あり、止めずば其の坐は立たせじと、意氣捲荒く云ひ放てば、荆妻も驚き中に入り、坊主は圓頭に煙を出し、柑子に付きし山鳩の豆彈うけし如

くにて眼を丸くして逃げ去りけり
 其れより余は不思議に思ひ寺に出行きて其の實地見んと往く折柄に城
 下なる至極繁華の町中にて余が親友の頭山氏に計らず出會たりけるが日
 頃溫和の頭山氏が余が影見ると其儘に満面に怒りを湛へツカ〜と近寄
 り來り雷霆よりも烈しき聲して馬鹿の所行も大抵に働けと云ひ捨て、行
 過たり余は人立ち多き市中にて親しき友に罵しられ何事なるや分らねど、
 此間より守家の刀の買ひたき意ひより衰運俄かに身を蔽ひ日毎に受ける
 忍辱の苦難ぞ積る雪の山消えも入りたや世の人の笑ひも何と照普比丘幸
 ちも阿羅々の山人に縋る由縁も中々に如意か不如意の年の暮れ夢地を辿
 どる心地して寺へ赴むき彼の墓を見れば寺僧の狼狽しても宜べなりけり
 な石屋奴が厄介佛の居並べる左の端の石塔を一ツ残して右の方へ六ツ數
 へて取り去りければ一番右の端なるは他家の石碑の一基だけ無くなりけ
 るも理りや、後に聞けば宮崎氏は頭山氏の叔父なる由罵しらるゝも罵る
 も又た之れ止むを得ざるなり儘よ腐れた吾が不運此の石塔を償ひて元の

如くに成さずんば果ては腹でも切らざれば丁へざることの起りやせん、と
 一入寒き年の瀬に死ぬよりつらき思ひして五圓に近き金を掛け石屋の石
 碑を買ひ戻し危く春を迎へけり此に付けても彼の刀喩へ野の末山の奥草
 を分かつて探ねても一度は買はで止むべきやはと堅く臍をぞ固めけり夫
 れより二年程過ぎて余が大阪に流浪せし時圖らず時疫の病きに重き枕の
 床に臥し貧き中に薬餌さへ心に任せぬその時に或る道具屋が一振り刀
 を持ち來て見せけるが其の拵への好き儘に引抜き見ればコハ如何に夢に
 も見つる高麗鶴の太刀なりければ我破と跳ね起き出處を聞けば九州の或
 る炭坑主の賣り物と咄しのみかは其刀身さへ悪き研にはありつれど昔日
 と違ひ錆もなく地肌刀紋も明かに唯だ一點の疵もなく代價を聞けば四百
 圓四百四病の其の中に一入奇き病きに因めるものか其昔し石塔までも售
 り飛ばし幾瀬の苦勞を涉りきて恥ぢの百萬搔き通す棒樋の光澤か涙かは
 水も滴たる此の刀又た買ふことの叶はぬかと思へば心地悪しきまで猶ほ
 詫び渡る胸の中明けても云はず道具屋は刀を置いて兎や角歸り其夜は夜

もすがら思案に暮れ、臍を燃りて工夫すれども刀のみかは逆旅の宿錢さへも拂ひ得ぬ貧の峠に疲れ果て、分け行く草の山道に迷ひ詰ぬる時なれば又せん術もなかりけり、折柄夜は更け違寺の鐘の音寒き真夜中過ぎ國元より一片の電報來り、明日中に六百圓の金無ければ多年の辛苦に築きたる命と頼む城崩れ又爲ん術も無かるべしと短かき文字に最と長き思ひの丈けの見えければ、一入憂さを増見濁波々ならぬことなれば繰り返しては打寄する胸の思ひも曉方の潮と共に満ち果て、一つの思案を定めけり、夫れ人間生有るが故に志業を企つ志業成りて生始めて全たし生全たきの後心錆び地鐵を腐らし鐵も匂ひも無き世渡りは生なきに齊し此時に於て志業果て何の要をかなす、好々可なり此上は刀を買も志業を成すも余が生に對しては同じ誠の道なりけり、今余が知遇を蒙れる大阪師團長高島將軍閣下へ此心を訴へ其庇護に因りて一千圓の金を調達なすべしと一度思ひ定めては遣る瀬道の早手風硯の海の走り書き帆ならぬ筆の細手引く重き枕を靠たげつゝ一封の書狀を贈りしは窓に朝日の影さして宿の翁も起き出

で、拍手敲くころにて有りなき斯くて數時間の後ち當地の先輩玉手氏となん云へる最と俠氣ある老翁は、余が病床を訪なひて將軍の命にて君の窮困をこそ知りつれ求めの高の一千圓茲にぞ齎らし來りぬと、一包の金を枕邊に置いて立去りけり、余が其時の嬉しさは、今ま尙ほ夜半の風に連れ朝の雨に誘はれて思ひ出でざることぞなき夫より今日は刀を買ひ故郷に金をも送らんと思ふ矢先きに國元より一大悲報は到着しぬ、曰く城の搦手乗り破られ、今日中に一千圓の金送らざれば只だ本丸に火を放けて一同は討死するの覺悟なりと責め來る人も責らるゝ人も苛らかる憂世かや嘆ち川なる吾が涙乾く間もなく其の金を取り攫らはれて跡は只だ枯野の原の瘦せ鴉啼く音も寒くなりける此れ余が此の刀を買ひ外したる第二番目の物語りなるが畢竟余が武士道の未だ拙なき故なりと諦らめ去れば何の其の苦き笑ひの種としも成るに足らざる事なんめり、夫れより月逝き歳去りて思ひも出さで居たりしが流れ往く箭に齊しかる歳は明治の癸卯なる正月初旬の事なりける朝まだきより本阿彌氏が年頭に賣初めと祝儀の序でに

一刀を携へ來り昨臘の賣物なりしと云けるを視れば不思議や又高麗鶴恨み重なる此の刀今日は得こそ離さじと思へど昔時に變はらぬは年ならなくて貧乏の神の稜威に守護られて心の儘に成らざれば好し正月の借り初じめ質も高利も有らばこそ手當り次第に借り集め價ひを濟ませ置きねよと云ふと其儘高麗鶴は吾が筐底に收めけり此れ守家の漸くに吾手に入りし長物語り只だ一向きに見るときは耽けたことのやうなれど人の意氣地と世の中に男の爲さん業はしも立てなん人の志成しなば成らぬことぞなき最と骨よわき童の心の杖の節にもと恥をしので書くにこそ

六

相摸國廣光(大小)

各生中心在銘刀長二尺二寸五分脇差一尺一寸步餘

刀は棒樋掻き通し昇龍の彫物大亂及皆焼鈍強く銚子詰り火焰亂込み
反り高く眞の宗研減無し

脇差大亂及王燒き皆燒氣味鈍強く平打眞の宗棒腰樋研減り無し

此の鍛冶は鎌倉五郎正宗門弟の一人にて元應の頃二十五歳にして九郎次郎と云ひ鎌倉の住人永仁元年に生れて延文四年六十七歳にて死す余昔時より此の鍛冶の鍛錬に係かる地鐵を賞讃して其理想の廣光を搜索すること久しく其の刀を見ることも亦た凡幾十振りなるを知らずとも一も余の希望を満足せしむる物なかりし而して圖らずも大小の同作を得たるは余の尤も快哉に耐へざるの事に屬す

此刀匠生存の頃は北條氏の政權漸くに弛緩し後伏見帝の正安三辛丑には上には五上皇あり下に圓頂緋衣の貞時十年執權に坐し花園帝の正和五丙辰には彼の北條氏の寂滅旗を建たる宗鑑高時執權となり元享元辛酉には北條九代の治蹟初めて綻緒を生じ安藤堯勢に因りて反旗の翻るを見る同三癸亥の頃には高時の驕慢其頂に達し彼の所謂闘犬の遊は此時に於て盛んなりとす嘉暦元丙寅には高時終に剃髮して守時惟時を兩執權として尙ほ自から擅横を振ひ元弘元辛未私に後醍醐帝を無みし奉

りて新たに光嚴帝を擁立し奉り、後醍醐帝遂に笠置に幸し給ひて畿南の楠廷尉は孤劍勤王の節を持して兵を起し、同二壬申正成赤坂の城を復し、同三癸酉新田義貞茲に北條氏を滅してより、名和長年足利尊氏小貳大友等四方競然として官軍に應じ、建武二乙亥には機運早くも傾敗して、藤原藤房の遁世となり、淵邊伊賀守の護良親王弒逆となり、延元元丙子尊氏の廢立となり、正成の戦死となり、茲に南北朝の兩曆となり、即ち興國四癸未鎌倉亡後、劍匠正宗は京都に移住し、貞和四戊子尊氏征夷大將軍となり、同五己丑には楠氏芳黨の遺棄金吾正行四條畷に戦死を遂げ、文和元壬辰には奸雄尊氏嶮難忽ちに道を忘れて骨肉直義を殺し、延文二丁酉には新田の遺族義興微運茲に窮まりて、遂に矢口の渡しに死し、翌三戊戌には尊氏又病を以て斃死する等、我帝國の歴史に特殊の異彩を放揮したる時代なりとす。

余嘗て曰く、貧味を知らざれば富興を解せず、又曰く、心恆ねに貧しき者は財ありと雖も、恆に貧しく、心恆に富むものは財無しと雖も、恆に富むと古人

曰く、錦着て疊の上の乞食かなと、夫れ富を食るものは財中に解く蟲にして、貴を攀るものは名聞を嚼ぢる鼠なり、古今東西幾億の蟲鼠は暗處に名利の醜塊を穿食して、腐臭の糞汁を泌れ、終に自から此の糞汁に溺死して、悟らざるもの比々皆な然らざるなし、故に余昔時より貧の鉤に富貴の餌を繋いで人を釣るに一として、鉤からざることをなし、今余が傾筐の中には、積年釣り蓄めたる富貴の人澤山なるが爲めに、余の貧を以てしても、心の恆に富むことは世に有りふれたる富貴の人よりも、又一入歡樂の心地あるべく思ふなり、斯くあればこそ昔より明日の煙も立ちかぬ、其の面白さに誘はれて、越めも嚙りもなし、難き刀を買ふて、樂めど此れ又穢土に花を看て、濁池に月を賞する類ひ執着すべき物にかは、無限法界に富貴なく、知覺命期に執着なし、只だ此れ人の一生に、慾界塵裡の惑みと好める物に、戯れて、永き眠氣を催すまで、子守の謳や風車、デン／＼太鼓の代にと、譯も刀の經歷を、錆ぎ傳たひに、探行し、暇なき、喻への貧乏を、樂みの極に、搔易へて、鏝も匂ひも、打忘れ、灣形崩れの文章を、また／＼聯ねて、唾ふになん

余が友に高島義恭と云へる人あり素性濃厚篤實の君子にして或時余が聊かの事に應せし酬にとて其の家寶なりける短刀を惠まれたり是なん前に著はしたる余が戀ひ焦れし廣光なり惠ぐまる人より惠む其の人の心の中の床のしくて辭のみもやらす受けたりしが此より心のも爽快しく日毎に蔽ふ憂の雲も晴れにきやうに思はれて隙ある度びに打詠め人にも誇り余れも亦た頭上の花と愛でたりしが又た或る年の夏の頃卯の花下し村雨に軒の玉水賤が織る麻布の里の夕暮に音なふものは本阿彌にて携へ來りし一刀は此れ又前に記したる類ひ稀なる廣光なり殊に最上無疵の刀彼の短刀と一對の大小に仕立なば天下無雙の珍品ならんと思へば胸も轟く許り値ひを問へば眼の玉も飛び出す如き高價にて一文なしの賈せ坊主咽から手の出る沽ひたさも出すべき金の工面なく苦笑して返へせしを最と氣の毒に思ひてや本阿彌も又た共々に例の質置き高利貸しと知惠の囊を絞ばれども種なき手品の術もなく煙のやうな長評議煙草許りを吞み散し貧苦に詰まる煙脂煙管雁首をのみ傾けて工夫の息の通ひ路は經えて咳きのみ出す

にけり斯くて四五日過ぎし朝旦那は宿に居召さるか物申さうと玄關より狂言もどきの案内に何者なるやと呼び入るれば賈者ならぬ本阿彌が一時の洒落と威儀を正し今日は且那が貧乏で錢が有つても無くつても疊を剝いでも賣付けて歸らにやならぬ品ぞある之れ覽そなはせと差出す刀は何ぞ此間頭痛の種の廣光なり如何なる癡漢の舉動ぞ貧しき吾れに又しても買へぬ刀を振り舞はし見せびらかして戯るは猫の目前の鏗節鼻の先きより汗出して身悶えさせて慰むか無禮の所作なら許さじと詰れど彼れは微笑しげにお心疾しくな思ほされそ實は先日此刀彼許までの御懇望も御勝手悪しき其の爲めにお返しなさる思召年月長きお出入の身には思ひも彌増して我等が儘なる身なりせば又才豊の爲んすべも有なんものを情けなや兎やせん角やと思ふ中持主よりの催促に爲ん術盡きて麴町の加藤の殿に持参して御目に掛けて一伍一什と且那のお望みありし由物語りしに先様は夫こそ好宜き事こそあり囊日風斗した事よりして其日庵主の藏品を懇望なして贈與られし返禮として此刀今ま彼の人に贈るべし汝此より

使者となり最と快よく受納あるやう計らひ來れと嚴かに命旨られて嬉し
 さの又吾事に彌や増して馳せ參じて候なりと語るを聞いて世の中に待て
 ば海路の灘日和波々ならぬ贈物蝦蛄で鯛釣る漁り舟浮つ沈みつする中に
 舵を枕の夢ならで迷ひの幸か龍宮の乙姫様の玉手箱開けて云はれぬ貧乏
 の思ひの海に沈みにき寶を得たる浦島が長尾の龜に跨りつ玲瓏の竿を肩
 に置き陸地向ふ心地して厚き謝辭書送り又た時機を見て嬉しかる今の
 思ひに幾倍蕪の返しを爲さんと點首さて先づ二た振りをして傍に并べて見
 れば花菖蒲何れを夫れと杜若引きぞ煩づらふ同作の皐月の空も霽れ亘り
 鬱陶せき賤の伏せ家さへ廣き思ひの廣光を吾が物として樂しみしは貧し
 き味を昔時より辨へてこそ斯く許り嬉しきことの有るぞとは富者も知ら
 ぬことなんめり之れより此の刀に付き又面白き物語あり夫は稿を更へて
 説き出でなん

七

余は圖らざることより最と得易からざる廣光の大小を得て其の嬉しさ
 喩ふるものなく朝な夕なの時々の間も傍へに置きて愛でたりしが其の劍
 相の美麗しく見れば思ひぞ十寸鏡恰も佳人の沐浴して花の顔せ玉の肌匂
 ひ滴るゝ露の色此上化粧を加へなば鼎を扛ぐる雄夫の其の腸も碎くべく
 二十町過ぐる大城の其の礎も傾かん斯程美好き物にても裸體の儘に捨て
 置くは最と哀れなる態にして假令へ目粗き麻衣に木綿の縫の彩にても纏
 はい左こそ良からめと茲に拵へと云ふことに心を傾け小柄斧縁頭と種々
 思ひを焦がせし時から風斗吾家の商族にて多田となん云へるもの商用に
 て越路の方に行きける時價ひ百金を以て後藤程乗の在銘赤銅鐔の大小揃
 を購ひ來り長き旅路の土産にと余に與へけるを能く見れば源平八島の陣
 營を金銀素赤の据る物にて色繪刻みに打ち上げたる古今無双の作物なり
 余は恍惚として之れを詠め夜もすがら孤燈に翳ざし熟々思ひ廻らせば後
 藤九代の程乗は徳川中古の名工にて時は恰も泰平の華美に耽けりし中に
 て天下に名ある金工は各妙技の限りを盡くし殊に後藤家の禮服差は大抵

六所揃なり(鑲縁頭小柄笄目貫)然るに斯程の名作を鑲許り打つ例し無し、イ
 デ是よりは此の作の同時同作の六所揃ひを探し出して今はしも昔の人の
 技の痕有るか無きかを試し見んと親の敵を和田津海の果て限りなき世中
 に尋ね吟ふ如くなる不思議の望を起しけり、夫れより此の程乗の作柄及其
 の圖其の地金等の味ひを最と細やかに書き盡し、五畿八道の國々の市に名
 高き道具屋へ書狀を以て觸れ廻し詮議の費用に構ひなく、若し一品にても
 尋ね出さば値ひは望みに任かするのみか、別に褒美を與らすべしと云ひ送
 りしは過ぎ逝きし丙戌の夏の初めつかた軒の玉水敷して庭の小池の杜若
 色増し顔に咲き競ふ、一入淋しき日にてありにき其後一年許りの中に國々
 より送り來る小道具は數百點に及びしが、一つも夫れと思ふ物なく、又今更
 らに憂きを増す片輪の轡の宮詣で遅きに陸の楫を絶え何時かは幸の廻り
 來て望の叶ふこともやと行くともなしに暮らせしが、又一年許り過ぎし後
 丸嘉と云へる道具屋が齎らし來る一品は同作同圖の脇差目貫なり、夫より
 又半年許りの中に本阿彌が持來りし小柄笄の箱入は此又同じ品なりけり、

余の嬉しさは如何許り隙ある毎に打並べ、疵見目鏡も打疊る涙に胸の喜び
 を打漕へてぞ居たりける、夫れより又半年程過て名古屋より脇差の縁頭一
 具來り肥後の熊本より脇差目貫一具來り、殘るは刀の縁頭一つにのみぞな
 りにける、扱て此上は今一節力を入れて探さずば、九仞の功一篋に缺けなん
 と思へば一入勇氣も出で、又此の顛末を細々と書き認めて國々へ殘る刀の
 縁頭は草を分つて覓めよと促し遣れど、其後は武藏の野邊に入る月の影も
 留めず茅草吹く、ソヨとの風の音信も耐へて久しき望さへ消え果てつべう
 成り行きて、住むも侘しき我庵に雁の音絶えて今は早や甲斐なき世とぞ嘆
 ちけり

斯くて秋立ち冬も過ぎ又立歸る新玉の春としいへど物思ふ我身は秋の
 心地して花より外に戀渡る北より來ぬる燕に夏來にけらし白妙の垣の卯
 の花咲初る丁度四週年の頃となり、近き邊りに住居なす小美田と云へる劍
 客の最と入魂なる友許りへ漫行きに往たりしに主人は幸に宿に居て扱て
 四方山の咄の末其の床の間に飾りたる一刀を指さして余に物語りて云へ

るやう、彼の長刀を近き頃吾が手に入りし肥前忠吉直及無疵の上作物今は手頃に拵へて吾が床上の飾りとせり見て善悪を聞こえねと云はるゝ儘に立寄りて見ればコハンモ如何にせん其の拵への縁頭は四年此方鳥羽玉の暗の浮世に炬火して夜の目も寝ねで搜ねにき涙の種の程乗が同作同圖の名作なり胸も轟き氣も躍り尋ね問ふ間もあらばこそ目釘を食ひ抜き小柄にて柄絲バラ／＼に切り解き縁頭を剝り取り手早く紙に押包み内懐に押込みて知らず顔にて彼の刀元の如くに飾り置き席に返りて扱て云ふ様成程得難き刀なり去れどもアレなる拵へは君が流儀の眞影の其の太刀振りに似合しからず殊に用ひし縁頭は余に餘儀もなき入用あれば剝ぎ取りて持ち行へし其の替には如何許り黄金を鑲ばめ刻みたる世に類ひなき名作の道具を君が望みに任せ拵へさせて償ふべし曲げて承引してたびねと云へば主人は打驚き怒りは忽ち血走りて巽の暴風に大濤の巖を碎く如くに大眼クワツと見開きつヤラレ白痴者舌長なり莫逆友も武士道の無禮の態を塵程も許しつべうと思ふかや吾れ此間若干の心を盡して拵へし刀の

道具を汝等が假面道樂の心より悪評のみか其の品を剝ぎ取らんとは何事ぞ、噓へ如何なる譯ありて軍馬を向けて吾愛づる武器を奪はん謀み事成し遂げなんと騒ぐとも吾が兩腕に蔓なす力の筋の絶なんまでは得こそ人いや取らるべきと意氣捲き荒く罵れば人の思ひを吾れぞ知る同じ道なる武士の嗜み藏めし名品を盗むに均しき業はしも爲しなんことの懶くて實に尤も幾度か心に謝ぶる思ひあり去れども今は早風吹く虎に騎る勢ひに退く徑のあらざれば忽ち呵々と打笑ひ君が刀の縁頭を剝ぎ取る吾は初めより無理を元手の曲事なりサは去ながら吾れも又た一箇の武道を磨く者故なく物を奪はんや心を静め余が言の本末委敷聞きねかすと夫より余が廣光の大小を得て拵へを爲さんと企てたりける梗概を物語り四年が間片時の忘るゝ隙も中々に日本六十餘州より搜し集めし程乗の六所揃十二品大小分の其中に只だ刀の縁頭探し残りて早や二年樂みよりも恨めしき思ひに沈む目の前に君が所藏の其の中に之れありけりと見るよりも道ならぬとは知りながら剝ぐか無理かや非道かや夫とも君は斯く許り思ひに思

ふ余が武士の意氣地を捨て、一品の道具を吝む心かや、莫遮あれ余れも又た同じ武道の岐に遊び面白からぬ塵の世に骨で構へし衣架け、肉で造りし飯桶と同じ境に死なんより此の縁頭の争ひを此上なき幸と擬へて、共々庭に打出で差違へてぞ相果なん斯許りの事爲してこそ又た面白しとや云ふべけれ、疾く用意して立向へと言へば彼方も打笑ひ世に道廢れ人腐れ薄生白き世渡りに、お茶を濁して生きんより死するも一入面白けれど君と吾れとが僅かなる道具一つの争より差し違へて死なんこと思へば耐へぬ痛事なり負けるは悔やしきことながら、餘り手荒き詮議故道具は君へ贈るべし、イザ剣ぎ取りて與へなんと立たんとするを押止め、君が左様に納得の詞を兼て期したれば道具は先刻に剣ぎ取りて早や懐に入れにきと、取り出し示せばアツと許り打驚きて共々に果ては笑ひに吹揚目きて、先づ四年目に程乗の六所物は揃ひけり、夫れより一入工夫を凝らし、満五ヶ月にして拵へは思ふが儘に成就して床に飾りて打眺め、先づ人間の生涯に樂みとなん云ふものは如何なる時の有るか、は知らねど此の時以上はあるまじと出るさ入

るさの折りに觸れ余が戀人や如何ならんと訪ひ慰めて暮せしが、兎ある彌生に雨降りて風さへ誘ふ花の暮散も、墓なき淺草の鐘の音遠き草の窓得知れぬ鳥の啼き渡る最と淋しかる時なりけり、學びに得たる病癖の風斗起りしぞ可笑しけれ、夫れ人の樂みは満足の時を限りとするか、余は疎てより淺墓に世に有るものは樂みも憂きも薄かるものぞかし、誠心に映らふは無きものにこそ多かると、古き聖の文の痕味ふことの面白く深山隠れの法の道分け登りては歸るさの柴折も忘れしこと有りしが、今戯れの物數奇に望みを滿て、樂しかる心の外に物なきは最と恥かしき事にして、拵て此上は今一つ樂しきことは無きもかと思ひ出で、は終夜轉帳に身を反へし側ち伏して道の花搔き捜しても見出さぬ最と、苦しき思ひして二三日を過せしが、世を侘びて獨り隅田の花の蔭と、雜句一つを吐きし時、豁然として得たるが如し、夫は余が此の廣光の大小を得てしより一種の魔神に魅せられて其の拵への成る時は夢心地にて花の山廻るが如く酔ひ迷ひ樂みとのみ思ひしが、此れ許りの樂みにて、誠の人の樂は此の廣光を誰人か面白き人を見

附出し贈り與へて仕舞ひなば嘸ぞ樂しかる事なんめりと一度び思ひ到りては扱て箭も楯も耐り得ず余が腦中に描き出す道知る人の戸籍を閲する如く探搜し終に一人を選み得て願ふが如く頼寄り贈り與へて其後の其樂みは如何許り迷ひの雲も霽れ互り過ぎし昔の可笑かる事のみ残りて廣光は今は涅槃の汀なる蓮の臺の上に居て善き成佛や爲しぬらんと書くさへ最とい愚かしき余が古る事の物語り長夜と共に綴るになん

八

村正

伊勢國千子村正初代脇差

一尺二寸二分

同二代刀

二尺二寸六分

拵脇差朱鞘白柄角縁頭目貫金無垢牡丹に山鳥雌雄石黒政秀在銘
刀朱鞘白柄縁頭帶取鍔銀臺八雲形に金秋草の色繪御用信處在銘目貫
金臺慶婦稚夫育兒の圖銀素赤色繪壽良在銘

大小各生中心在銘穴一ツ刀鋸子喰ひ違ひ灣形鑄作り地鐵強く一面の
鍔匂ひ宜く

脇差小灣形小亂氣味匂ひ深く銚子延び少し枉氣味あり眞の宗

此刀匠は初代は平安城長吉の門にして後延文の頃五郎正宗の門弟と
なり勢州桑名に住し仙五又は千子とも云ひ法名妙臺と云ふ

二代は應安の頃専ら技能を發揚し天下に切れ物の雷名を轟かし彼の
歴代の徳川家に仇せしと云ふは此の刀のことにして俗間村正と云ふ
名を聞けば泣く兒も聲を止むると云ひ傳ふ

余は曾て村正の鍛方に付一の理想を有す夫れ初二代の村正は斷じて
本鍛ひ三枚なるを信標すべきことあり然るに余が諸家の寶品其他を
見るに多くは並三枚にして頗る下卑たる地鐵許りなり此の大小は純

粹なる本鍛えにして一點余の理想に缺くることなき品なり
此刀匠生存の頃は彼の南北兩朝の頃にして南朝の正平十一年丙申よ
り建徳文中天授の頃即ち庚戌壬子乙卯に亘る歴史を有する故多く足

利尊氏死後のことに屬す今ま二三當時の特殊なる事蹟を列擧すれば、
庚安元年辛丑に南朝忠烈の軍は三たび京師を取り貞治元年壬寅には、
北朝の天子漸くに京師を復して還幸し玉ひ同六年丁未には鎌倉管領
基氏卒して氏滿之れに代り應安四年辛亥には北朝の今川了俊筑紫の
探題となり同七年申寅には足利義滿親から九州の菊地を征して之れ
を降し永和元年乙卯には南北朝相合して海内略々定るに至りたる稍
稍歴史上の起伏を減退するの時なりとす

余曾て村正の優勝なる刀を得んが爲め全國の道具屋を促して滿八年間
に九十六本の村正在銘を調べたることあり然れども余が見る處も鑑識者
の見る處も一本として満足する物なく茲に村正と云ふ刀を斷念し此と同
時に村正なるものは彼の銘鑑にあるが如く二三代に止まるものに非ずし
て天文慶長以後までも正に八九人ありて銘振り中心丈けは正しくて鍛ひ
方劣等に地鐵も卑しく末代に至る程取るに足らざる下作物たることを發
見したり而して其の初二代三代までは必ず本鍛ひ三枚にして著るしき名

工上作たるに相違なきを覺えたり總て延文永正迄の名工は兼光則光村正
盛光康光兼定忠光祐定等の如き尤も偽似物多きが爲め其の正眞物の品位
を殞し十中の七八は必ず平凡の鈍刀にして一顧の値ひなきものを三百年
間の太平中武道の類廢に乘じ其の銘聲許りに走りて珍藏したるもの多き
傾きありしを信するなり思ひぞ出づる日清の其の戦の砌りには余が半生
に蓄へし數百口の刀劍は事故ありて一振の痕をも止めず失ひしが或時高
島將軍の御館に伺候したりし節風圖本阿彌に出會て携へ來りし古青江の
安行となん云へる刀を余に買ひ取れと勸むる故好める道も此頃は戒め居
たる時なれば斷はる爲めの戯れに初二代村正の在銘にて本鍛ひ最上の逸
品あらば何時にても價ひは問はず買入なん其他は當分望みなしと當らぬ
籤の引出物忌やがることを承知にて云へば本阿彌凝視と余が顔色を詠め
しが心憎しと思ひけん仰せ畏み候ひぬ探し覺めて其の中に必ず御目に
掛くべしとソコ／＼其場は歸りしが四五日後の夕間昏余が或る酒樓に客
人と酒酌交す直中へ喘ぎ／＼に二た振りの刀を持って飛込みしは病ひの種

の本阿彌にて過つる頃の仰に隨ひ此の初二代村正は大小本銀の在銘物一點毛筋の疵もなく殊に履歴は某候の家傳はる寶器にて事故ありて拂物に出でたる物を三時間借用なして持参せり兼ての仰に候得ば價を問はで即金にイザ召されよと押し寄せたり言ば質取られし後の責め道具禦ぐ箭種も盡き果て、詮術へなきに今は早や刀になりと難癖を付けなんものと引拔けば眩耀ゆき程の名刀にて懸れん道も中々に落城とのみ覺悟して腹切る思ひに買ふ外は施す術もなかりけり扱て買ふとして價はと問へば黄金を杉の峯鞍馬天狗の鼻の息嵐の山と吹き荒み飛び立つ程の好もしさも愛宕高尾に攀ち登る路盡き果て、本阿彌に借金にても詫るが如く腰膝折りて漸くに明日中を借受けて家に歸りて燈の前に蕭然り腕垂拱き刀の代の才覺に頭の味噌を絞れども扱て格好の智恵も出ず只だ出るものは溜め息の外なき中に夜は明けて鳥の聲に東雲の黄金色なる跡も消へカサヌカサヌと飛び行きし空恨めしき五月晴れに續かぬ天の運定め此の大小を質に曲げ其の價ひさへ拂ひなば又た爲ん術もありぬべし去れども余が知る

質店は年月永き貧乏に理も非も曲げて曲げ盡し塞がぬ門もあらざれば今ま此の刀を曲げんには一種異なる質店を探し出すに非ざれば首尾よく事は遂げがたけん兎やせん角やと思案の後ち天下無双の質店の目の前にあることわしも知らざりけるぞ思まされ夫は此の刀を時めける國の宰相桂侯に質物として送りなば或は貸して玉ひなん可なりと舌鼓打付けに書く一封の拙牘もろともに使して總理大臣の御館なる玄關先きにぞ持ち込んだり總理閣下の驚きと怒りは愚か首にさへ換へまく思ふ刀故其の餘儀なきを憐みて重疊小言を上に乗せマンマと金は貸し玉へり質に世の中は三文の直打も無しと思ひしが地獄の上も一足に飛べば向ふは極樂の岸に危ふく爪先きのかゝる貴き金色の佛も及ばぬ功力にて若向淨土の喜びを心に湛へて本阿彌に先づ仕拂は濟ませけり扱て是れよりは又更らに工夫をなして桂侯へ借用金を返さずば受けし恩義を如何せんと身を粉になして駆け廻はれど七月の空に雨雲も絶えし早魃の跡なれば家の田の面に水涸れて庭の笕の水車踏むよしもなく今は早や勝手の悪しき風車借金

處が朝夕の釜の尻さへ冷め勝ちに又た詮術もなきまゝに其の儘にして
過しけり斯くて秋過ぎ冬も逝き春としいへど夢の間に雪消へ残る如月の
中洗の頃にてありけらし桂侯閣下より至急の用として呼出され傷づ持つ
歴の笹原を刈り倒したる許りにて胸さへ躍る爪ま先きに蘇み荆の切り株
を辿るが如き心地して芝の小山のお館に分け登りたる其の後の咄しや如
何なりぬらん實に百萬の貔貅を彼の長阪の橋際に一人で防ぐ勇あるも借
て返さぬ時はしも鼠の聲にも身を縮む憐れ墓なき貧棒に屠所の羊の夫な
らで殺練として歩行く三縁山の鐘の音に消も入たき心地して桂邸へと赴
きけり

九

むらぎもの心懸せし其時は群れ立つ富士の水鳥も寄せ来る敵と疑はれ
浮き足立ちて逃げ走るは昔も今も同じかと思ひをなして恩借の詫をや如
何に述なんと心の糸を繰り返し漸く三田の桂侯へ伺候したれば侯爵の召

されし用は他事にて扱て四方山の物語りの迹にて侯の仰せには彼の藝日
圖らずも質物として預りし村正朱鞘の大小は今親戚の者共より荐りに怪
事を申出で五月蠅きことに思ふぞかし彼の村正が吾家の鬨を越えて入り
しより家内に病人絶えやらす殊に此頃余が妻の心地勝れず打臥せるを皆
村正の爲めなりと一人が云へば誰れ彼れも詰まらぬことに講そしく、ホト
ホト困じ果てぬれば此の刀こそ此まゝに君に返して外族等が迷ひ心を拂
ひなん疾く持ち行きてたびねかしと仰を聞いて差當る金の工面の無きの
みか命に易ゆる名刀の疵ともなるべき仰言殊に此なる村正は其の昔より
國人の爲めに建てにき勳功は事故ありて其の由緒を調らべにければ貧乏
の悔やしさに増す残念は今ま事々しく擧揚つるふ勇氣も落ちて忽ちに例
の奇譚の癖出で、如何にもなして今暫し金も返さず刀をも持ち歸へらざ
る工夫して當座の急を逃がれ得ば又た好き機もありなんと心を定めて扱
て云ふやう候の仰せ去ることながら敗爛れても武士の端くれ一時の窮を
恩借に救け玉けし御心は飛ぶ小雀の片羽にも忘るゝことは中々に身にあ

り丈けの力をも絞りて侯の高恩を返つべうと思ひにき然るに、未だ夫さへも爲し遂げ得ざる真中に仰せありとて皮面らに如何で刀を持ち行くべき武器を愛する武士の身に耐へ難き恥しさを少しは察し玉へかし殊に此なる村正が武勳輝やく大將の侯の御館に崇して、最と徳高き奥様の御痛付きを起せしとはお情もなき仰ぞかし、寔刀に悪相のありて祟りをなすとても侯が愛でさせ玉ひぬる、お古比の方の祟りには及びつべうも思ほへず曲げて刀は此まゝに御館に止め置き小生が借用金を調達し御侍史へ返し奉つるまで許させ給へと述べければ侯の御氣色平常ならず強烈か目玉を頂戴しお伽ぎ咄しに舌切りの雀が森に負はされし慾の籠の夫ならで恥と目玉を詰め込みし刀の箱を負はされて鞭つ如く追ひ出され、吾れより招ねぐ憂き雲と涙の雨か村正の刀の先きと我慢の天狗の鼻も諸共に曲りて今は涙汁を潑り上げてぞ歸りける、夫より様々詫を入れ程経し後に久しかる知遇の綾を掛け渡す橋本雅邦の額面を捧げて茲に御氣色と思借金の帳面と共に掻き消し久しかる貧窶き武士の瘦面も僅かに晴れて邂逅はに日の目を

見たる心地して此の騒動は鎮まりけり、此れより此の刀の事につき様々の事共ありて終に吾家の藏品とならず、今は故伊藤公爵閣下の御藏に入りて、最と穩かに眠りに就けり、嗚呼村正の幸運此上なし之を愛でたりし余の満足ンモ此上の有るべきやは其願末は次號に述出でなん

+

余故ありて此村正の舊持主たる淺野某と云ふ老武人に邂逅し端なく其の來歴を聞くを得たり、曰く彼の某華族の村正は、自分が明治十六年或る事情の爲め賣渡したるものなり、固より古き來歴は知らざるも自分は根岸の豆腐屋銀次郎なる者より買入れたり、而して古き紙數枚に此刀の由緒書を添付しあり、其書類によれば此刀こそ天明四年甲辰佐野善左衛門政言が大老田沼山城守意知を斬りたる刀にて、當時幕府の記録には一竿子忠綱の刀とあれども故ありて家臣藤岡甚五兵衛之れを掬り易へ公儀へは忠綱の刀を出すことになりて此刀を隠藏したるものなり、其後故ありて松前の士泊

源六郎の手に渡り、後ち寛政十年戊午露國船蝦夷に來り亂行を爲し争論の末士民二人を斬殺したる時嚴敷談判の上下手人二人を此刀にて斬首し、後ち其の子勘六郎なる者江戸麹町に道場を開きし時享和三年癸亥劍工川部水心子正秀に此の刀の模造を鍛へしめ文化六年己巳正秀死歿の年に於て其の友人淵上某の仇を千住河原にて撃ち、夫より此の刀佐倉の浪士富津某の手に互りたり、此の富津なる者元治慶應の頃より彼の豆腐屋に止宿し明治元年戊辰上野戦争の時薩兵に加はり花々敷彰義隊と戦ひ終に銃丸二ツを面部と肩に受けて戦死を遂げたり、其時其の死骸と共に此刀を銀次郎が引取り世話したる由にて、右の由緒書は彼れが荷物の中にありしを共に保存したるもの、由云々と月高く大空澄める秋の夜に眺める人の數々はあれども物の憐れをも知れば一入床しかる昔ながらの影牙えて露とも似よ一振りの刀にさへも斯く許り長々し世を経る中には勇々しかるべき経歴の伴ふものかと思ふ程、又今更に慕はしき心地せられて愛しみ塵の浮き世に交はりて心を騒がす腐錆の掛らん時は村正の刀の影を振り廻し、我と我

身の曇りをば拂ひ清めて暮せしが去る丁未の年の極月同好の友人近藤加藤の兩氏等と酒問此刀を弄び相互りに種々の批評に興を添へける、因思す入來ましませしは故伊藤公爵閣下にて統監服の其儘に余が側に座し玉へば一座の驚き一方ならず亂れし席を修めんと立騒げるを押し止め先づ其刀を手に執り玉ひ暫しが間打眺め嘆息の聲と諸共にコハ珍らしき名刀なり、余が晩年に刀劍を好めることは汝等の能く知りける所なり、此刀こそ日頃より尋ね覓むる村正なり、余は此刀を持ち行きて老後座右の樂みに供へつべうと思ふなり、汝等曲げて此刀を余に譲與してたびねかすと仰を聞いて今はしも何か違背のあるべきぞ、八橋の城にも易へぬ壁でさへ下和が持てば別られ身の禍をこそ爲すべけれ、此村正もあまさかる鄙の荒男の手にさへて狗鷄を屠らんより今ま公爵の御手に觸れいと、榮うる御館の守護の刀となりもせば幾百年昔なる其村正が地下にて苔なす骨に光あり、イザ召されよと諾へば公の御喜び一方ならず抜きつ納めつ幾度か眺めに厭かでおはせしが其夜はさして御酒さへ召されず程なく馬車を促がして轡

轆る音さへ勇ましく御館に歸り玉ひしが斯くて其の年も暮れ明くればかはる人心古りにしことも打忘れ春の初の壽きも君の威稜と諸共に最と久しかる祝ひして庭の小森の梅ヶ枝の梢に來鳴く鶯の聲も一入長閑なる彌生初めの頃にてありにき風斗公爵の御館に造詣終日閑語ひ參らせし其明る日のことなんぬり吾が柴の扉に月毛なる駒に牽かせし官車の軌を止めて入り來しは伊藤公家の御侍史にて一封の薫書に相添へて最と尊とかる大幅と千五百金の賜と共に下賜ひける余の喜びは今更らに喩へんやうもなかりしが聊か思ふ節ありて下なる返書を認めて御侍史の人に捧げにき華東薫誦仕候昨夜拜謁の砌りは殊に長坐下風を駭かし奉り退て恐懼に耐へず奉存候唯今態々高使を以て莫大の金子及び貴重の名幅下し賜はり御懇情感銘の至りに奉存上候併し捧呈仕候村正の代償として金子頂戴仕候儀は乍恐心中甚だ安穩不致奉存候小生至極貧微には候得共未だ賣劍の客を相學び申さず彼の張良莫邪の劍を賣りて破楚の大義を定むる底の時機にも無之云は、泰平の廢器浪客の玩具閣下一時の御慰みに

もと存じ捧贈仕候儀に御座候間微衷御諒察被成下御留置被爲下候は、本懐の至りに奉存候而して高貴長老の賜金敢て返上し奉るは頗る缺禮の至りと奉存其儀も甚だ苦痛罷在候若し微衷御推恕被成下候は、閣下の御身邊に奉侍し微功ある人々に御給與被成下候は、小生頂戴よりも幾層の欣喜を相加へ候次第に御座候扱て恩賜名幅の義は有難拜受長子孫に相傳へ御芳志感戴可仕候不取敢御禮を相兼ね愚衷奉得御意度野箋如此御座候恐惶拜復

云々と返書を捧げし其後に寛仁大度の公爵は余が述べたりし心をば唯だ其の儘に容れ玉ひ千尋の海の藻芥にも足らざる海士の腰篋に溜まる露とも憐れみて件の金子を御垣守る衛士ならなくに公爵の御側を護る雄夫に其日に下し賜ひにき夫より右の村正は箱入の儘暫くも傍へを離し玉はずして其の韓國に幾度か赴き玉ふ時にても携へ行きておはせしが其後とも幾度か余が公爵の御身の上を氣遣ひて誓言を文にして申送れば村正の刀に護る身なるぞと御返し聞いて僅かにも安堵心に暮せしが此の村正が

公爵の御側を離れ此度は他し刀を携へて千里の秋の旅衣重ねもあえず紅
の襦と共に錦なす立田の川にみを盡し波々ならぬ御身をば漢紅かに染
め果て、清くも流し玉ひぬる深き淵瀬の蘊積は幾世久しき水玉に絶なん
やうは無けれども末の汀に哀れ涙し其の民草の種々は只だ長へに露をの
み結びて秋の夕風に滴るゝ身とぞなり玉ふは同じ時雨の村正の刀に科を
ふり獲ぐ其の理りは無けれども若し此度も斯程まで愛でさせ玉ひし村正
がお伴をなしてありもせばと最と愚かしきことまでも書さへいと涙
す今は僅みと成り行きし公爵が刀の経歴を思ひ出るまゝ記すになん

其日庵叢書第一編 畢

附録 怪人の怪文を読む

(一)

倉辻白蛇安批

其日庵先生は當代の怪人格也居常其面を包み其手を袋にし影を暗雲濃
霧の裡に没して人をして進退舉止を端倪せしめず天下若し大事あり霹靂
天の一方に轟くに及んで僅かに閃電の如く暗雲を破りて出で怪光妖火を
東西に馳せてまた暗雲の裡に没し去る茲に於て世人偶々其片鱗を見るも
未だ嘗て全身全形を見ず自ら想像して猿面となし虎體となし蛇尾となし
而して呼ぶに聖代の怪物を以てす魔乎怪乎龍乎蛇乎源三位の武威照魔の
明鏡を假るに非れば暗裡の實體得て之を知る能はざるべしと雖唯だ形影
深く神秘的雲霧の裡に隠れて首尾臆人、人格の最も不可解なるは即ち疑ふ
べからざる事實也

既に身を神秘の雲霧に包藏す輪廓色彩の共に鮮明ならざるは當然にし

て毀譽の紛々たるまた是れ群盲巨象を撫して其大小を議するの類ならんのみ大となし小となし偉となし凡となす素より暗中の巨體に向ては一毛の微を輕重するものに非ず敢て自ら辯解せず敢て自ら裝飾せず終始黙々として社會の火山脈を縱横し不言不語の間時勢の暗流に棹しつゝ白眼高蹈野に在て虎嘯する所怪は即ち怪なれども是れ尋常狐狸の怪に非ず蓋し飛龍は常に雲霧と伴ひ志あるの人は常に蹈晦の術を慣用するあり先生の人格の不可解なる又以て飛龍の雲霧に隠れ志あるものゝ身を舞臺の背景に没すると同一轍に出づるか

虚榮は人生第一の桎梏にして貴となく賤となく男となく女となく殆んど此桎梏に囚はれざるものなく囚はれて而して窮せざるものなし大臣然り富豪然り美人然り匹夫匹婦も亦然り此間にありて獨り達人あり虚榮の桎梏より離れて身を自在の地に置き自由の手腕を揮ふて虚榮の囚徒を操縦し以て己が爲さんと欲する所を爲す世に政治家と云ひ實業家と云ふもの誰れか虚榮の子にして而して達人の奴隸たらざるものあらん達人の前

には王侯の權威なく富豪の財力なく社會の羈絆なし天下若し眞に恐るべきものありとせば身を自由の境に置き霹靂の笞を以て虚榮の社會を鞭撻する達人の外あらず而も凡俗の眼を以て此等達人の爲す所を見れば其行や奇にして其人や怪進退行藏の解すべからざるもの太だ多し茲に至て誰れか善く達人と怪物との差を辨せんや

昔者周末に鬼谷先生あり秦末に黄石公あり後世の史家往々にして其實在を疑ふと雖蘇秦張儀の縱横して六國の間を合縱連衡したる事跡は以て蘇張の背後に一箇大なる達人の存せるを信せしむべく張子房一世の閱歴は以て子房の背後彼れを支配したる達人あるを認むべし暫く鬼谷先生黄石公を以て傳奇の産する所となすも可也實在せし蘇張の徒は優に鬼谷先生の人格を證明すべく子房其人は又黄石公を反映して耻ぢず後世の史家が以て史中の怪人格となす所却て其人の達人なるを語るものゝみ何れの世と雖天下に達人ありて而して其人の史面に顯はれざるは其常に舞臺の背後に隠れて經綸を布き覆面して傀儡を操縦するが爲め也史を讀んで陸

離たる人物の光彩に接するもの必ず其背後に覆面の暗影あるを忘るべからず我が明治の時代維新革命の風潮を受けて朝野幾多の人材を産し國運の隆々として激湧澎湃たる人材の彬々として群立輩出せる之れを二千五百年の史實に求めて他に類例を見ざるに方りまた當然黒頭巾の暗影を見るべくして而も大なる怪人格の暗中に活躍せるを見ること多からざるは是れ雖て歴史の色彩を缺き時代の淺薄を語のものならずとせず獨り其日庵先生の如きは其怪錯なる性格傳奇なる閱歷を以て確かに時代の裏面を語り歴史の色彩を濃厚ならしむるもの又以て當代の珍とすべきや論なし先生はこれ當代の達人也世人若し先生を呼ぶに達人を以てするに異議あらば單に達人に類すと云ふも不可なし先生維新風雲の際に生れて革命の大氣を呼吸し少壯身を志士の群に投じて東西に奔走すること多年幾度か死生を賭して國事を争ひ半世の放浪數奇辛酸艱苦嘗めて之れを盡さざるものなし既にして世態一變國會開け憲政施かるゝに及んで匕首を捨て牙籌を採り一時身を貨殖の巷に投せりと雖往年事を共にしたるもの、或

は鼎鏤の苦を受けて肉を割き血を流し或は志を抱いて早く幽冥の世界に入り骨を白沙青松の間に埋めて春風秋雨徒らに限りなきの怨魂を用ふを見默視せんと欲して黙視する能はず即ち出でゝ國家の經綸を策し王侯の間を縦横して以て故人親朋の怨魂を慰めんことを期す爾來面を包みて帝都の中央に蟠居し時に土蜘蛛の如く地下に潛み時に土窟を出でゝ羅を八方に張り天下大事のある毎に常に舞臺の背面に隠れて巧みに傀儡を操る日清戰役の前後に起りて日露の大戦を経韓國併合の實を擧ぐるに至りし最近二十年の歴史に於て世人は獨り舞臺の前面に活躍演舞せる幾多の傀儡を見れども恐くは背後にありて動ける巨大の黑影を見ざるべし是れ功名を眼中に置かず虚榮の桎梏より離れ只管怨を呑んで九泉の下に眠れる其友を慰めんとする其日庵主人の歸趣にしてまた自在なる工夫の其裡に存する所也

故星亨は人呼んで近代の怪人傑となせども其怪は其力量の怪にして其人格の怪に非ず彼れの世にある飽く迄も傲岸にして不屈強力を以て社會

を壓し朋黨を擁して明々地に大道を濶歩す彼れに於て若し怪なりと稱す
 べきあらば社會の秩序を蹂躪して己が爲さんと欲する所を爲したる其怪
 力のみ而も其怪力や遂に久しきを保たず白晝刺客の手に擁せられて毒血
 を市の公堂に流し悲惨の最後を以て一生を終る茲に至て不世出の怪力も
 亦尋常一様の力に過ぎず惟ふに彼れ天稟の力を頼んで放膽諱むことを知
 らず強壓以て人に臨み社會に對す彼れが一時の成功は世の弱者を壓した
 る一場の凱歌也然れども彼れ一度世を壓して而して反動の力あるを悟ら
 ず彼れ其土窟を出で臺閣の高座に着くに及び時代の反動一齊に彼れが脚
 下に勃發してまた抑ゆべからず彼れは既に虛榮の囚となつて臺閣に立ち
 敵に向つて大膽に其身の弱點を露出す遞信の椅子より彈かれて後幾くな
 らずして伊庭某の手に斃れしは遂に避くべからざるの數彼れは自己の及
 を以て自らを刺したるのみ彼れの力量は怪奇なる迄に強かりしも其智能
 は未だ深奥不可測の秘奥に達せず此の如きは未だ怪の尤なる者に非る也
 若し夫れ怪の尤なるものに至ては力量の怪に見るよりも之れを變幻極

りなき智能の應用に見るべしとす蓋し人の力量には限りあり智能に至て
 は素と變化を主として應用の自在なる變通の妙偏に神に通ずるものあり
 其日庵主人の怪は即ち力の怪に非ずして智の怪物の難を避けて事の易き
 に就き強壓を用ひずして變通を主とす此故に主人半生の足跡を見れば恰
 も水の低きを選んで流るゝ如く險山は之れを迂回し平野は之れを直行し
 悠揚として毫も滯滞の迹を見ず聖經に曰く地に四の物あり微小と雖も最
 智し蟻は力なきものなれども其糧を夏の中に備へ山鼠は強からざれども
 其室を磐に造り蟪は王なれども隊を立てて出で守宮は弱けれども手を
 もて絶えず王の居室にありと警戒嚴重なる帝王の居室と雖も守宮は尙王
 と共に住ふ是れ力の怪に非ずして智の怪也其日庵主人の今日ある又正に
 此の如し

張子房は古今の智者也留侯に封せられて後病を以て穀を辟く謝して曰
 く家世々韓に相たり韓滅して韓の爲めに讎を報す今三寸の舌を以て帝者
 の師となり萬戸侯に封せらる此れ布衣の極なり願くは人間の事を棄て

赤松子に從て遊ばんのものと始め三萬戸を受けずして留に封せられ既にし復た之を辭す風骨の仙なる眞乎達人の風趣今之を其日庵主人の怨魂を慰めんが爲めに國事に奔走すと云へるに比し何ぞ其口吻の相似たるや嘲らんと欲する者はあらゆる嘲罵の言を以て嘲るべし呪はんと欲する者は兇言陰語の限りを盡して呪ふべし虚榮を以て虚榮と争ひ單調にして平凡なる現代の社會に於て我等は此怪人格を珍とし且つ尊重せざるを得ざる也

(二)

既に其人一代の怪人格にして智能の變化自在なる到底常人の思ひ及ばざるあり從て其趣味信仰工夫造詣に於て亦多角多面殆んど人の窺ひ知るを許さざるは當然のみ其義太夫を嗜むや單に聲調の妙趣を味ふに止まらずして寧ろ人情の極致流麗なる聲調の裡に潜めるを看取し取て以て己が修養の資となすを怠らず又平生刀劍を愛して座右必ず數口の名刀を離さ

すと雖單に之れを以て刀劍其者に對する嗜好を満足せしめんとするに非ず光芒陸離たる古今の名刀に接して其中に潜める名工巨匠の精神を讀み刀劍を中心とせる歴史境遇を捉へ來て武士道の精華此等秋水の光芒の裡に蒐れるを見以て座臥常に爽快高朗の氣を養ふ此故に世人の卑俗なりと蔑視せる義太夫の中にも尙深奥なる哲學宗教あるを認め骨董家の玩弄物として世の廢物と輕んずる刀劍の中にも尙靖獻遺言の大精神日本特有の倫理あるを發見す此他角力の國技に於て圍碁の圍石に於て其好む所愈よ廣うして其通達する所愈よ深く一場の娛樂市井の卑戲と雖一度其眼底に映すれば忽ち高尚なる眞理嚴格なる道德の自ら其中に存在せるを闡明し藝術の妙諦を指摘すること恰も囊中の物を探るが如し趣味嗜好も怪人物に遇ふて始めて怪色ありと云はざるべからず

天下若し其日庵主人を知るものあらばそは必ずや辯舌の士としての主人を知るものならむ辯舌は蓋し先生が處世の武器とする所半生の事業悉く三寸の舌頭に繫れりと云ふも不可なく甘言時に蜜の如く壯語時に雷霆

の如く其舌は張りたる弓に似て、一度舌端を翻せば、一語直ちに人の肺腑を貫く今日若し遊説の士なるものあらば先生の如きは正に其第一人たるを失はず而も辯舌の士として先生を知るものも、文筆の士として恐くは未だ先生を知らず、多面多藝の人たるを知るものも、操觚者としての先生を知るものは蓋し稀ならむ

文章を以て閑人の餘技と爲すは舊時代の思想也、眞理を不朽ならしむるものは文章にして、社會を彩るものも亦文章也、英雄の事業は一代にして盡るも、朽ざるものは羊皮竹帛に留めらるゝ文字に非ずや、爛漫の才華舌に出れば蜜の如き辯となり、筆に出れば經國の文字となる、既に蜜の如き辯と鑿の如き舌を有する其日庵主人にして焉んぞ、文筆の可ならざるあらむ、曩きに週報社同人週刊サンデーを編するに方り、乞ふに警世の文字を以てす、先生即ち忙中毛管を呵して同人の至囑に應ず、義太夫論に始まりて、刀劍譚、借金譚、法螺の説を重ね、辛棒録に終る、鬼才怪人の筆に成る所のもの、其怪色怪味を帯びて悉く當代の怪文字たる、また當然のことならんのみ

凡そ文章は其人を反映し、其人の思想と人格とを併せて語る、義太夫論に於ては先生の道徳觀藝術觀を見るべく、刀劍譚には先生の趣味信仰を見るべく、借金譚には先生の經歷機略を見るべく、法螺の説には先生の經綸抱負を見るべく、辛棒録には先生の造詣工夫を見るべし、即ち此等の諸篇を通じて怪現なる先生の人物は自ら筆端に躍り出で、時には道學先生の如く、時には縦横家の如く、或は刺客となり、或は商賈となり、或は孝子となり、或は謀士となり、舞臺を維新以後の血腥き明治前半と、文質彬々たる明治後半に取り波瀾萬丈の間に立て、神出鬼没の秘技を示す所眞に怪文字に依りて怪人物を發見す、先生を以て明治の怪人物となすに一致するものは宜しく此怪文字に依りて怪趣怪味を味ふべき也

(三)

先づ義太夫論に就て見る、始め盲人性佛が山王權現に祈り、神勅に依りて譜節を爲し、琵琶に合せて之れを唄ひしに説き起し、續て小野通女が淨瑠璃

物語を作述し淨瑠璃の名之れに依て起れる事及び其後名人輩出して杉山丹後山本土佐井上播磨等を経竹本義太夫に至りて義太夫節の流行一世を風靡せるを説き近松の名文傀儡師百太夫の技藝と相俟て此平民的藝術が如何に人心の嗜好に投せるかを記述したる後自ら義太夫節が社會に反響したる事實を論ず一節に曰く

此に不思議なる印象は社會道德の上に現出するに至れり乃ち君臣父子夫婦兄弟及び男女の交情朋友の友誼等に對する情愛の發達これなり其結果あらゆる勞苦貧難死殺等の人生極端の慘事を擧げて悉く其情愛遂行の上の犠牲に供して更らに遺憾なきの傾あり當に遺憾なきのみならず之れを極端なる方法を以て遂行したる者に對して却て偉大の同情と賞賛とを以て歡迎して怪まざるに至れり此れ我國獨特の名産たる大和魂の發達隆盛時期にして我國開關以來如何なる學者教育者を呼び起し來るも此の如き盛大なる感化を全社會の精神に印象することは爲し能はざるべし

狂言作者は其技巧を競ふて最も人心を刺激すべき題材を捉へて之れを修飾し而して音曲家はまた其天成の妙音を以て之れを美化し聖化し聴くものをして流涕滂沱身其境にあるの感あらしむ茲に於て佛敎の信條も儒敎の教義も其人心を感化指導する點に於て遂に一の卑近なる平民的音曲に如かず狂言作者が豊富なる想像と深刻なる筆端に書き出されたる市井の出來事は義太夫節と歌舞伎とに依て最も廣く最も強く當時の人心に印象刺激を與へ不知不識の間國民的信條を形成するに至る主人更らに説て曰く

多數作者が脚色の骨子とする所のものは即ち死の一事を以て人情に迫り總ての波瀾起伏は之れより發生することとせりこれ彼の佛敎が生死の病死の悲哀的を根據として百萬の經典を縱横し以て人情迷悟の妙機を制したるに習ふものにして即ち人類善感の死を以て基礎としたるを知るべし其君臣の義は之れを以て貫き父子の親も之れを以て遂げ夫婦の和亦之れを以て決す茲に於てか社會百般の出來事は悉く死に纏綿した

る情實にして之を決する死の研究は此等作者によりて愈よ進歩したりと云ふべし此故に己れの尊信する道義の爲め若くは耻辱の爲めには容易く死を以て解決すること全く此狂言作者の徳憑に出で之れを受けて譜節演布したる巧妙なる藝人によりて全腦を感化せられたるものと云はざるべからず要するに此義太夫節の感化に魅せられたる吾國民は能く死ぬと云ふことに極端の興味を翫味し盡すに至れり云々

大和魂の根本觀念が死の一事に歸着するは今更論する迄もなし即ち己が信念及び耻辱の爲めには潔く一死を以て之れに酬ゆること大和魂の誇りとする所にして同時に大和魂を誇りとする我國民の信條とする所也義太夫節の脚色を以て暫く其不自然なるを冷笑する勿れ國民に死の觀念を與へ之れを以て宗教とし信條たらしめしものは此不自然にして而も挑發的なる想像的事實に非ずや徳川氏泰平の餘澤に狎れ士民皆鼓腹擊壤して士風頓に頹敗せるに際し尙よく武士道の精神を存し二百餘年の間國民の胸底深く死の觀念を印刻し得たるもの一に此等卑俗なる音曲ありしが爲

めのみ主人が此時代に於ける狂言筋書の數種を引用し來つて

極端より極端に至る死にかたの競争は一番は一番より悽壯を極めたり世は泰平なれども音曲は修羅場なり人心は平穩なれども芝居は鮮血淋漓たり此の如き薰陶を受けて數百年間一日も間斷なく感化せられたる吾國民は其言語動作に至る迄悉く芝居的俳優的に變化し了りたるは殆んど事實的に現映し來れり日清日露兩度の戦争に矮軀小弱の國民が其惨烈の死様を競争して或は軍人の模範と云ひ或は軍神と云ふもの亦争ふべからざる因由の存するなくんば非る也

と云ふもの條理に於て洵に其然るを見る近時我が文部當局者の此等歌舞音曲等卑俗なる技藝の裡にも尙大なる社會教育の存在するを認め之れが奨励の道を講せんと傳へらるもの事や當然にして而も其之れを悟れるの餘りに遅かりしを恨む此他主人の義太夫節を論する作者藝人の苦心を叙して引證該博趣味の津々として竭きざるを思はしむれども義太夫論を一貫して最も尊重すべきは單に義太夫節其者の價値に非ずして寧ろ廣き意

味に於ける藝術の價値也即ち名は義太夫論と云ふも其説く所は神聖靈妙なる藝術の社會教育に及ぼす影響より藝道の修練聖賢の教義に及ぶ其古名人が藝壇に血を吐くに至りし苦心を叙しては余が曾て一藝の奥を極めて世に感化を興へんとする者は敢て死を顧みずと云ふの正に過言に非るを知るべしと云ひ又義太夫節の修業は恰も武士の武術を修業するに酷似せり其満身の力の應用其氣合の鍛錬其息間等の研究實に寸毫の間隙油斷を許さざるの藝術たりと云ひ終りに義太夫節の近時墮落の淵に沈めるを嘆きて禮樂興らずんば道蒼生に至らずと古の樂は高尚悠遠なり今の樂は近易切實なり我國は此近易切實の音樂によりて蒼生の感化を支配せり今や此樂の滅盡將に目睫に迫らんとす夫れ何物の樂か將來の感化を司令せんとする乎落日悠々として秋復た老い遠天際り無うして鳥空しく飛ぶと結べる所著者の真意蓋し義太夫節に假て治國平天下の要道を論じ近松竹本以下の徒を備ひ來て國民的信條を涵養せんとするにあらんか怪人物が犀利明透なる藝術觀は此一篇に於て遺憾なきを見る也

(四)

義太夫論に於て大和魂を論じ藝術神聖を説きたる其日庵主人が刀劍譚に於て亦刀劍以外武士道の精神を説き更らに刀劍を中心とせる幾多の悲劇喜劇を拉へ來て巧みに一箇の小説を描き讀むのものをして巻を措く能はざらしむるもの怪人の鬼才決して尋常に非ず殊に刀劍譚に於ける文體は之れを義太夫論借金譚等と異にし修辭七五の古調を交へて殆んど別人の手になるかの感を抱かしむ

蓋し廣く刀劍を談じ古今の名匠を月旦するには世間自ら其人あらむ其日庵主人の刀劍譚は此意味に於ける刀劍譚に非ず筆を家寶たる延壽國資に起して此名刀に纏綿せる幾多の事實を擧げ名門の美少年あり艶麗花の如き美人あり孝子あり蕩兒あり勇者あり烈婦あり此等の俳優皆延壽國資を中心として或は戀物語となり或は御家騒動となり或は決闘となり茲に波瀾あり起伏ある小説的事實を構成す然れば從來刀劍に興味なきもの

此刀劍譚を讀めば自ら刀劍に對する興味を生じ刀劍と其日庵主人とを併せ知るを得主人自ら刀劍に對する自己の態度を明にして曰く

余が刀劍に熱心なるが爲め少しは鑑定之眼識もあるやに傳へらるゝことあれども其は大なる間違にて今日迄一度も満足に在銘物杯を當てたることなし然らば左様の未熟にて何故に刀劍を愛するかと云ふに刀劍は己れの名節を維持するに於て及ぶべき丈け防禦の術を盡し萬已を得ざる時は敵手を斬り捨つるものに付自分に持つも人に與ふるも其劍の銳利と堅固とを肝要とす然れば第一に其刀の性分を吟味すること猶余が他の人に對して其人の性質技量等を鑑測して其風體の善悪や容貌の醜美には更らに心付かざりしが如く一向に刀劍鑑定之法を學ばざりしが爲めなり

となす其自ら刀劍鑑定之眼識なしとなすは素より主人謙抑の言なれども刀の性分を吟味して敢て其他に及ばずと云ふ處主人が刀劍に對する趣味の決して骨董愛翫の本意に非るを知るべし延壽國寶に次で丹波守吉道

の由來を語り守家の高麗鶴に至て物語は愈よ佳境に入り主人自ら之れを購はんが爲めに祖先の墓所にある無縁の石碑を賣るの一段となり郷黨の豪傑途上相逢ふて悲歌慷慨し擁せられて牛肉屋樓上放論高談あり遂に墓石の賣代を空費するの光景を叙し墓石の紛紜は敬虔なる家婦を出し狼狽せる僧侶を出し其後に街上頭山滿氏を出す名刀高麗鶴も茲に至て別箇の光彩を生せりと云はざるべからず談の進んで相模國廣光に入るや主人更らに人生の哲學を語りて左の警句あり

余曾て曰く貧味を解せざれば富興を解せず又曰く心恒に貧しき者は財ありと雖恒に貧しく心恒に富むものは財無しと雖恒に富むと古人曰く錦着て疊の上の乞食かなとそれ富を貪るものは財中に解く蟲にして貴を攀づるものは名聞を嚙じる鼠也古今東西幾億の蟲鼠は暗處に名利の醜塊を穿食して腐嗅の糞汁を沁れ終に自ら此糞汁に溺死して悟らざるもの皆々然らざるはなし故に余昔時より貧の釣に富貴の餌を繋いで人を釣るに一として釣からざるとなし今余が傾筐の中には積年釣り善

めたる富貴の人澤山なるが爲めに余の貧を以てしも心の恒に富むことは世にありふれたる富貴の人よりも亦一入の歡樂の心地あるべく思ふなり斯くあればこそ昔より明日の烟も立ち兼ねる其面白さに誘はれて、
舐も嗜りもなし難き刀を買ふて樂めど此れ又穢土に花を見て濁池に月を賞する類執着すべき物には無限法界に富貴なく知覺命期に執着な

斯く觀じて古今の名刀に對す富貴なく執着なき所自ら自在の天地を見る廣光の大小を座右にして心を三界無碍の境に通はさんとする其日庵主人の心境また羨望に堪えずとせず最後に妖刀村正に至りて總理大臣邸を質店となし妖刀總理の家に累して遂に桂邸を追はるゝ一條より伊藤公爵の懇望する所となりて公が座右の友となる一段の物語事實は小説よりも奇

に因縁は妖術よりも不思議なるを語り朱鞘の村正怪人の手にありて怪光愈よ懐く尖端益々鋭きを見る後年公をして異域に兇彈に斃れしむる抑もこれ妖刀公を禍したるに非るかさはれ公自ら求めて之れを座右にす刀の

罪乎公の過乎人力の遂に之れを如何ともするなし唯だ刀劍譚として之れを聞く洵に興味ある一場の佳話たるを失はず前後十回に亘れる刀劍譚に於て讀者は獨り刀劍に關する智識を得るに止まらず又刀劍以外人生最高の問題に接觸せる或者と感得すべき也

(五)

馬琴一流の行文を以て刀劍を中心とせる幾多の佳話珍談を描き出したる其日庵主人は借金譚に及びて更らに講談調の文體を用ひ輕快平易なる調子の中に溢るゝ許りの機智を露出して怪人の才之く所として可ならざるなきを示す借金譚の題目既に人の意表に出づるに之れを談するの人は世の認めて磊塊不羈行藏進退の測り知り難しとなす怪人も稿出でゝ人の注目惹き明日張膽一字一句をも逃さいらんことを欲するもの決して偶然に非ず其日庵主人をして今日あらしむるものは其不可思議なる能力也
不可思議なる能力をして思ふ儘に活躍せしめしものは其變化極りなき境

遇也變化極りなき境遇を一貫して絶えず生活の油たるものは借金也此點に於て借金譚は主人が半面の經歷を語るものと云ふべく又不思議なる能力が如何に借金を假りて砥礪せられしかを見るべし借金譚冒頭の言に曰く

借りの世の借りの住居に借り枕借りて世渡る慣ひこそ盧生が夢の五十年魂膽の間に夢醒めてと古き文句にもムリ升るが寔によく申したもので人間と云ふ奴は大なる顔許りして居升が大抵借りて生きて居る奴許りでムリ升金持に智恵のある奴がなく學者に金のある奴がなく權勢家に實力のある奴がないのは古今の通例でムい升て大抵金持は内所で智恵を借り學者は内所で金を借り權勢家は内所で助けを借りて居る其他國家でも人民でも借りと云ふものゝ無いのは殆んどあるまいと思ひ升只其借り方の上手と下手がある丈けで借りると云ふことは人間の天性かと思ひ升一方に債權者たるもの他方に債務者たり財力の債權者は智能の債務者

たり學問の債權者は財力の債務者たり此活社會を通覽して誰人がよく凡ての場合に於て債權者たるものあらん主人の言茲に至て至言と云はざるべからず年甫めて十一昔者菅秀才が「月照梅華の處女作を試みて後年詩神と謳はれたる其歳を以て既に其友の爲めに二圓を借る其日庵主人は此時に於て早くも借金の天才たるを示せり後年世界の黄金王モルガンを説て巨億の財を借款せんと企つるに至りしが如き偶々以て主人が天品の材能を發揮すべき好箇の機會に遭遇したるものゝみ主人先づ借金の定則を論ず曰く

扱此借金と申者は、チヨイ借り時借り質置買ひ掛り延べ拂ひ證文借り、抵當借り、一判借り、連帶借手形借、本人へケ裏書本位借、より雜物澤山入れ、銀行借越借に至る迄色々借方がムリ升るが何れも借りたら返すべき責任がムリ升る若し借り離しの返しつこなしと出掛ると忽ちに貸した人は敵となり升て盛んに戰鬪準備を致し升て勳員令を發し旗鼓堂々と攻め蒐り升先づ怒鳴り込み頬の皮ヒン剝ぎ質流れ据り込み兵糧攻め喧

嗚ブン撲り親戚故舊の連帯人捻り上げ執達吏差向け裁判所呼び出した。疊
剣くり糶賣敵き離しの手と身とウンク水漬垂らしの泣きッ面乞食と
する等種々様々の畏ろしき兵器を振り舞して來る裏面の禍機が伏在し
て居り升から借たら先づ返すの外仕方がない様にチャンと道理が出来
て居り升

借金にも自ら哲理あり一哲學の見地より見たる借金の定則また傾聴の
値なしとせず既にして談の理論より進んで事實に入り主人自ら大臣の首
を抵當とし百六十金を借るの一段着想の奇警なる行動の大膽なるまた往
年志士の面目を寫して躍如面前に演舞するの觀あらしむ殊に一代の巨漢
山岡鐵舟を舞臺に出し俠骨なる當路の大臣を配合し來て紙上に殺氣溢り
意氣躍るそれより東海道は無錢旅行となり山陰道の武者修行となり神戸
に外國宣教師を毆打し旅宿に半夜火を出して未知の紳士に十金を無心す
るに至る等數寄と坎珂の限りを盡して一箇の立志傳と爲す即ち此借金譚
に於ては主人が半世の放浪生活を寫して其間に活躍せる大膽なる青年の

智膽勇を語り赤裡々の男兒の爲めに萬丈の氣焔を吐く當代閨門に依て榮
達を計らんとするの徒漸く多きに際し裸一貫機智と膽勇とを以て社會に
横行濶歩せんとする豪的信條はまた警世に著大の裨益なしと云ふべから
ず主人其結末に於て謳ふて曰く

かくばかり刈倒しても武藏野の

ほらには盡きぬ黄金草かな

卓落不羈毛脛一本を以て天下を横行せんと欲するもの乞ふ此意氣に學
ばんか

(六)

無責任なる放言をして世間之れを法螺と稱し無責任なる放言を敢てす
るものを稱して之れを法螺吹と云ふ勿論無責任なる放言の中にも自から
其無意識的なると惡意的なるとの別あり惡意的なるは世呼で嘘と云ひ處
世道德に於て許すべからざる罪惡に數へらるゝも其無意識的なるものに

至ては茲に所謂法螺の部類に屬し、獨り其世に害なきのみならず、社會に活氣の要素を與へて少からず、人を益し世を益することあり、大隈伯は人の目して法螺吹の頭目となす所なれども、伯の法螺や多く人生を樂觀し、未來を樂觀するが爲めに案出せられたる言説にして、百二十五歳説の如き誰人も其事實を信するものなきに拘はらず、又誰人と雖も、其世道人心に害あるを認めず、法螺は素と樂天を意味し、理想を意味し、想像を意味し、活氣を意味し、希望を意味す、此故に苟も將來を有し、大望を抱く者は、其資質に於て法螺吹の天稟を有せざるなく、唯だ僅かに談論の術に於て巧みに其思想を發表する能はざるもののみ、法螺吹の汚名を免る、法螺吹の名不名譽なるが如くして、必ずしも不名譽ならず、其日庵主人が自ら法螺の大家を以て任じ、客あれば必ず三寸不爛の舌端に風を起して、談論四筵を驚かすの妙技を示す所蓋し、主人獨特の長技として誇るべく、又以て主人平生の信念を見るべし、此意味に於ける法螺の説の一篇は、正に主人獨特の長技を露出して、機略と抱負とを語り、以て天下の珍とするに足る、主人法螺の爲めに氣焰を吐て曰く

法螺と云ふものは人間の悪行爲としてありながら、一方社會活動の原動力を司るが故に、吹かざれば静止したる池水の如く、直ちに腐敗して蟲を生じ、青苔惡藻之れを蔽ふに社會は見す、陰屈なる裏面の生活に罪惡のみを犯して生存上の活氣を發揮することが出来ぬようになる、併し世人が第一の誤解は、此法螺は謹んで吹かぬ丈で吹けば、何でもなく吹けるものと思ふて居る、一事である、法螺の必要を説て、而して法螺難に及ぶ、恰も是れ韓非が説難に類するもの曰く

中々法螺と云ふものは容易に吹けるものでない、一體法螺を吹くのは其必要と目的があつて吹くのである、夫れに吹て見ても人が聽て呉れねば、全くの無駄事にて聽いて貰ふには、それ丈の信用がなくてはならぬ、信用丈けでもいけぬ、法螺を吹く丈けの學問がなくては、其吹く法螺が、下品で聞かれない、學問丈けでもいけぬ、夫れ丈の修業と熟練と經驗と資格とを持たねばならぬ、此等のことが具備せずして、只法螺丈をブー

無暗に吹たとして、人が郵便馬車や電車の通行程も注意して呉れぬ
 法螺の難説き得て一々肯綮に中れり進んで法螺の分類に入れば第一大
 黒吹第二惠比須吹第三辨天吹第四毘沙門吹第五福祿吹第六壽老吹第七布
 袋吹の七種に區分し更らに新式の分類法として竹貝吹一名馱法螺朝顔吹
 (二名喇吹吹雨垂吹一名座蒲團吹德利吹瓢箪吹の四五を擧げ尙最新式とし
 てパロメーター吹海岸吹大陸吹等を加ふ古往今來法螺を以て雄を稱する
 もの少からずと雖も之れを科學的に研究して分類説明引證の精微なるに
 至ては蓋し主人の右に出づるものなからん斯くて法螺の實例に入るや或
 は乗合船に賭碁の専門家を吹き飛ばし或は遠く海を越えて米大陸に財王
 モルガンを吹き捲くる茲に至て主人自ら座蒲團吹の流派に屬すと稱する
 も稍や海岸吹大陸吹の面影を存すと云はざるべからずそれより日本興業
 銀行の創立運動となり百十四人の借金取を追ふに苦肉の奇策妖舌を用ひ得
 意の廣長舌愈よ出で愈よ奇に縦横の奇策愈よ出で愈よ怪に其北海に
 遊びて權家の信用を失するの一條に至ては自ら失策と云ふも尙得意の色

あるを失はず蓋し俗に謂ふ逆吹の類主人前掲の分類に於て此一種を逸す
 るは白壁の微瑕として惜むべきも問はずして自ら其實例を示せるは以て
 用意の周到なるを見るべし最後に一箇の禪將軍を捉へ來て談論を闘はし
 正々堂々の論陣と疾風雷雨夜奇襲を試むるの機智とを併せ用ゐて遂に老
 成の名將軍を論破する處生氣溢れ才氣充ち眞に蘇張往年の舌を思はしむ
 法螺の説を以て單純なる放言となすは未だ共に法螺を談するに足らず法
 螺の名に隠れて其經綸を布き縦横の辯を試む怪人其日庵主人の面目期せ
 ずして此怪文字の裡に躍如たり法螺の説を讀んで快哉を叫ばざるものは
 恐くはこれ枯骨死灰の類ならんのみ

(七)

猛火野を焼くの意氣と天馬空を馳するの文を以て法螺を説くこと滔々
 數萬言堅白異同の論議を樹て、無遠慮に讀者を煙に捲きたる其日庵主人
 は態度一變忽ち腰に毛衣を纏ひ野に在つて大呼する道學先生となり辛棒

録を掲げて青年子弟を誨るの帷を垂れんとす

辛棒録に於て説く所は修養也工夫也語を換ゆれば辛棒我慢忍耐の諸徳を懲懲する也法螺の説を以て積極的技能的の鍛錬に資するものなりとせば辛棒録は消極的美徳の涵養に資せんとするもの前者に放膽を取るべくんば後者には其細心を取るべく此二者を併せ修めて始めて剛健痛快なる一箇の大丈夫を産出すべし古人云ふ膽は大なるべく心は小なるべしと法螺の説を讀んで快哉を叫べるもの又必ずや辛棒録を精讀して其裡に包蓄せる幾多の教訓を掬み取らざるべからず

福澤翁嘗て瘦我慢の説を爲して大に東洋道德の偏狹なるを排せることあり泰西の人動もすれば自然を尊び瘦我慢を以て自然に反するの性癖となせども東洋人唯一の長所は寧ろ此不自然なる性癖の上に樹立したる道德の上に存し日本人獨特の美點亦畢竟茲に存す福澤翁が説の是非は暫く此處に云はざるも辛棒我慢忍耐は確かに東洋道德の精華たり今其日庵主人の辛棒を必要とし瘦我慢を是認する恐くは又此趣意に出でんか主人曰

庵主の経験では甘味しいものを食へば喰ふ程人間の體を経世的に破壊して終にグニャ／＼の人間に墮落させて了ふ之れに反して不味ものを若い時から食ひ込めば身材軀幹の發達は申すに及ばず根性ツ骨などは實に強いものになると思ふ云ふ所は即ち孟子が艱難汝を玉にすとの意艱に堪へ難を忍ぶこれ直ちに人を磨くの要諦たり而して其之れを試むるの手段として阿房學馬鹿學の修業を説く

ソコデ庵主が今諸君に勸めて辛棒や我慢や忍耐の嗜好になる方法として馬鹿阿房の學問は此の二世皇帝的行爲を學べと云ふのではない問題に馬鹿阿房の意味を研究せよと云ふのだ一身の利害得失を構はないことは二世の馬でも鹿でも頓着しないが如く自分が此様と思つて遣り掛けたことは人の思ひ思惑も見榮も格好も構はずドンドコドンのドン詰迄野方圖のないこと阿房宮の如くせよと云ふのだ

天下の大事は斯の如き愚人に非れば成すこと能はず眞の智者は容貌却て愚なるが如しと云へるも恐くは此意味ならん

此學問を爲る入校試験には南無阿彌陀佛でも南無妙法蓮華經でも何でも構はない一聲叫んだら儘かに死ぬると云ふ決心をして其事件の中へグイとハマリ込み夫から辛棒と我慢と忍耐とを命のある丈け遣るのである人間死ななければ止めないと決心して掛る以上の強いことはいのであるソコデ利害得失を考へたり見榮や方圖を構つちや駄目である馬鹿のドン詰め阿房の行き止まり迄覺悟をして糞でも蒺藜でも構やせぬ死ぬる迄遣るのだと云ふ決心を本當に付けるこれが馬鹿學阿房學の初歩である

西郷南洲の信條は正に此の如くなりき人間死を以て事に當る天下何事か成らざるならん唯だ今の人利害虚榮に憧憬するが爲め此等眞骨頭の資を指して愚者となし痴人となすのみ
辛棒録は徹頭徹尾死を基礎としたる瘦我慢を談じ負じ魂を鼓吹す死は

決して戯れに非ず其日庵主人が其一生に屢々此瘦我慢を示したるは應て眞面目なる死の決意を以て事に當りしを證するもの或は俵を肩にして絶息する迄遠きに運び或は武者修行者と力を角して長く傷痕を左足に留むる等獅子は兎を縛つにも全力を用ひ著者は家常の些事にも死を以て之れに當りしを語り少壯帝都に出で僅かに二人の友と共に放浪數奇を極むるや偶一夜にして二人虎拉刺に斃れ身に一錢の貯なく而して旅宿の追放命令刻一刻に急なるに遇ふ此秋此際主人亦惡疫に襲はれて死生を運命の神に托するに至れる一場の物語は友情と大膽と辛棒との好事實を示して主人が此篇に説く所決して儒者机上の空理空論と同日に見るべからざるを思はしむ其山陰道の山奥に栗を焼き狼と戦ひ道を山間の老夫に尋ねて計らず門前柏木の物語となり維新の勇士病牀に横臥して往事を語るの一條に至ては一箇感興なる詩題を提供して小説以上の面白味あり或は市井に於ける匹夫匹婦の義侠に救はれ或は古稀の老僧に導かれて芭蕉庵に善男善女を得度する等半世の經歷波瀾重疊して雲濤正に滄海たるの觀を爲

し而も其奇變縱横なる生涯を通じて辛棒の一串魚貫漏す所なきを見る即ち辛棒録に於ては怪人が怪生涯の半面を見ると共に神聖侵すべからざる宗教的教訓の其裡に伏在せるを認め其尤も尊重すべき價値あるを信ずる也

(八)

若し耕文を職業とせるもの、眼より見れば修辭上の瓊瑤として縷指すべきもの必ずや多からむ若し創作を専門とせるもの、眼より見れば結構上の缺點として指摘すべきもの、また或は多からむ而も其日庵主人は文學を職業とせる世の所謂文士に非ず從て其生産する所のもの素より修辭結構の價値を問はんとに非ず文は達意を専らとし達意は事實の詐らざる告白を要旨とす義太夫論以下の五篇たい著者が年來の思想と半世の經歷とを傾け來て中に不朽の眞理を語り人世の行路を彩らんとの微意ならんのみ通讀數回感興自ら湧て料らずも著者の人物を品隲し著者の文章を批判す

批妄評罪の死に當るは素より期する所也

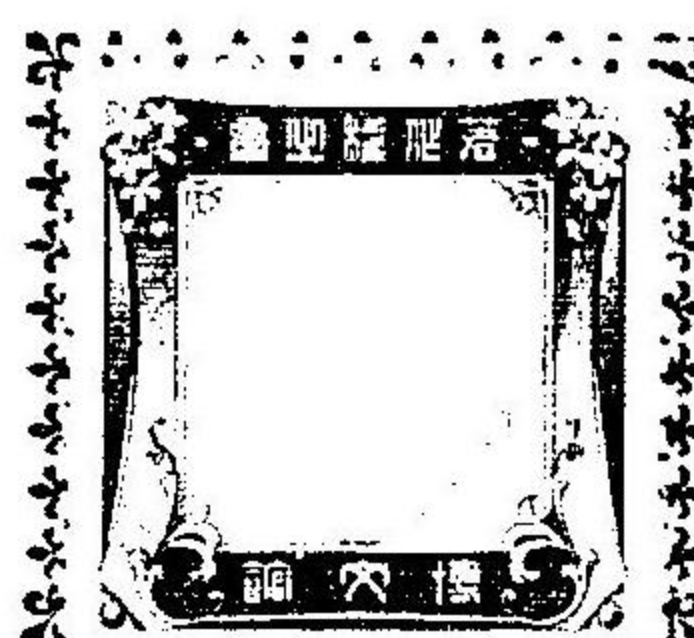
附錄畢

明治四十四年九月十三日印刷
 明治四十四年八月十六日發行

著者 杉山茂九
 發行者 大橋新太郎
 印刷者 水谷景長
 發行所 博文館印刷所

（其日庵叢書第一編）
 ○ 定價金九拾五錢

東京市日本橋區本町三丁目八番地
 東京市小石川區久堅町百八番地
 東京市小石川區久堅町百八番地
 東京市日本橋區本町三丁目
 博文館
 振替貯金口座東京二四〇番



心學叢書

全六册 和裝菊判美本
紙數各三百頁
正價金四拾錢
郵稅各册金八錢

目次

- 第壹編 (一) 賈卜先生安樂傳教授 (三卷) : 虛白齋述 (賈卜先生編授 (三卷)) : 虛白齋述 (齊家論 (二卷)) : 石田勘平述 (民の繁榮 (五卷)) : 虛白齋述 (里俗歌談談話新語 (五卷)) : 伊藤卓朴述
- 第貳編 (一) 松翁遺語 (五編十五話) : 布施松翁著 (雨やどり (二卷)) : 虛白齋述 (孝行になる傳授 : 脇坂義堂述 (福相になる傳授 : 脇坂義堂述 (目の前 (二卷)) : 虛白齋述 (勸善小語 : 山東指月述
- 第參編 (一) 御代の恩澤 (五卷) : 脇坂義堂著 (綴のなる木の傳授 : 脇坂義堂著 (和合長久の傳授 : 脇坂義堂著 (都鄙問答 (四卷)) : 石田梅庵著 (夜話莊治 (四卷)) : 出駒子著 (開運出世傳授 (二卷)) : 脇坂義堂著
- 第四編 (一) 立身仕末鑑 : 木南堂著 (案山子草 : 寺井方信著 (鳩翁遺語 : 柴田鳩翁述
- 第五編 (一) 鸚鵡問答 (一卷) : 丹羽氏祐述 (有るべかり (上下)) : 平島堵庵著 (五用心慎草 (三卷)) : 脇坂義堂著 (長命になる傳授 : 脇坂義堂著 (道徳問答 : 兼原慈音尼著 : 聖賢遺語 (國字解 (一卷)) : 上河正綱著
- 第六編 (一) やしない草 (四卷) : 脇坂弘道編 (爲學玉條 (六卷)) : 平島堵庵著 (男子女子前訓 (二卷)) : 平島堵庵述 (石田先生事蹟 : 上河正綱校

博文館發行

赤堀又次郎君校訂

新刊大二修養書

活動的心身修養法

醫學博士 二木謙三君 校閱 田生正次君著

發行所 博文館

全一册洋裝菊判美本
紙數二百餘頁
正價金卅八錢
郵稅金六錢

本書は著者が十數年間心病と戦ひ暗黒面より脱して光明面に出でたる奮闘史なり即ち一體兩面の真理に集り心身相關の理法の上に心と身との交叉點より割出したる實踐的修養法にして通讀中知らず識らず心身の調和を得胸中の煩悶苦痛を去りて奮闘的男子たらしめ長生保養の福音たらん事を期せり

佐藤醫學博士題字 醫學士 森友道君著
巖谷小波君序文

謠曲と心身修養

全一册和裝菊判大和綴
紙數二百二十二頁
正價五拾五錢
郵稅金八錢

本書は著者が多年の研究と實驗に基き「謠曲及び能樂は與味に伴ふ娛樂的衛生なり」との眞義を發揮したる者也著者は既に幾多の病患者に謠曲を勸誘して其の痼疾を全癒せしめたる經驗あり。今其の内容を見るに娛樂論、謠曲の價值、能樂の一般智識、謠の積古、能の觀方、謠曲の一般智識、謠曲と衛生、趣味の生活と謠曲、謠曲の梗概等の各章を設けて縱横に謠曲の心身修餘に缺くべからざるを論評す、眞に是れ何人も再讀三讀すべき好著也。

法學博士 新渡戸稻造君監修 前田長太君纂譯 ●發行所 博文館●

西洋武士道

全一冊 洋裝菊判織布上製四百五十七頁
挿入 寫真版 廿三頁 (諸家參照)
正金壹圓廿錢 小包料 金三錢

報知新聞評

四歐の地に封建時代の花と誇られたる義勇の眞相を紹介し泰西武士道固有の美點を述ぶ他山の石以て我玉を磨くべし精神修養の資たるべく又東西士道比較の資たらん

讀賣新聞評

本書は西洋武士道の始源憲法少年青年各時代武士加入式結婚家展最期典型等を収録して西洋武士道を説きたるもの及び興味ある書と云ふべし

時事新報評

レオンゴーチ氏著 "L'achèvement" を譯したるものにて部門を十章に分ち西洋武士の眞面目を描寫して彼の特質美點を本邦の武士道に副へんとするもの也

中央新聞評

レオンゴーチ氏の原著ル、シヴワリエーを譯出せしもの泰西武士道全盛時代の事蹟を傳へて遺漏なし日本武士道の諸書と共に現代青年銷沈の意氣を治する好著と云ふべし

ナポレオン性格論

文學士 土井晚翠君著 全一冊 四六判洋裝上製 紙數三百十七頁 正價金五拾五錢 郵税金八錢

英國水師提督 ネルソン傳

海軍省教育本部 版 全一冊 菊判洋布上製 紙數千三百二十頁 正價金壹圓六拾錢 小包料金拾貳錢

偉人の母

前田越嶺君譯 全一冊 菊判洋裝美本 紙數百九十八頁 正價金參拾八錢 郵税金六錢

北越新報主筆 今泉鐸次郎君著 ●發行所 博文館●

河井繼之助傳

全一冊 菊判總布特製紙數四頁 木版刷書及寫真版挿入 正金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢

長岡藩士河井蒼龍窟は近代の偉人なり、兵術に精しく理財の道に明に、兼て王學の造詣深く、識才端倪すべからざるものあり、維新の變亂一片歌々の氣已む能はず、蹶氣薩長の軍に抗し、時利あらず、命を鋒鏑に委し、賊將の汚名永く泉下に受けたりと雖も、豪膽雄略兵を用ふる事神の如く、數次敵軍の肝膽を寒からしめたるもの、懦夫をして起たしむるの概あり、著者同郷の先輩蒼龍窟の爲に、本傳に従事以來十有三年を閲し稿を改むること四回、竟に此編をなす、資料正確記述該博、偉人蒼龍窟の風貌識略書中に躍如たり、特に傳中關係ある諸名士の寫真筆蹟等數十を收めたるを以て、趣味津津手を措く能はざるが如き近來の好著なり。

現名士の演說振

島田三郎君序 小野田翠雨君著 全一冊 四六判美本 紙數三百二十二頁 正價金四拾五錢 郵税金六錢

日本高僧の人格

文學士 蜷川龍夫君著 全一冊 菊判美本 紙數二百三十八頁 正價金四拾錢 郵税金六錢

明治功臣偉人の活歴談

沼南 島田三郎君序
知川 箕浦勝人君序
忘賀重昂君跋

報知新田中萬逸君編

發行所博文館

賜天覽一死生の境

前編

洋裝四六判綿布特製額美本 正文七拾五錢 郵金八錢

（後編未刊）

革命に剣あり火あり血あり維新の鴻業は亦此三者に由活躍し明治の功臣諸公が壯時死生し而も克く身命を完ふして報公の誠を盡せるの状を自生ける歴史は隠れた無量の好史料を包蔵せるもの也閃々たる剣光殿々たる銃火を點綴せる
藏して完明治歴史の編著に資し全巻に充てる精義純時代精神を釐革し各自見解を
が死生の解釋は一哲理を含み世道人心を裨益する事甚大書は實益興
趣双絶る好箇の教訓書たるべく更に史外曠古の史書得易からざる自叙傳といふを得べし

●附録

伊藤公爵訪問記 伊藤公爵伯海舟伯断腸の記

井上泰岳君編

我半生の奮闘

三版

全一册菊判美本紙數三百三十頁

正文中講話者肖像挿入(寫眞版) 正文四拾八錢

郵税金八錢

中央新聞評 萬朝報評 報知新聞評

名流三十名の奮闘談を筆記せしもの、在學時代の青年には精神修養の好鑑たるべく生活の戦場に初陣の壯年に取つては好伴侶たるべし
大隈板垣兩伯を初め實業家、政治家或は友人の半生談を果む逆境に處して名家各様の向上手段を語れる所興趣湧くが如く後進青年の好讀物なり
現代に名をなし財を起したる三十家の半生に於ける奮闘談を叙す讀み方により青年を利する處多からざらん

我處世觀

全一册菊判美本紙數三百頁

正文中講話者肖像挿入(寫眞版) 正文四拾五錢

郵税金六錢

人生存の根本問題を解決せんが爲めには添田新渡戸大最幸福の生涯を得べきかの問題には後部豊川の諸氏ありて是れ堅鐵の意志を得る道なきか中野尾崎大谷日比谷安固を希ふ者に安田雨宮に答ふ瀟志翁行の徒が森村諸氏は其秘訣を訓ふ一男一家の安固を希ふ者に安田雨宮善財の奥義を説く實に本書は現代名家信仰告白の現在教て又奮闘者の唯一指針なり

博文館發行

—活動に志す者は讀め—

讀賣新聞記者 田村逆水君著 (全一冊菊判)
成功と人格 (三版)
 正價金參拾五錢 郵税金六錢

成功とは何ぞ、人格とは何ぞ、是れ研究すべき疑問なり。願ふに人生を天地の間に受く、能く其人格の通する所迄、人格を磨き上げ、努力して人格の達し得る所迄、人格の大なりしめ、高からしむれば、之れ眞の成功なり。今の世多きは成功を誤解して、人格の努力を外にせり。此書の記す所實に人格と成功となを得る羅針盤たり。志士須らく精讀して、豁然自得する所あるべし。

讀賣新聞記者 田村逆水君著 (全一冊菊判)
人生と健闘 (三版)
 正價金參拾錢 郵税金六錢

内容
 ▲活動の世界 ▲人生の觀察 ▲奮闘的
 ▲生活奮闘の要素 ▲人生の鍛練 ▲健闘
 ▲奮闘の二側面 ▲健闘の歴史 ▲健闘
 ▲政治的 ▲健闘的 ▲健闘の意義
 ▲事業 ▲健闘的 ▲健闘の意義
 ▲人間生活の意

(行發館文博)

慶應義塾教授 菅綠蔭君著 (全一冊四六判)
成功要録 (十三版)
 正價金貳拾八錢 郵税金四錢

本書は現世紀の青年が志を立て世に處する所以の道及び之が基本たる健康保全の方法を説くことと凡て九十有五編今同慶應義塾國文教科用書として上梓することとなりたるに際し、管著者に乞ふて、廣く之を世に公にするに際し、管著者に文章流麗にして、獨り青年立志の要書たるのみならず、あらゆる青年に於て、机上の寶鑑とせられよ。

與村二秋君、鹿野化骨君共著 (全一冊)
現代實業青年立身策 (再版)
 正價金廿八錢 郵税金八錢

本書は現代第一流の名士三十五氏が各自赤心を披瀝して自己の成功秘訣を叙しながら、實業青年の爲立身出世の方策を説きたる高視を網羅したるもの、其内容は職業選擇の注意早く職業に就く可否會社銀行商店員たるの資格等實業青年の是非心得ざるべからざる重なる事項を掲げたり。

—幸福を希ふ者は見よ—

森一兵君著 (全一冊菊判美本)
致富要訣 (五版)
 正價金貳拾五錢 郵税金六錢

陶朱猗頓の富貴し其富を致すは原あり、ロスチアイルド、ウアンダーヒルトの富貴亦他あらんや、此編是れが原を脱いて極めて詳密、讀者を指導して正に富の門に入らしむ、苟も巨富を致さんとするもの請ふ一本を購ふて其秘を知り給へ。

天城安政君著 (四六判全一冊美本)
立志の模範カネキ 六版
 正價金貳拾五錢 郵税金四錢

古來偉人傑士其人に乏しからずと雖もカ氏の如く身を一織物師の貧兒に起し曾て一弗半錢の遺産を受くるなく、奮自己の正眞の額の汗に依つて巨萬の富を作り而かも之を天下公共の爲めに散じ盡したる如きは眞に稀なりと云ふべし本書は此傳を詳録して、彷彿其人に接するの思あらしむ。

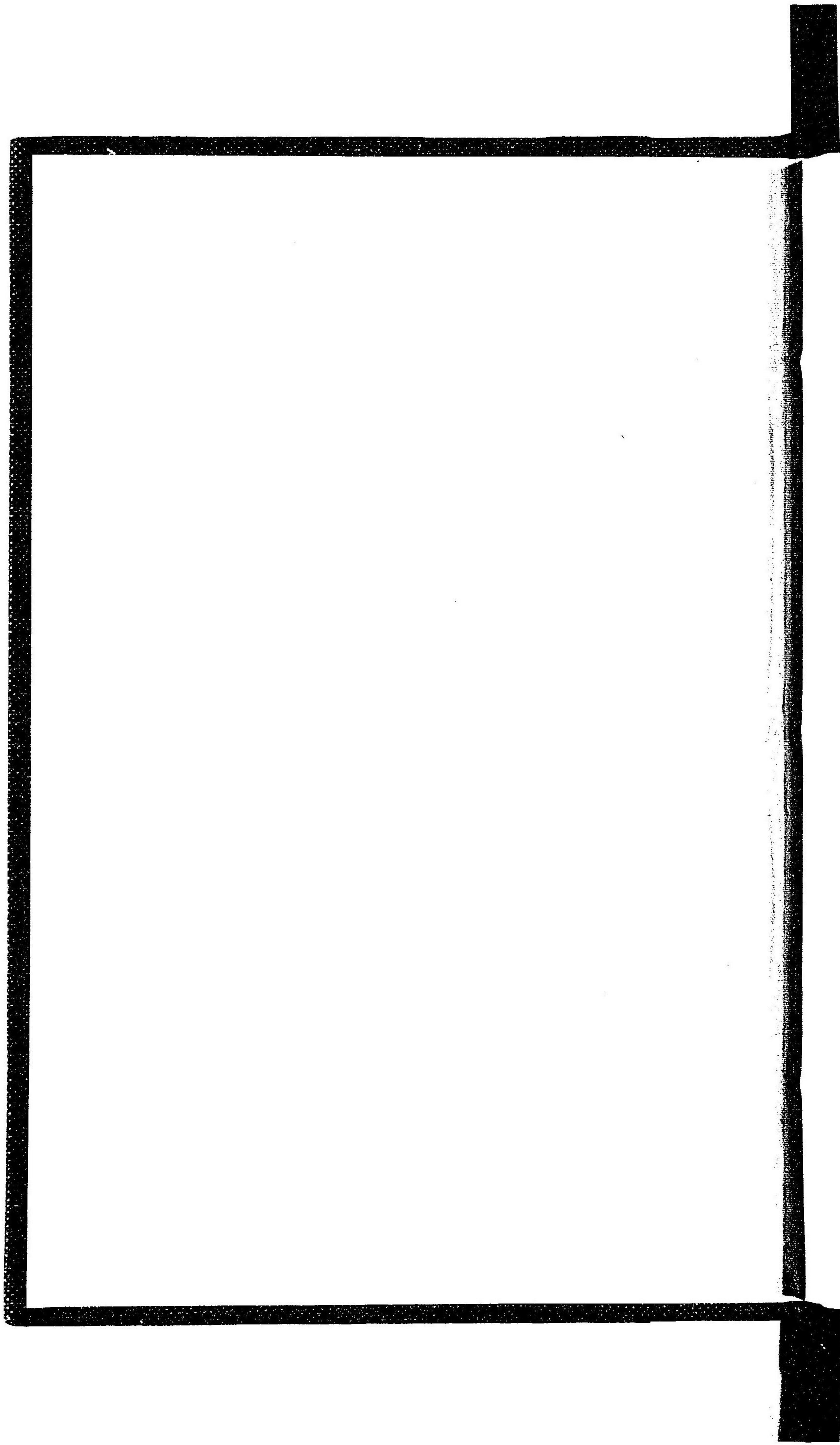
(行發館文博)

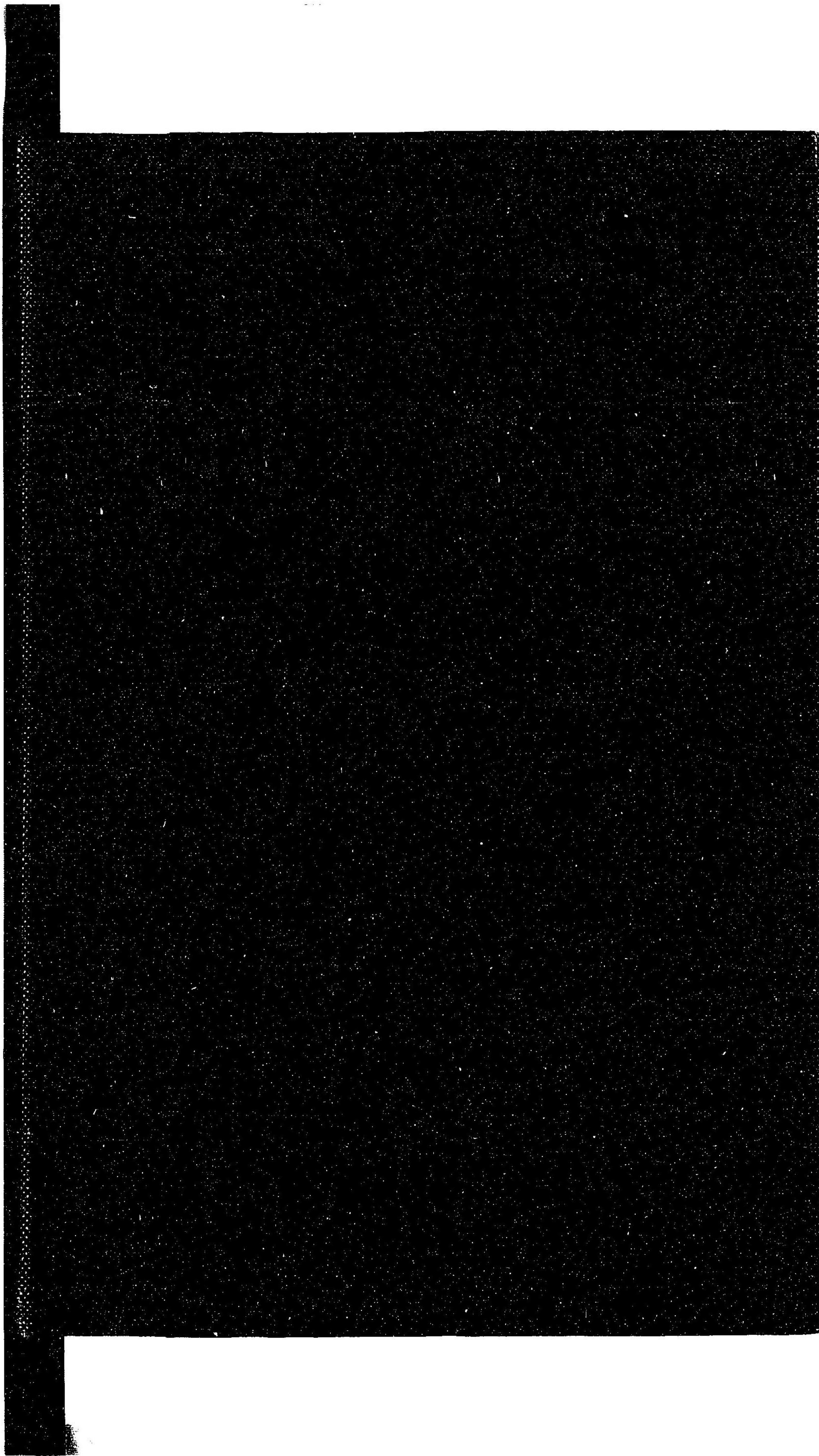
文學士 杉谷泰山君譯 (全一冊菊判)
處世哲學 (三版)
 並製正價四拾錢 郵税金八錢
 特製金五拾五錢 小包八錢

此書は大哲の眼識を以て活動の正邪を辯じ、幸福の眞偽を明にし、人として自己に對し、又境遇に對する用意覺悟を教へ、日常處世の方針を示せり青年をして奮起せしむるものあり、老年をして眉を開かしむるものあり、實に人生の羅針盤なりとす。

文學博士 中村正直君譯 (全一冊四六判)
西國立志編 (廿三版)
 正價金貳拾七錢 郵税金八錢

西國立志編は其譯語の精練にして文章の雄麗なる古來偉人傑士の巨擘と稱せらる而かし、其の言ふ處皆精神の修養と徳育の涵養とに繋り當代の英傑を鼓舞して其の才力を發揮せしめ教育の發達國運の隆昌に資したる甚だ偉なり、故に其に其版権を譲り出版發行せしが幸ひに好評を得し、今や十數版を重ねるに至り、江潮の諸君乞ふ益々愛讀を給へ。





329
102

102366-000-2

329-102

其日庵叢書 第一編

杉山 茂丸/著

M44

EAG-0226



